

深江北町遺跡

第9次

埋蔵文化財発掘調査報告書

— 葦屋驛家関連遺跡の調査 —

2002

神戸市教育委員会

卷頭写真図版 1



678



474



473

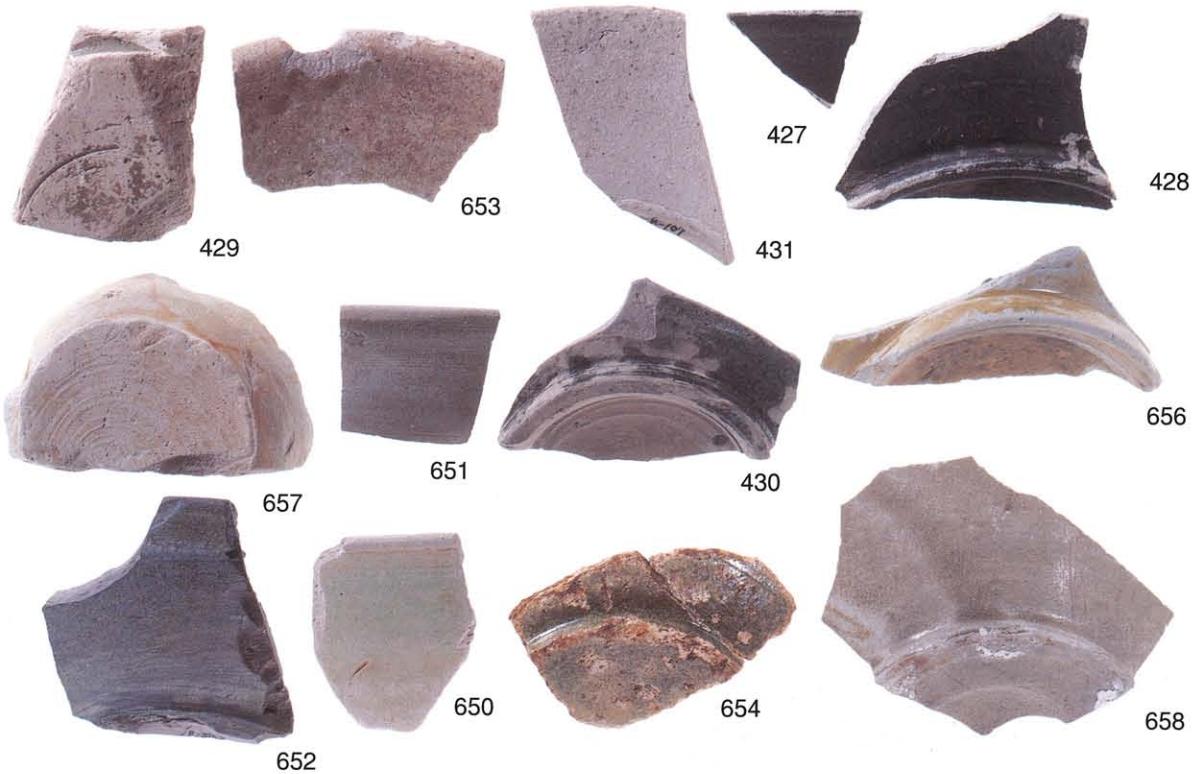
木簡1~3



1 墨書土器「驛」



262



2 施釉陶器・越州窯系青磁

卷頭写真図版 3



SX06出土の土器

深江北町遺跡

第9次

埋蔵文化財発掘調査報告書

— あしやのうまや
葦屋驛家関連遺跡の調査 —

2002

神戸市教育委員会

序

阪神・淡路大震災のあの日から7年にも及ぶ歳月が過ぎ、神戸の街も明るさと元気に満ち、ようやく元の姿を取り戻しつつあります。しかししながら、本当の意味での復興までには、まだまだ歳月が必要と考えられます。

こうした中、依然として市街地を中心にして、震災復興の土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査も継続して実施しているところです。

今回報告します深江北町遺跡第9次調査は、民間マンション建設に先立つもので、奈良時代後半を主とした大型の掘立柱建物をはじめとする遺構群が確認され、「驛」をはじめとする墨書き土器や支給伝票木簡ほかの木製品も多数出土し、貴重な資料が次々と発見されました。これらの発見は、律令期に古代山陽道に沿って設置された“葦屋驛家”に関連するものと考えられます。

以上のような成果をまとめた本書が、地域の歴史研究あるいは文化財の保護・普及啓発の資料として、今後市民の方々をはじめとする多くの方々に広く活用されれば幸いです。

最後にはなりましたが、現地での発掘調査事業の円滑な推進ならびに報告書作成までにご協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は神戸市東灘区深江北町1丁目3・4・5・6に所在する深江北町遺跡第9次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査はライオンズガーデン芦屋西のマンション建設に伴うもので、神戸市教育委員会が株式会社大京(代表取締役長谷川正治)からの委託を受けて、現地調査を平成12年5月8日～平成12年7月31日まで実施した。調査対象面積は約3000m²である。また、遺物の整理業務についても、平成13年度に改めて委託を受け、神戸市埋蔵文化財センターで実施した。
3. 本書の作成は調査担当者がそれぞれに分担して執筆し、各文末にその文責を記した。編集は山本雅和が主に行い、阿部敬生・中谷正がこれを補助した。
4. 遺物の写真撮影は、奈良文化財研究所　牛嶋茂氏の撮影指導の下、杉本和樹氏(西大寺フォト)が行った。
5. 木簡および墨書き器の文字資料については、奈良国立文化財研究所史料調査室長(当時)館野和己氏を初め、渡辺晃宏、馬場基、吉川聰、古尾谷知浩の各氏に釈読いただきました。なお、巻頭写真図版1の木簡については奈良国立文化財研究所(当時)にて牛嶋茂、中村一郎、杉本和樹の各氏に撮影いただいたものである。
6. 動物遺存体の馬歯については、奈良文化財研究所　松井章氏に鑑定していただいた上、コメントをいただきました。コメントの詳細については、第Ⅱ章-(7)で千種浩・中村大介がまとめた。
7. 出土した木製品の樹種同定、土壤の花粉分析・珪藻分析については、株式会社パレオ・ラボに分析業務を委託した。成果については、第Ⅲ章でまとめて報告する。
8. 本書で使用した方位・座標は平面直角座標系第V系で、標高は東京湾中等潮位(T.P.)で表示した。
9. 現地での発掘調査および遺物の整理にあたっては下記の関係諸機関ならびに諸氏にご協力いただきました。ここに記して感謝いたします。

株式会社 大京　　大林組株式会社　神戸支店　　大林道路株式会社

安西工業株式会社　　株式会社ジオテクノ関西

木簡学会

大村敬通、小川真理子、小川良太、篠宮正、竹村忠洋、辻康男、西口圭介、櫃本誠一
別府洋二、光谷拓実、森岡秀人、山田清朝、山本三郎、渡辺昇

目 次

序 例 言 目 次

I. はじめに

(1)	深江北町遺跡の立地と歴史的環境	1
(2)	これまでの調査の成果	4
(3)	第9次調査の経緯と経過	5
a)	調査に至る経緯	5
b)	調査組織	6
c)	調査の経過	6

II. 遺構と遺物

(1)	基本層序	11
(2)	弥生時代後期末～古墳時代前期（第3遺構面）	13
(3)	古墳時代後期	17
(4)	奈良時代前半～平安時代前期（第2遺構面）	19
a)	柵	19
b)	掘立柱建物	19
c)	掘立柱建物を構成しないピット	31
d)	溝	38
e)	土坑	54
f)	流路	60
(5)	平安時代後期（第1遺構面）	82
(6)	遺構に伴わない遺物	93
(7)	馬齒の観察	99

III. 出土材と古環境の調査

(1)	自然科学的分析資料のサンプリング	105	
(2)	出土した木製品の樹種同定	（株）パレオ・ラボ 松葉礼子	107
(3)	花粉化石群集	（株）パレオ・ラボ 新山雅広	135
(4)	堆積物中の珪藻化石群集	（株）パレオ・ラボ 藤根 久	141

IV. まとめ

(1)	遺跡の形成と環境	149
(2)	遺構の変遷	150
(3)	遺物の検討	155
a)	土器類	155
b)	瓦	157
c)	木製品—特に木簡を中心に—	157
(4)	遺跡の性格 —古代山陽道と葦屋驛家に関連して—	158
(5)	おわりに	159

報告書抄録

凡　例

- 1 出土土器の観察表のうち、口径・器高・底径はcmで表記し、残存率については%表記である。また、器種名については町田章編 奈良国立文化財研究所30周年記念学報（学報第40冊）『平城宮発掘調査報告X I 第1次大極殿地域の調査』奈良国立文化財研究所 1982 に準拠した。
- 2 木製品の記述にあたっては、町田章・上原真人編 奈良国立文化財研究所史料第27冊『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 1985 に準拠した。

挿図目次

図1 深江北町遺跡の位置	1	図48 S D03実測図	38
図2 周辺の遺跡 分布図	3	図49 S D03出土の遺物	39
図3 第9次調査地点と既往の調査地点	5	図50 S D05・06実測図	40
図4 調査区設定図	7	図51 S D05出土の木製品	40
図5 調査区平面図（第2遺構面）	8	図52 S D06出土の遺物	41
図6 4区東西 土層断面図	12	図53 S D06出土の木製品	42
図7 断ち割りトレンチの配置	13	図54 S D07実測図	44
図8 5区 断ち割りトレンチ平面図・西壁土層断面図	14	図55 S D07出土の土器	45
図9 弥生末～古墳前期の土器	15	図56 S D07出土の木製品	46
図10 弥生末～古墳前期の木製品	16	図57 S D08実測図	47
図11 黄色砂出土の土器	17	図58 S D08出土の土器・平瓦	48
図12 西半区 遺構平面図	18	図59 S D08出土の木製品	49
図13 S A01実測図	19	図60 S D09実測図	51
図14 S B01-P14・12出土の土器	19	図61 S D09出土の土器	52
図15 S B01実測図	20	図62 S D09出土の平瓦	53
図16 S B01出土の木製品	21	図63 S X06実測図	55
図17 S B02実測図	22	図64 S X06出土の土器（1）	56
図18 S B02-P11・12出土の土器	23	図65 S X06出土の土器（2）	57
図19 S B02出土の木製品	23	図66 S X04出土の土器	57
図20 S B03実測図	24	図67 S X07出土の木製品	58
図21 S B03出土の木製品	25	図68 S X08～12出土の土器	58
図22 S B03-P5出土の土器	26	図69 S X08～12実測図	59
図23 S B04実測図	27	図70 2区北壁土層断面図（S R01横断面）	60
図24 S B04-P2掘形出土の土器	27	図71 S R01平面図	61
図25 S B04出土の木製品	27	図72 S R01西岸の杭列実測図	62
図26 S B05-P1掘形出土の木製品	28	図73 S R01西岸の杭列の杭材	63
図27 S B05実測図	28	図74 S R01出土の土器（1）	65
図28 S B06実測図	29	図75 S R01出土の土器（2）	66
図29 S B06出土の土器	29	図76 S R01出土の土器（3）	67
図30 S B07実測図	30	図77 S R01出土の土器（4）	69
図31 S B07出土の土器	30	図78 S R01出土の土器（5）	70
図32 S P09実測図	31	図79 S R01出土の土器（6）	71
図33 S P09出土の土器	31	図80 S R01出土の軒瓦	72
図34 S P42実測図と出土の土器	31	図81 S R01出土の丸瓦	73
図35 S P44実測図	32	図82 S R01出土の平瓦	74
図36 S P44出土の柱材	32	図83 S R01出土の木簡	75
図37 S P48実測図と柱材	32	図84 S R01出土の木製品（1）	76
図38 S P51実測図	33	図85 S R01出土の木製品（2）	78
図39 S P51出土の黒色土器	33	図86 S R01出土の鉄製品	81
図40 S P88実測図	33	図87 S R01出土の石器	81
図41 S P88出土の木製品	33	図88 S B08実測図	82
図42 S P123実測図と出土木製品	34	図89 1区第1遺構面平面図・土層断面図	83
図43 S P124実測図と出土木製品	35	図90 2・3区第1遺構面平面図	84
図44 S P125実測図と出土遺物	35	図91 S B08出土の遺物	85
図45 S P160実測図と出土遺物	36	図92 S D01出土の遺物	85
図46 S P162出土の木製品	37	図93 S D04出土の土器	85
図47 S P256実測図と出土木製品	37	図94 S D01実測図	86

図95 S X03実測図	87	図105 遺構に伴わない遺物（3）（金属器）	95
図96 S X03出土の遺物	87	図106 遺構に伴わない遺物（4）（滑石製品）	95
図97 S X02実測図	88	図107 遺構に伴わない遺物（5）（木簡）	96
図98 S X02出土の木製品	89	図108 遺構に伴わない遺物（6）（木製品）	97
図99 S X14実測図	90	図109 遺構に伴わない遺物（7）（木製品）	98
図100 S X14出土の木製品	90	図110 土壤サンプル採取地点の位置	105
図101 第1遺構面の遺構に伴わない遺物	91	図111 花粉分析・珪藻分析試料採取地点の層位	106
図102 第1遺構面の遺構に伴わない石製品	92	図112 花粉化石分布図	137
図103 遺構に伴わない遺物（1）	94	図113 堆積物中の珪藻化石分布図	147
図104 遺構に伴わない遺物（2）（墨書き土器）	95	図114 遺構の変遷	151

挿図写真目次

挿図写真1 発掘調査作業にトライする中学生	5
挿図写真2 マンションモデルルームでの速報展示	5
挿図写真3 深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真（1）	125
挿図写真4 深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真（2）	126
挿図写真5 深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真（3）	127
挿図写真6 深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真（4）	128
挿図写真7 深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真（5）	129
挿図写真8 深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真（6）	130
挿図写真9 深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真（7）	131
挿図写真10 深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真（8）	132
挿図写真11 深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真（9）	133
挿図写真12 深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真（10）	134
挿図写真13 産出した花粉化石（1）	139
挿図写真14 産出した花粉化石（2）	140
挿図写真15 堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真	148

表 目 次

表1 深江北町遺跡 調査一覧	4
表2 弥生末～古墳前期の土器 観察表	15・16
表3 弥生末～古墳前期の木製品の法量と樹種	16
表4 黄色砂出土の土器 観察表	17
表5 S B01・02出土の木製品 法量と樹種	23
表6 S B03・04・05出土の木製品 法量と樹種	26
表7 S P88出土木製品の法量と樹種	34
表8 S P124出土木製品の法量と樹種	35
表9 S P160出土木製品の法量と樹種	36
表10 S D03出土の土器 観察表	38
表11 S D06出土木製品の法量と樹種	43
表12 S D07出土の土器 観察表	46
表13 S D07出土木製品の法量と樹種	46
表14 S D08出土の土器 観察表	48
表15 S D08出土木製品の法量と樹種	50

表16	S D09出土の土器 観察表	52・53
表17	S X06出土の土器 観察表	54
表18	S R01西岸の杭材の法量と樹種	64
表19	S R01出土の土器 観察表	68・69
表20	S R01出土の木製品の法量と樹種	77・79・80
表21	S D01出土の土器 観察表	85
表22	第1遺構面の遺構に伴わない遺物 観察表	91
表23	遺構に伴わない土器 観察表	95
表24	遺構に伴わない木製品の法量と樹種	96・98
表25	馬歯 一覧表	100
表26	神戸市内出土の馬歯 一覧表	101～104
表27	深江北町遺跡第1次調査の樹種同定結果	107
表28	深江北町遺跡第9次調査出土木材の時期別集計	111
表29	奈良～平安時代の製品別集計（大型の製品・加工材中心）	112
表30	奈良～平安時代の製品別集計（小型の製品中心）	113
表31	弥生後期～古墳後期・平安時代後期の結果	113
表32	深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果	115～124
表33	花粉化石一覧表	136
表34	堆積物中の珪藻化石算出表	144～145
表35	堆積物の特徴とその堆積環境	146
表36	奈良～平安時代前期の掘立柱建物 対照表	152～153
表37	墨書き土器一覧表	156

卷頭写真図版目次

卷頭写真図版1	木簡 1～3
卷頭写真図版2	1 墨書き土器『驛』
卷頭写真図版3	2 施釉陶器・越州窯系青磁
	S X06出土の土器

写真図版目次

写真図版1	1 2区 断ち割りトレンチ全景（南西から）	2 S B01-P 5断面
	2 土師器検出状況（南東から）	3 S B01-P 6断面
	3 2区北壁の土層断面（南から）	4 S B01-P 8断面
写真図版2	1 4区東部 断ち割りトレンチ近景（南東から）	5 S B01-P 9断面
	2 弥生土器検出状況	6 S B01-P 14
写真図版3	1 4区西部 断ち割りトレンチ近景（南西から）	写真図版11 1 S B01-P 7とS B02-P 6断面
	2 5区 断ち割りトレンチ 西壁の土層断面	2 S B02-P 4断面
写真図版4	5区 断ち割りトレンチ全景（北から）	3 S B02-P 9断面
写真図版5	調査区西部 全景（南から）	4 S B02-P 11断面
写真図版6	調査区西部 全景（東から）	写真図版12 1 S B03-P 1断面
写真図版7	S B01～S B05 近景（南東から）	2 S B03-P 4断面
写真図版8	1 4区中央部 全景（南から）	写真図版13 1 S B03-P 2断面
	2 4区中央部 近景（西から）	2 S B03-P 2根固め
写真図版9	1 S A01-P 1断面	3 S B03-P 5断面
	2 S A01-P 2断面	4 S B03-P 6断面
	3 S A01-P 3断面	写真図版14 1 S B04-P 1断面
写真図版10	1 S B01-P 1断面	2 S B05-P 5とS B01-P 3断面

写真図版15	1 S B06 - P 2 断面 2 S B06 - P 4 断面 3 S B06 - P 6 断面 4 S B07 - P 3 断面 5 S P09断面 6 S P44断面	写真図版32 S P 88・123・124出土の木製品、S P 125 出土の土器
写真図版16	1 S P48断面 2 S P51近景（南東から） 3 S P162近景（北から）	写真図版33 S P 125・160・162出土の木製品
写真図版17	1 S P88断面 2 S P160断面	写真図版34 S D03出土の遺物
写真図版18	1 S X06中層の遺物検出状況（西から） 2 S X06下層の遺物検出状況と土層断面	写真図版35 S D05・06出土の遺物
写真図版19	1 S D07全景（南から） 2 S D08全景（北東から）	写真図版36 S D06出土の木製品
写真図版20	1 S D09全景（南東から） 2 S D09遺物検出状況（東から）	写真図版37 S D07出土の土器と木製品
写真図版21	1 2・3区 S R01全景（東から） 2 同（南西から）	写真図版38 S D08出土の土器
写真図版22	1 S R01西岸の杭列全景（南から） 2 S R01西岸の杭列近景（東から）	写真図版39 S D08出土の木製品・石製品
写真図版23	1 4区東部 S R01全景（東から） 2 S R01馬歯検出状況	写真図版40 S D08出土の木製品
写真図版24	1 S B08全景（南から） 2 S B08 - P 1 断面 3 S B08 - P 5 断面 4 S B08 - P 6 断面 5 S B08 - P 7 断面	写真図版41 S D09出土の土器
写真図版25	1 S D01全景（西から） 2 S D01遺物検出状況（西から）	写真図版42 S D09出土の土器・平瓦
写真図版26	1 S X03全景（西から） 2 S X02近景（南西から） 3 S X14全景（北から）	写真図版43 S X06出土の土器
写真図版27	弥生末～古墳前期の土器	写真図版44 S X06出土の土器・石製品
写真図版28	弥生末～古墳前期の土器・木製品、古墳後期の土器	写真図版45 S R01西岸の杭材
写真図版29	S B01出土の土器と木製品	写真図版46 S R01出土の土器（1）
写真図版30	S B02・03出土の木製品	写真図版47 S R01出土の土器（2）
写真図版31	S B04・05、S P44・48出土の木製品、S P51出土の土器	写真図版48 S R01出土の土器（3）
		写真図版49 S R01出土の墨書土器（1）
		写真図版50 S R01出土の墨書土器（2）
		写真図版51 S R01出土の土器・軒瓦
		写真図版52 S R01出土の丸瓦
		写真図版53 S R01出土の平瓦
		写真図版54 S R01出土の木簡
		写真図版55 S R01出土の木製品（1）
		写真図版56 S R01出土の木製品（2）
		写真図版57 S R01出土の木製品（3）
		写真図版58 S R01・S D01・S D04・S X03出土の遺物
		写真図版59 S X02・S X14出土の木製品
		写真図版60 遺構に伴わない土器・石製品
		写真図版61 遺構に伴わない墨書土器・金属器・滑石製品、飯蛸壺
		写真図版62 漁網鉤
		写真図版63 遺構に伴わない木製品（1）
		写真図版64 遺構に伴わない木製品（2）
		写真図版65 S D06・S D07・S R01出土の馬歯
		写真図版66 S R01出土の馬歯
		写真図版67 遺構に伴わない馬歯

I. はじめに

(1) 遺跡の立地と歴史的環境

a) 遺跡の地理的環境

深江北町遺跡は神戸市東灘区深江北町2丁目を中心に存在する遺跡である。昭和59年度の県営住宅の改築に伴い、兵庫県教育委員会により初めて遺跡の存在を確認した。今まで幾度にもわたる試掘・発掘調査により東西約700m、南北約350mに広がる弥生時代後期～中世に至る複合遺跡であることが判明している。

現在では海岸部の埋め立てや、市街地化が進み景観がまったく変わってしまったが、明治時代の仮製地形図では遺跡の付近は水田や湿地などが広がっていたことが分かる。これまでの発掘調査で得られた成果からも中世以降には水田や湿地状の地形が広がっていたことが判明している。近くを流れる芦屋川は現在天井川化しており、過去に昭和13年の阪神大水害のような氾濫を繰り返していたことを今に伝えている。

また、高橋学氏の考察によると⁽¹⁾、深江北町遺跡が立地する芦屋川流域では扇状地の発達が未熟で、下流付近でわずかな扇状地形が見られるのみとされる。そのため、河口付近には砂堆と呼ばれる細長い砂丘状の高まりが数列形成される。かつてはこの砂堆上に遺跡は存在しないと考えられていたが、近年の市街地の開発に伴う発掘調査により縄文時代以降の遺跡の存在が明らかになっている。深江北町遺跡もその例外に漏れず、標高3m前後の砂堆上に立地している。

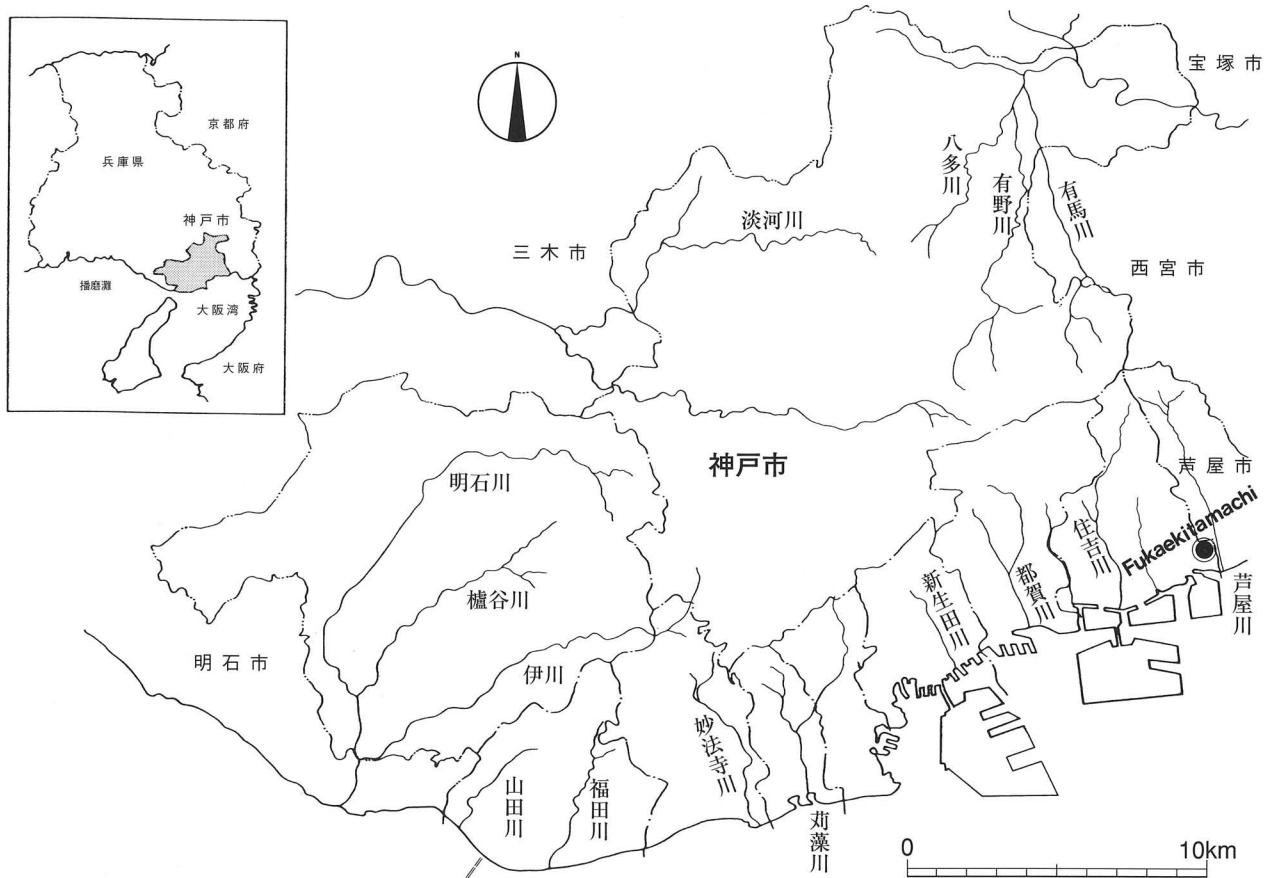
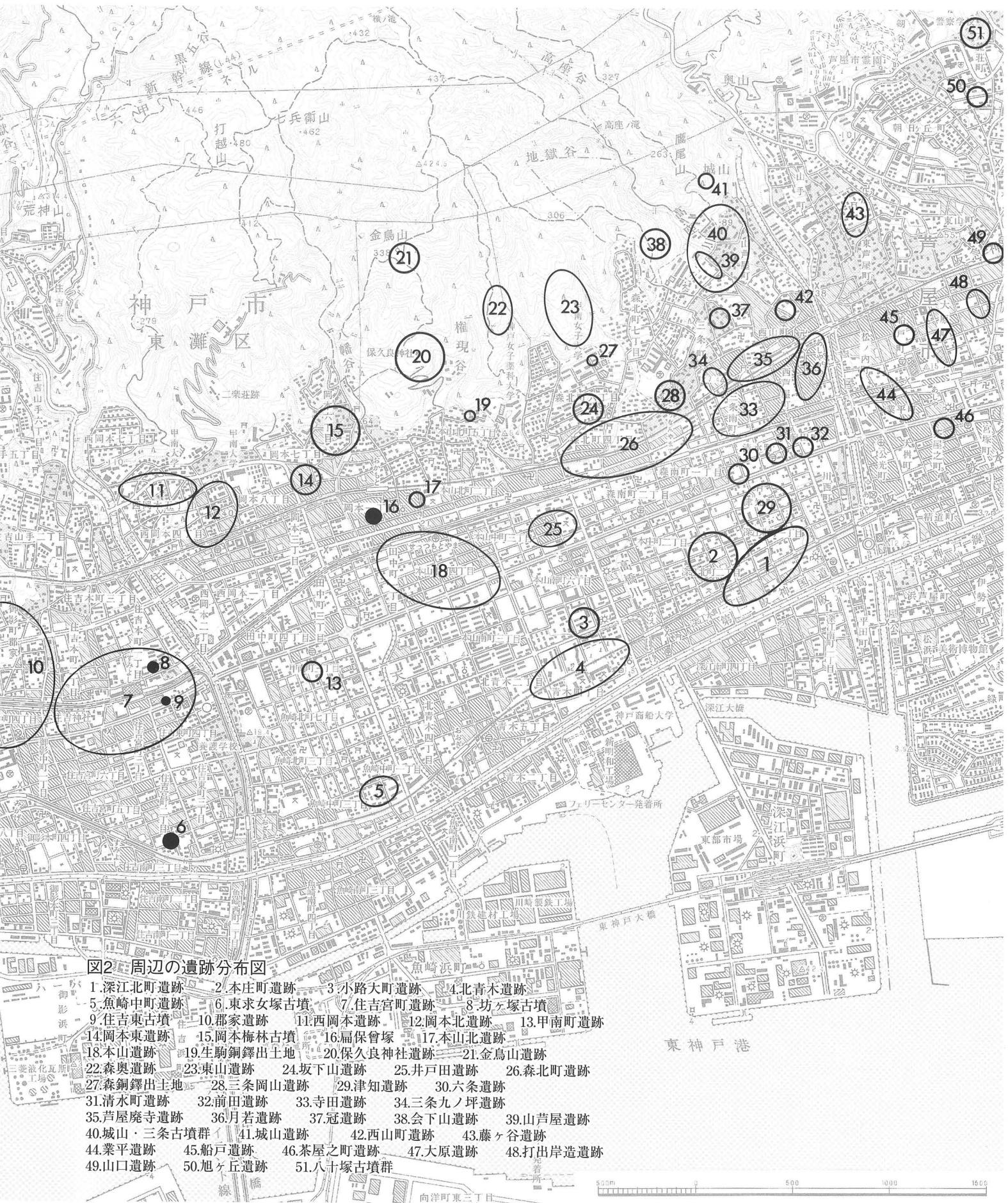


図1 深江北町遺跡の位置

b) 遺跡の歴史的環境（周辺の遺跡）

- 深江北町遺跡の立地する六甲山南麓では、旧石器時代から遺跡が確認されている。
- 旧石器時代** 旧石器時代には、西岡本遺跡⁽²⁾・芦屋市の朝日ヶ丘遺跡⁽³⁾でナイフ型石器が確認されており、今後の遺跡の増加が期待される。
- 縄文時代** 縄文時代になると、本庄町遺跡⁽⁴⁾・本山遺跡⁽⁵⁾・北青木遺跡⁽⁶⁾・西岡本遺跡・朝日ヶ丘遺跡・山芦屋遺跡⁽⁷⁾・業平遺跡⁽⁸⁾などの遺跡が存在する。山芦屋遺跡では草創期、本庄町遺跡では前期・後期の土器溜りが確認されている。また、西岡本遺跡では、早期の堅穴住居が発見されている。
- 弥生時代** 弥生時代には、本庄町遺跡・本山遺跡・北青木遺跡・寺田遺跡⁽⁹⁾・業平遺跡などで前期に集落が形成され、本山遺跡では農工具をはじめとする木製品が多量に出土し、当時の農耕技術の一端が明らかになった。中期前半になると一時的に遺跡が減少し、中期後半には本山遺跡・森北町遺跡⁽¹⁰⁾・深江北町遺跡⁽¹¹⁾・住吉宮町遺跡⁽¹²⁾・寺田遺跡などで住居跡等が確認されている。また、東山遺跡⁽¹³⁾・金鳥山遺跡⁽¹⁴⁾・保久良神社遺跡⁽¹⁵⁾・会下山遺跡⁽¹⁶⁾などの高地性集落も形成された。一方、深江北町遺跡・魚崎中町遺跡⁽¹⁷⁾・住吉宮町遺跡では円形周溝墓などの墓が数多く築かれた。また、本山遺跡・生駒銅鐸出土地⁽¹⁸⁾などに銅鐸が埋納されるなど精神生活の変容が窺える。
- 古墳時代** 古墳時代に入り、ヘボソ塚古墳⁽¹⁹⁾・阿保親王塚古墳⁽²⁰⁾などの前期古墳が築かれる。中期末には坊ヶ塚古墳⁽²¹⁾や、住吉東古墳⁽²²⁾が現JR住吉駅前に築かれ、後期にはそれを中心に小型の方墳を主とした群集墳が形成された。一方、山麓部に位置する西岡本遺跡・岡本梅林群集墳⁽²³⁾などの遺跡では、横穴式石室をもつ古墳が築かれた。また、芦屋市域では中期後半に金津山古墳⁽²⁴⁾が築かれ、後期には山麓部に横穴式石室をもつ八十塚古墳群⁽²⁵⁾などが形成された。
- また、郡家遺跡⁽²⁶⁾・森北町遺跡・住吉宮町遺跡・寺田遺跡・月若遺跡⁽²⁷⁾・などで集落が営まれた。
- 奈良～平安時代** 奈良～平安時代には、「三壬子年□」を記した木簡が出土した三条九ノ坪遺跡⁽²⁸⁾、金堂基壇や「寺」の刻印をもつ土器などが確認された芦屋廃寺遺跡⁽²⁹⁾、「小領・大領」の墨書土器が出土した寺田遺跡、葦屋驛家比定地の最有力候補である津知遺跡⁽³⁰⁾、深江北町遺跡など芦屋市との市境に遺跡が集約される。津知遺跡で平成5年度に行われた調査では、大型掘立柱建物や「和銅開珎」・「萬年通寶」の錢貨、円面硯、芦屋廃寺と同瓦など官衙的要素の強い遺物・遺構が確認されている。また、足利健亮氏・吉本昌弘氏・高橋美久二氏の歴史地理学による研究成果⁽³¹⁾からも、葦屋驛家の候補地として挙げられている。今回報告する深江北町遺跡でもこれまで、小型銅鏡（海獸葡萄鏡）・銅製帶金具・斎串・木簡・円面硯・墨書土器等の官衙的要素の強い遺物が数多く出土しており、官衙関連施設であると考えられている。そのため、この地域は寺院・郡衙・驛家を備えた中心的な場所であったという考え方方が生まれている。一方、郡家遺跡は「菟原郡衙」の比定地とされているが、それを決定づけるような遺構・遺物は第1次調査以降あまり確認されていない。しかし、東隣の住吉宮町遺跡でも大型掘立柱建物・墨書土器などが確認されており、付近に官衙的な施設が存在する可能性が高い。（中谷）



(2) これまでの発掘調査の成果

深江北町遺跡で初めて埋蔵文化財発掘調査が実施されたのは昭和59年度にまで遡る。市街地として早くに開発され、地下に眠る遺跡としてはそれまでは全く知られていなかった。昭和61年度に兵庫県教育委員会によって実施された第3次調査C2地区⁽³²⁾で、庄内式併行期の円形周溝墓群が確認されたのは、当時としてはかなり衝撃的であった。また、昭和60年度に実施された第2次調査C1地区では古墳時代後期末の竪穴住居や平安時代前期の掘立柱建物群が確認され、銅製帶金具・小型銅鏡も出土し、官衙関連遺跡としても注目を集めた。

この後は4件の調査が実施されたものの、第2次や第3次を凌ぐような大きな成果を挙げるまでには至らず、平成7年1月17日にはあの忌まわしい阪神・淡路大震災が起きる。深江北町遺跡を含む周辺地区も例外ではなく、人身・家屋に多くの被害を受けたことは言うまでもない。しかしながら、再開発事業地域などに指定されなかつたことから、個人レベルでの復興が暫時進められていったものと考えられる。

一方、深江北町遺跡の北側に隣接し、芦屋市域に広がる津知遺跡でも試掘調査を含めて、これまでに約20回の調査が実施されてきている⁽³³⁾。淡神文化財協会が実施した第2地点⁽³⁴⁾では、平安時代前期の掘立柱建物群が確認され、「和銅開珎」・「萬年通寶」の銭貨、墨書土器、円面硯、綠釉陶器、軒丸瓦などの出土が知られる。

また、これまで歴史地理学の分野⁽³⁵⁾から、古代山陽道の復元と葦屋驛家の比定地についてはいくつかの説によって論及されてきていたが、この津知遺跡第2地点の調査成果によって、津知遺跡の存在が俄然注目されることとなった⁽³⁶⁾。

平成11年度には深江北町遺跡では最も南にあたる、阪神電気鉄道の軌道敷の南側で第8次調査⁽³⁷⁾が実施される。この調査では3時期の遺構面が確認され、第2面に対応する水場と呼ばれた池状遺構から「驛」の墨書土器片が出土している。この墨書土器の評価についての結論は出せなかったが、俄かに「驛家」の存在が浮上してきた調査成果となった。

このような状況の中で、平成12年度に実施したのが、ここに報告する第9次調査である。

表1 深江北町遺跡 調査一覧

次数	調査年度	調査機関	調査面積 (m ²)	調査内容
1	1984	兵庫県教育委員会	1,950	奈良時代以降の水田、時期不詳の土坑・杭列 弥生時代後期～平安時代後期の柱穴
2	1985	兵庫県教育委員会	605	弥生時代後期の溝、飛鳥時代の竪穴住居、奈良～ 平安時代初めの掘立柱建物
3	1986	兵庫県教育委員会	660	古墳時代初めの円形周溝墓群、土器棺墓
4	1987	神戸市教育委員会	50	古墳時代後期～鎌倉時代の落ち込み・ピット
5	1990	兵庫県教育委員会	1,572	弥生時代後期の掘立柱建物・土坑、中世の掘立柱 建物・土坑・水田
6	1993	神戸市教育委員会	50	古墳時代後期～中世の遺物包含層
7	1996	神戸市教育委員会	185	平安時代後半の土坑・溝・ピット
8	1999	神戸市教育委員会	220	古墳時代初めの溝・ピット、古墳時代後期～平安時 代の柱穴・土坑・流路、「驛」の墨書土器
9	2000	神戸市教育委員会	2,670	古墳時代初めの遺物包含層、奈良～平安初めの掘 立柱建物・土坑・溝・流路、平安後期の掘立柱建物

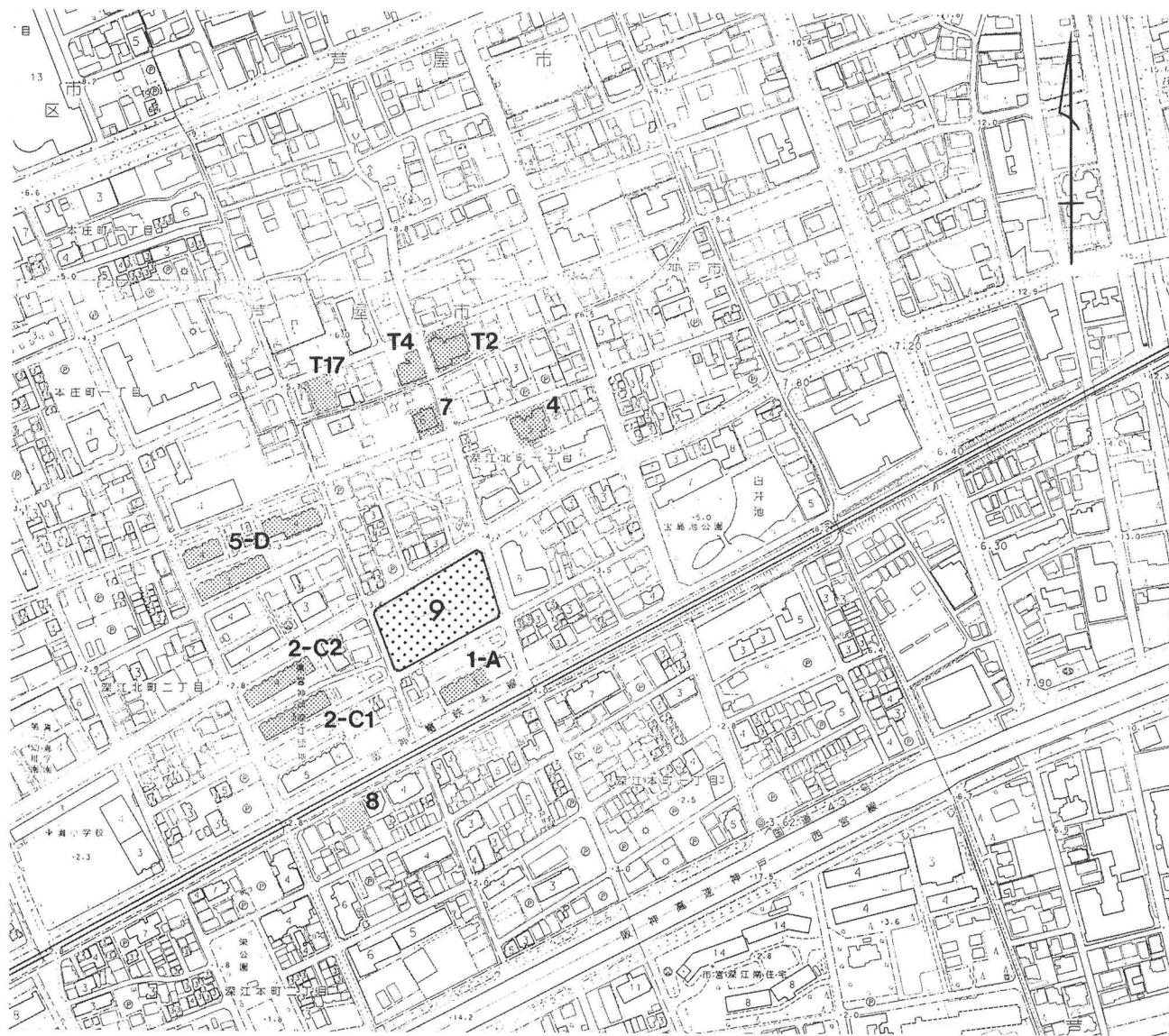


図3 第9次調査地点と既往の調査地点 (Scale:1/5,000) アラビア数字は調査次数 Tは津知遺跡

(3) 第9次調査の経緯と経過

a) 調査に至る経緯

今回の対象地の開発計画が持ち上がったのは、平成6年にまで遡る。当時2棟の兵庫コスモ石油株式会社の社員寮（鉄筋コンクリート3階建、昭和35年前後築）が現地には建っていた。株式会社エステートコスモより提出された「(仮)コスモハイム芦屋」のマンション新築工事計画による埋蔵文化財試掘調査依頼書(S06096)に基づき、平成6年10月5日に実施した試掘調査では、5ヶ所に設定した試掘坑のうち、4ヶ所で遺物包含層が確認され、対象地全域で発掘調査が必要な旨、10月13日付けで教育長名で回答していた。

この後、現地発掘を行うべく、各機関で調整が進められた結果、六甲南麓遺跡調査会が現地調査を実施することで合意が執れ、諸般の手続きも順調に進んでいた。しかし、調査開始寸前になって、阪神・淡路大震災の被災によって開発計画そのものが一時凍結されたため、対象地での開発はしばらく中断した形となっていた。

平成12年1月28日には、株式会社大京より発掘調査依頼書が改めて提出され、具体

的な開発計画が持ち上がった。ここにきて本格的な発掘調査を行うべく、調整が再度行われていった。なお、今回の発掘調査に先立って、既存建物の本格的な解体作業完了後の立会いにおいて、すでに建物基礎が遺跡を破壊している部分が含まれることが確認されていたが、事業面積約4500m²のうち、基本的には建物基礎で遺跡が破壊される部分の約3000m²については全面調査を実施することで合意し、発掘調査を開始することとなった。

b) 調査組織 (平成12・13年度)

神戸市文化財保護審議会 史跡・考古担当委員

檀上 重光 元神戸女子短期大学教授

工楽 善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教 育 長 木村良一

社会教育部長 水田裕次（12年度）・岩畔法夫（13年度）

文化財課長 大勝俊一（12年度）・桑原泰豊（13年度）

社会教育部主幹 渡辺伸行

埋蔵文化財調査係長 丹治康明

文化財課主査 宮本郁雄・丸山潔・菅本宏明

事務担当学芸員 山口英正（12年度）・斎木巖（13年度）

調査担当学芸員 阿部敬生・中谷正・山本雅和

保存科学担当学芸員 千種浩（13年度主査に昇任）・中村大介

遺物整理担当学芸員 谷正俊（12年度）・黒田恭正（13年度）

c) 調査の経過

現地での調査 発掘調査作業は1区の重機掘削を5月8日から開始した。1区では、もともとの社員寮建設の基礎工事とその撤去工事のため、かなり攪乱を受け、良好な土層が残っている部分はわずかであった。続けて、2区～3区の重機掘削を行っていったが、当初予定より掘削・搬出土量が多くなってきたため、相方協議の結果、4区の掘削が終わった段階で一旦重機掘削を中断し、東側の調査区の調査がある程度見通しのついた段階で改めて西側（5区）の重機掘削を開始することとなった。調査の結果、2区～3区ではほぼ全域が流路であったため、さらに予想よりも掘削土量が多くなったことは否めない。また、多量の土器類とともに木簡を含む木製品が多量に共伴したことを見逃せない重要な調査成果である。

トライヤるウィーク なお、この間施主である株式会社大京側の快諾を得た上で、2週間にわたる調査現場へのトライヤるウィークの中学生合計17名（東灘区御影中学校、須磨区西落合中学校、西区井吹台中学校）の受け入れも調査作業と並行して実施した。

6月中旬からは5区の重機掘削を再開し、あわせて掘削残土によってすでに調査の完了していた1区の埋め戻しを実施した。この重機掘削作業の完了とともに、4区西部から5区の調査を本格的に開始した。4区中央部～5区にかけては奈良～平安時代



図4 調査区設定図

の柱穴や溝などの遺構が集中して確認され、その検出と掘削にかなり手間取る結果となった。加えて、梅雨に少なかった降雨量もこの調査最終段階にきて多くなり、さら



挿図写真1
発掘調査作業にトライする中学生



挿図写真2
マンションモデルルームでの速報展示

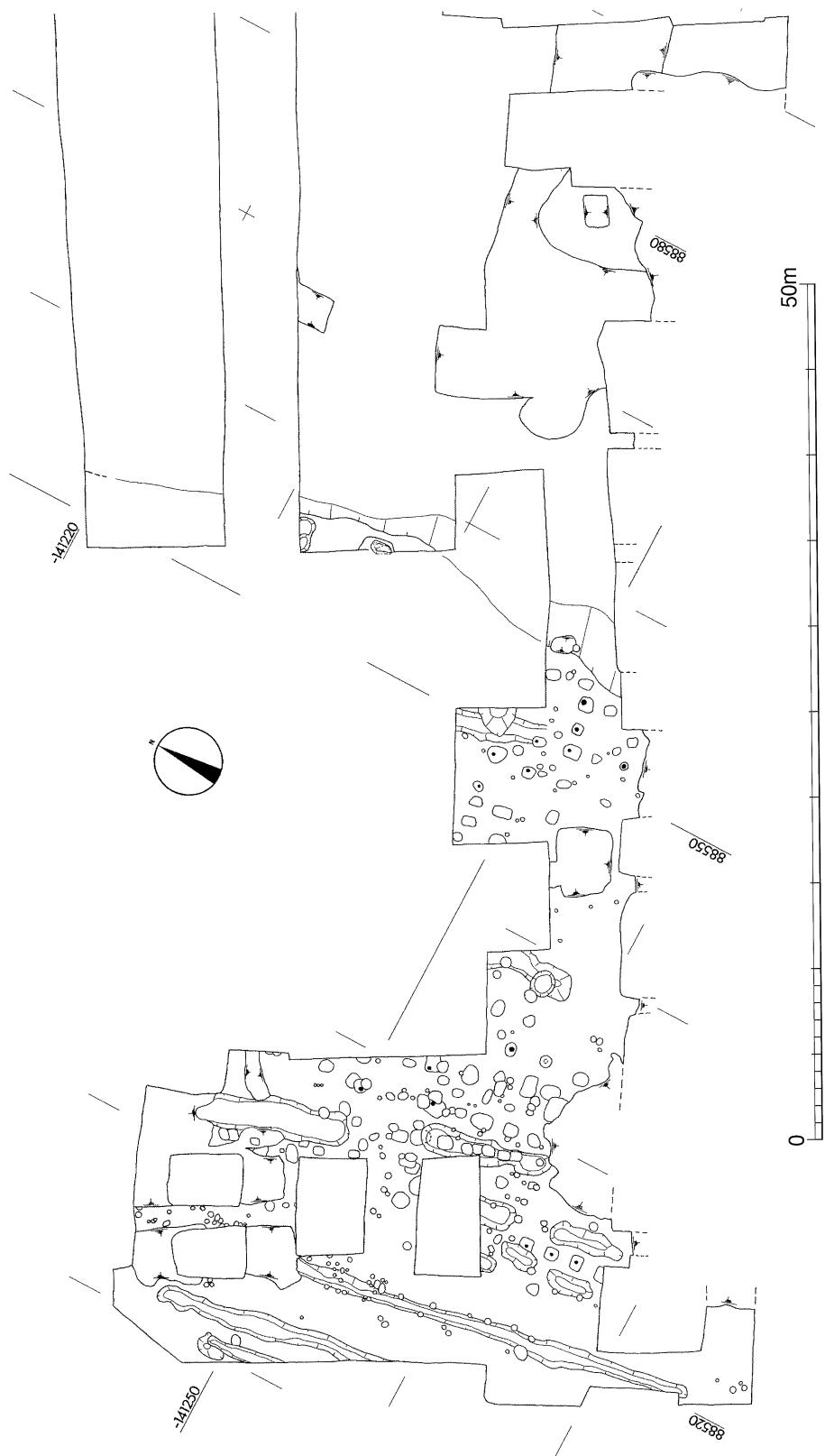


図5 調査区平面図（第2遺構面）

に厳しさに拍車をかけることとなった。

なお、現地調査段階では把握しきれなかった柱穴から構成される掘立柱建物も、調査完了後に改めて検討した結果、第Ⅱ章で報告するように、少なくとも7棟の存在が明らかとなった。さまざまな遺構・遺物とともに多くの整理課題が提示された発掘調査であった。

遺物整理

遺物の整理作業は、現地での発掘調査撤収とほとんど同時に、コンテナ約70箱の遺物の水洗作業を神戸市埋蔵文化財センターで開始した。水洗作業が完了した段階で、墨書土器の抽出も可能となったため、調査段階から出土が判明していた木簡3点についてもあわせて、9月7日に奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室へ持ち込み、判読と解釈をお願いし、あわせて写真撮影もお願いした。

記者発表

また、こうして木簡・墨書土器の判読・解釈の見通しがついた9月21日には、『幻の「葦屋駅家」関連遺跡の発見』と題して、神戸市役所記者クラブにおいて深江北町遺跡第8・9次調査の成果について公表した。

この後順次遺物の注記・接合・復元・補強・彩色を継続的に実施していくが、到底年度内で作業が完了しなかったため、平成13年度に改めて整理作業について株式会社大京と委託契約を締結し、さらに整理作業を実施していく。

また、一部の整理作業の完了した資料については、神戸市埋蔵文化財センターで開催された企画展示『古代のメインロード～山陽道沿線物語～』⁽³⁸⁾の展示にも供された。また、7月下旬には株式会社大京からの依頼を受けて、調査現場に建設中のマンション・モデルルーム内で約1週間調査成果のパネルや一部の遺物を展示した。8月上旬には本報告書に掲載する遺物の写真撮影を実施した。このような作業と並行しながら本報告書の原稿執筆・作成を調査担当者が分担して順次行った。(山本)

- 註（1）
 - a) 高橋学「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅰ」 兵庫県文化財調査報告第36冊『北青木遺跡』兵庫県教育委員会 1986
 - b) 高橋学「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅲ」兵庫県文化財調査報告第54冊『神戸市東灘区 深江北町遺跡—県営神戸深江団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』兵庫県教育委員会 1988
- (2)
 - a) 西岡誠司「西岡本遺跡第3次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1998
 - b) 浅岡俊夫『神戸市東灘区 西岡本遺跡』 六甲山麓遺跡調査会 2001
- (3)
 - a) 藤井祐介・森岡秀人『芦屋市文化財調査報告第8集『朝日ヶ丘縄文遺跡 会下山弥生遺跡』』芦屋市教育委員会 1973
 - b) 山中一郎ほか『昭和63年度埋蔵文化財速報『朝日ヶ丘遺跡 第4次発掘調査の概要』』芦屋市教育委員会 1988
- (4)
 - a) 片岡肇編『神戸市東灘区 本庄町遺跡発掘調査報告書』財団法人古代学協会 1985
 - b) 別府洋二『兵庫県文化財調査報告第92冊『—郵政省宿舎建替えに伴う埋蔵文化財調査報告書—』本庄町遺跡』兵庫県教育委員会 1991
 - c) 谷正俊「本庄町遺跡第8次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 2001
- (5)
 - 安田滋「本山遺跡第17次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1998
- (6)
 - a) 小川良太・山下史朗『兵庫県文化財調査報告第36冊『北青木遺跡』』兵庫県教育委員会 1986
 - b) 菅本宏明・石島三和編『北青木遺跡発掘調査報告書—第3次調査—』 神戸市教育委員会 1999
- (7)
 - 森岡秀人「山芦屋遺跡(S8地点)」「芦屋市文化財調査報告書」第27集 芦屋市教育委員会 1996
- (8)
 - 辻林浩ほか「業平遺跡(第25地点)」・小松譲ほか「業平遺跡(第26地点)」・鎌田勉ほか「業平遺跡(第27地点)」・中村啓太郎ほか「業平遺跡(第29地点)」・吉田宣夫ほか「業平遺跡(第31地点)」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997

- (9) a) 南博史編『芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書』 古代学協会 1985
 b) 重藤輝行ほか 芦屋市文化財調査報告第32集『寺田遺跡第95地点 発掘調査概要報告書』 芦屋市教育委員会 1999
- (10) a) 西岡巧次『森北町遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 1987
 b) 丹治康明・須藤宏「森北町遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1992
- (11) 山下史朗編『兵庫県文化財調査報告第54集『神戸市東灘区 深江北町遺跡—県営神戸深江団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 兵庫県教育委員会 1988
- (12) a) 小野田義和・秦憲二『住吉宮町遺跡（第17次・第18次調査）』 神戸市教育委員会 1998
 b) 安田滋編『住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 2001
- (13) 宮本郁雄「本山町東山遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1987
- (14) 新修神戸市史編集委員会編「金鳥山遺跡」『新修 神戸市史』歴史編I 自然・考古 1989
- (15) 新修神戸市史編集委員会編「保久良神社遺跡」『新修 神戸市史』歴史編I 自然・考古 1989
- (16) 村川行弘・石野博信『芦屋市文化財調査報告第3集『会下山遺跡』 芦屋市教育委員会 1964
- (17) 岩田明弘編『魚崎中町遺跡（第3次調査）』 神戸市教育委員会 1996
- (18) a) 喜谷美宣「祭祀と埋納」『新修 神戸市史』歴史編I 自然・考古 新修神戸市史編集委員会 1989
 b) 神戸市教育委員会編『本山遺跡 第12次調査の概要』 1991
- (19) 新修神戸市史編集委員会編『ヘボソ塚古墳』『新修 神戸市史』歴史編I 自然・考古 1989
- (20) a) 森岡秀人「阿保親王塚古墳」『兵庫県史』考古資料編 兵庫県 1992
 b) 芦屋市立美術館編『古墳と伝承—移りゆく“塚”へのまなざし展図録』 1993
- (21) 菅本宏明「坊ヶ塚古墳試掘調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 2000
- (22) 丹治康明ほか「住吉宮町遺跡 第9次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1994
- (23) 新修神戸市史編集委員会編「東灘区のその他の遺跡」『新修 神戸市史』歴史編I 自然・考古 1989
- (24) 森岡秀人「金津山古墳 第9地点」『芦屋市文化財調査報告 第27集』 芦屋市教育委員会 1996
- (25) 森岡秀人ほか「八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳の発掘調査」『芦屋市文化財調査報告第22集『平成3年度国庫補事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書』 芦屋市教育委員会 1992
- (26) a) 神戸市考古館編『郡家大蔵遺跡』『地下に眠る神戸の歴史展図録』 1980
 b) 丸山潔「郡家遺跡大蔵地区第2次調査」・安田滋「郡家遺跡下山田地区第2次調査」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1990
- (27) 森岡秀人ほか『芦屋市文化財調査報告第30集『若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書』 芦屋市・芦屋市教育委員会 1999
- (28) 高瀬一嘉ほか『兵庫県文化財調査報告第168冊『三条九ノ坪遺跡』 兵庫県教育委員会 1997
- (29) a) 村川行弘『芦屋市文化財調査報告第7集『芦屋廃寺址』 兵庫県芦屋市教育委員会 1970
 b) 芦屋市教育委員会『現地説明会ノート 芦屋廃寺跡（第62地点）発掘調査—平成11年度震災復興埋蔵文化財調査—』 1999
 c) 芦屋市教育委員会『公開展示説明会資料 「寺」字刻印土器と芦屋廃寺跡—第75地点発掘調査の成果から』 2001
- (30) 竹村忠洋編『芦屋市文化財調査報告第34集『津知遺跡第17地点発掘調査報告書』 芦屋市教育委員会 1999
- (31) 高橋美久二『古代交通の考古地理』 大明堂 1995
- (32) 註11に同じ
- (33) 篠宮正『芦屋市文化財調査報告第37集『津知遺跡（第19地点） 従前居住用住宅（（仮称）津知町住宅）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 芦屋市教育委員会 2000
- (34) a) 阿部嗣治「津知遺跡の発掘調査（1）・（2）」『のじぎく文化財だより』第17・18号 1993
 b) 森岡秀人「津知遺跡第2地点の発掘調査の概要」『芦屋市文化財調査報告第34集『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書』 芦屋市教育委員会 1999
- (35) a) 吉本昌弘「摂津国八部・菟原両郡の古代山陽道と条里制」『人文地理』第33巻第4号 1981
 b) 足利健亮「山陽道の歴史地理的考察」『歴史の道調査報告書第2集『山陽道（西国街道）』 兵庫県教育委員会 1992
- (36) 註31に同じ
- (37) 須藤宏「深江北町遺跡第8次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 2002
- (38) 宮本郁雄・中村大介編『古代のメインロード～山陽道沿線物語～』 神戸市教育委員会 2001

II. 遺構と遺物

(1) 基本層序

今回の調査地は、対象面積が2,000m²を超える比較的広範囲に亘るため、調査対象地区的北東部から1～5区に地区割りを行い、順次調査を実施した。前章でも述べたように、深江北町遺跡は旧海岸線に近い場所に立地し、海と河川の影響を受けてきたため、複雑な地形・堆積状況をみせる。そのため、各区の堆積状況には相違が認められ、層序を端的に述べることは困難である。したがって、ここでは各区の概要をそれぞれ記すことにする。

1区

大半が既存の建物基礎などにより大幅に搅乱を受けており、わずかに遺構面を確認したに止まっている。現地表面はT. P. 4.0mで、盛土・搅乱および黄灰色～褐灰色シルト質細砂を主体とする旧耕土が0.8～1.0mの厚みで堆積しており、この旧耕土層からは中近世の土器・陶磁器などが出土している。T. P. 3.2m付近には淡乳黄色～淡黄灰色シルト混極細砂～中砂を基盤層とする第1遺構面を形成する。淡褐灰色シルト質極細砂～細砂などで構成される0.1～0.5mの間層を挟み、T. P. 2.8m付近には淡乳色極細砂～細礫を基盤層とする第2遺構面を形成する。下層には、淡乳灰色極細砂など海成と考えられる堆積層が続く。

2～3区

現地表面から盛土・旧耕土が堆積し、T. P. 3.0m前後で淡褐灰色シルト質細砂～中砂の奈良～平安時代遺物包含層が堆積しており、その上面が第1遺構面となる。0.4m前後の間層を挟み、T. P. 2.6m付近で乳灰色シルト混細砂～中砂を基盤層とする第2遺構面が形成されるが、調査区の大半が奈良～平安時代の土器や木製品を多く含む自然流路の堆積で占められている。さらに、下層には土師器・弥生土器を含む洪水砂や、植物遺体を多く含む淡黒灰色極細砂混シルトなどの湿地状堆積が確認されている。

4～5区

現地表面がT. P. 3.6～3.8mで、0.8mほどの厚みをもつ盛土、灰黄色系のシルト質細砂を主体とする旧耕土が堆積する（図6）。その下層にはT. P. 2.6m付近に暗褐灰色シルト質細砂の奈良～平安時代遺物包含層が堆積し、乳色シルトをわずかに含む細砂～細礫を基盤層とする第2遺構面がT. P. 2.2～2.8m付近に存在する。この面で奈良～平安時代の掘立柱建物群を始めとする遺構が数多く検出されている。さらに、下層には淡灰色砂礫など古墳時代後期以降と考えられる洪水砂が堆積しており、須恵器・土師器・弥生土器が出土している。過去の調査ではこの洪水砂の堆積以前に、深江北町遺跡⁽¹⁾では水田や円形周溝墓が、北隣の津知遺跡⁽²⁾では水田址が確認されている。今回の調査では自然木を大量に含む溝状の落ち込みを検出しているが、明確な遺構は検出されていない。これより下層については、T. P. 1.8mでは基盤層である淡乳色極細砂（海成砂）が確認されている。

以上のように、4～5区では遺物包含層を伴った奈良時代～平安時代前期を主体とする遺構面が確実に認められ、数多くの遺構が確認されている。なお、1～3区では流路（S R01）あるいは大規模な搅乱のため、生活面としての当該期の遺構面は不安定である。（中谷）

註 (1) 山下史朗編 兵庫県文化財調査報告第54冊『神戸市東灘区 深江北町遺跡』 兵庫県教育委員会 1988
(2) 芦屋市教育委員会 『津知遺跡 第4地点 現地説明会ノートⅡ』 1994

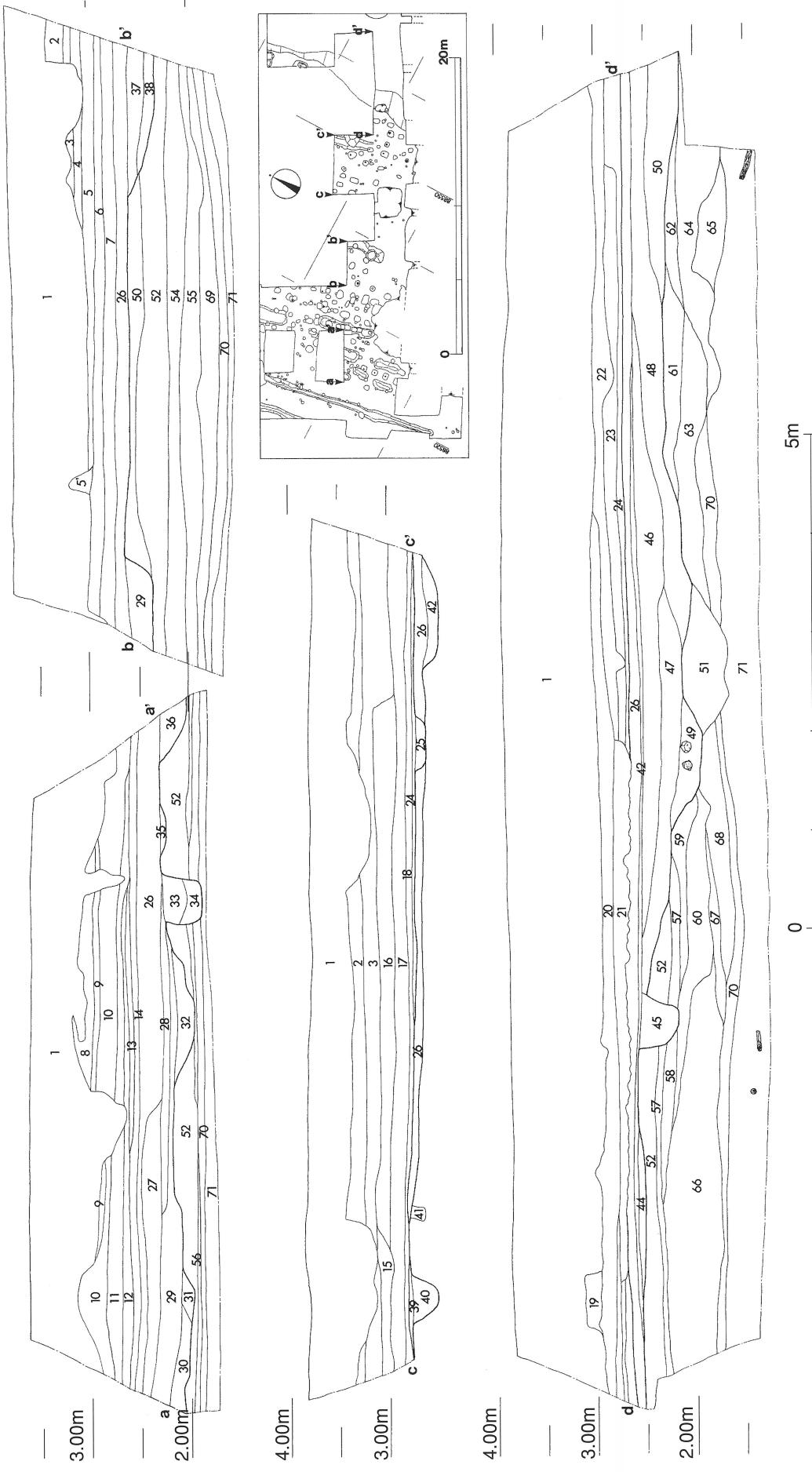


図6 4区東西 土層断面図

- 1 盆土・鶴丸 2 旧耕土 3 灰茶色シルト質細砂 4 灰黄色シルト質細砂
 5 灰茶色シルト質細砂 6 灰茶色シルト質細砂 7 灰黄色シルト質細砂
 8 灰茶色シルト質細砂 9 黄灰色シルト質細砂 10 灰黄色シルト質細砂
 11 灰茶色細砂 12 灰茶色シルト質細砂 13 淡灰茶色細砂
 14 黄灰茶色小礫混じり細砂 15 淡灰茶色シルト質細砂
 16 淡黄灰茶色シルト質細砂 17 淡乳灰茶色シルト質細砂
 18 淡灰茶色シルト質細砂 19 淡乳灰茶色シルト質細砂
 20 淡乳灰茶色シルト質細砂 21 淡灰茶色細砂+乳灰色細砂質シルト
 22 黄赤色シルト質細砂+粗砂 23 淡乳灰茶色シルト質細砂
 24 暗褐灰色シルト質細砂 25 乳黄色シルト質細砂+粗砂
 26 暗褐灰色シルト質細砂 27 灰黄色シルト質細砂
 28 淡灰褐色シルト質細砂 29 灰茶色小礫混じり細砂
 30 暗褐灰色粗砂混じり細砂 31 淡黄灰茶色小礫混じり細砂+細砂 (SX08里土)
 32 暗灰茶色粗砂粗砂混じりシルト (SX10里土) 33 淡灰茶色粗砂混じりシルト
 34 灰茶色シルト質粗砂+粗砂 35 淡灰茶色粗砂
 36 暗褐灰色粗砂混じりシルト質細砂 37 淡灰茶色小礫混じりシルト質細砂
 39 乳灰色シルト混じり細砂+粗砂 41 淡灰茶色シルト質細砂
 40 小礫を多く含む淡灰茶色シルト質細砂 43 乳灰色シルトをわずかに含む小礫
 42 暗灰褐色シルト質細砂 (SD03里土) 45 乳褐色シルト質細砂
 46 褐色シルト質細砂+粗砂 47 淡灰茶色シルト質シルト
 48 暗褐色シルト質細砂 49 黑灰色シルト質細砂
 50 淡灰褐色シルト質細砂 (細砂を多く含む) 51 淡灰褐色シルト質細砂+細砂
 52 乳色シルトをわずかに含む細砂 53 淡灰茶色細砂
 55 淡灰茶色細砂+粗砂 57 褐色シルト質細砂+中砂
 58 淡乳灰色粗砂+粗砂 59 淡乳灰色シルト質細砂
 60 淡灰茶色シルト質細砂+粗砂 61 淡灰茶色粗砂+中砂
 62 乳黄色シルト質細砂+粗砂 63 乳灰色粗砂+細砂
 64 淡乳褐色粗砂+粗砂 65 淡乳灰色シルト混じり中砂
 66 淡乳褐色粗砂+粗砂 (拳太のシルトのロック含む) 67 淡黑灰色シルト質細砂
 68 淡乳黄色シルト質細砂+粗砂 69 淡黑灰色シルト質細砂
 70 黑色シルト見じり層細砂 71 淡乳灰色細砂 (淘汰良し・基盤)

(2) 弥生時代末～古墳時代前期

上述したように、深江北町遺跡第3次調査地点では庄内式併行期の円形周溝墓群が確認されており、今回の調査地点でもその確認が十分に予想されていたことに加え、柱穴の断ち割り調査中にも下層の黒褐色土から弥生土器あるいは土師器が確認されていた。その状況把握と円形周溝墓などの遺構の広がりを確認するために、トレントを設定して(図7)、第2遺構面下層の断ち割り調査を実施した。

海起源と考えられる厚く堆積した淡黄色極細砂の基盤層の上層に、土壤化が顕著な黒褐色シルトあるいは黒褐色シルト質細砂が厚さ約10cmで堆積している。西端の5区では円弧を描きながらY字形に結合する溝状の落ち込みが確認できた。幅約2m、最大深さ0.35mで、断面は逆台形に近く、埋土は植物遺体を多く含む黒灰色シルトである。この溝状の落ち込みからは木製品以外に出土遺物がなく、その性格については明確にはできない。第3次調査で確認された円形周溝墓の一部である可能性も考えられる。また、自立した樹根が検出される箇所もあり、弥生時代後期末～古墳時代前期の土器が散在して出土したもの、明確な遺構の確認には及ばなかった。なお、この第3遺構面は4区西端でT.P. 1.8m、4区東端でT.P. 1.5mで、西から東へ徐々に標高を減じている。

土器 土器の器種には、壺・甕・鉢・高坏がある。無紋の二重口縁壺、体部外面をヘラ削り調整する甕や口縁端部内面を肥厚し、球形の体部をもつ甕などの存在から、第3次調査円形周溝墓群の遺物あるいはこれらの上層の遺物⁽¹⁾よりもさらに降る時期のものを含んでいると考えられる。庄内式併行期新段階から布留式併行期にかけてのものであろう。

木製品 いずれも5区の溝状の落ち込みから出土したもので、割板材と丸木杭がある。(12・13)は直径8mmの円孔が穿たれ、若干の加工痕が認められる板材となっているが、その他については明瞭な加工痕は認められない。(山本)

註(1) 山田清朝「円形周溝墓群とその出土遺物の検討」兵庫県文化財調査報告第54冊『神戸市東灘区深江北町遺跡 県営神戸深江団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1988

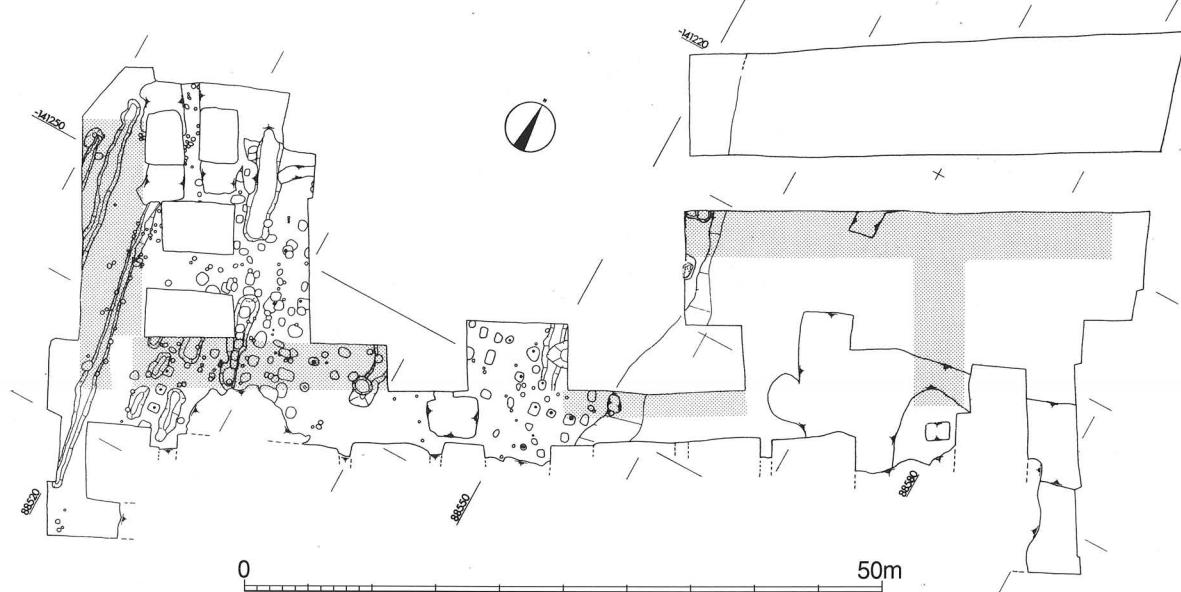


図7 断ち割りトレントの配置

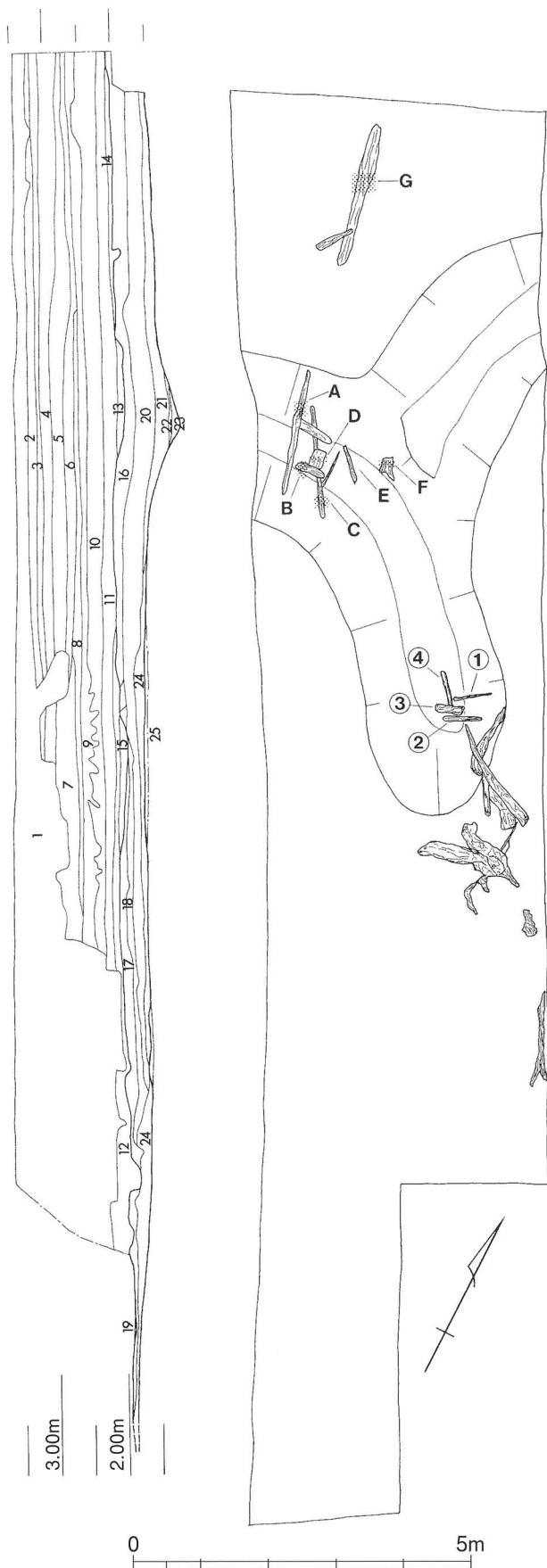


図8 5区 断ち割りトレンチ平面図・西壁土層断面図
(丸付き数字・アルファベットは樹種同定資料)

- 1 盛土・攪乱
- 2 旧耕土
- 3 淡灰色細砂
- 4 灰茶色シルト質細砂
- 5 淡灰色～黄灰色シルト質細砂
- 6 淡灰黄色細砂
- 7 灰黄色シルト質極細砂～細砂
- 8 灰黄色小礫混じりシルト
- 9 灰色～黄褐色細砂～粗砂
- 10 暗褐灰色シルト質細砂
- 11 暗褐灰色小礫混じりシルト質細砂
- 12 淡黑灰色細砂～粗砂
- 13 暗褐灰色粗砂混じりシルト(SD05埋土)
- 14 淡黑灰色細砂～粗砂
- 15 暗褐灰色小礫混じりシルト質細砂(SD06埋土)
- 16 淡乳褐色砂礫
- 17 淡褐色シルト～粗砂
- 18 褐灰色シルト
- 19 灰白色極細砂
- 20 淡黑灰色シルト(ラミナ顯著)
- 21 黑灰色シルト(植物遺体を多く含む)
- 22 淡褐灰色粘土
- 23 暗褐灰色極細砂質シルト(植物遺体層・自然木多く含む)
- 24 黒色シルト混じり極細砂
- 25 淡乳褐色極細砂～細砂(基盤層)

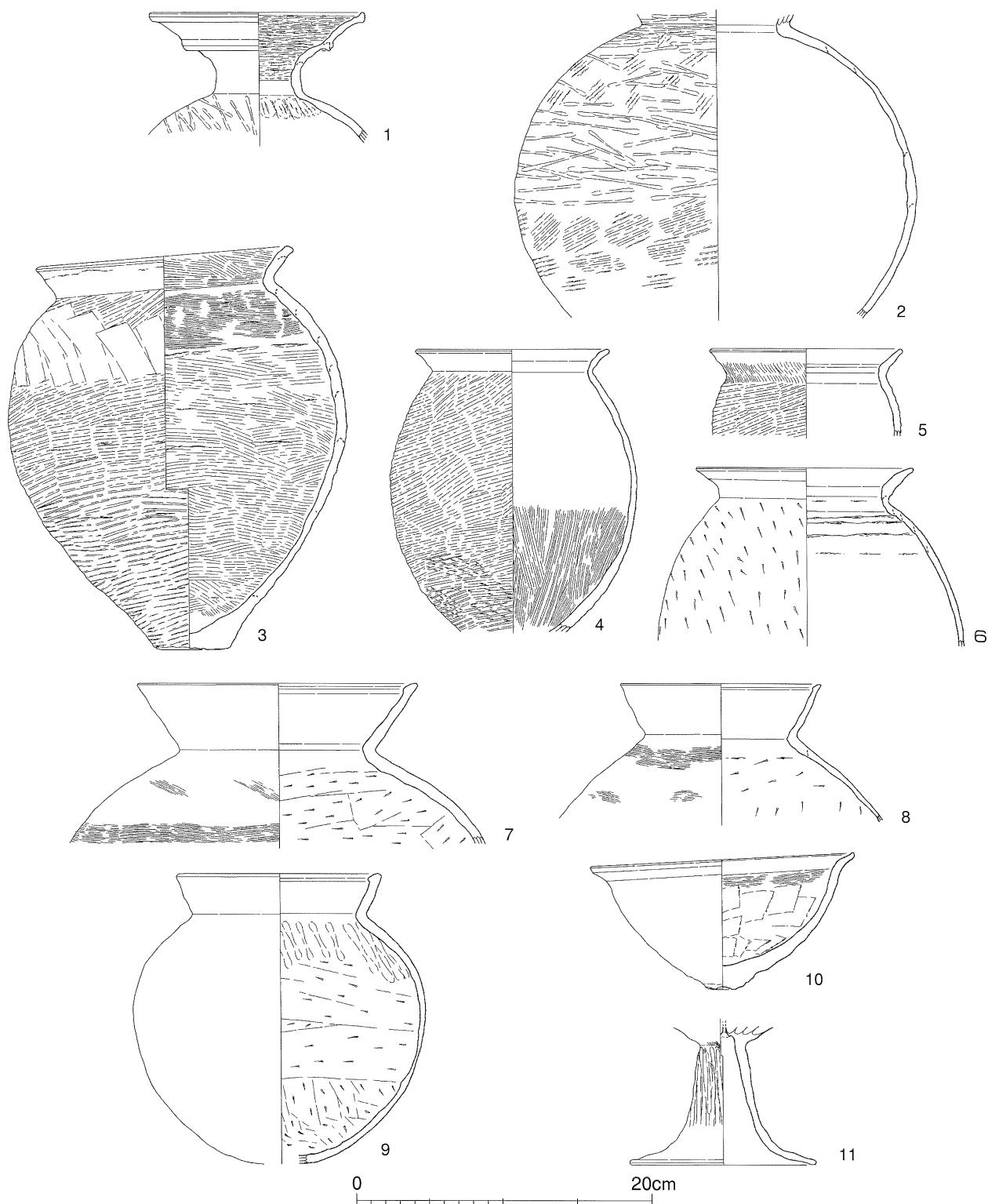


図9 弥生末～古墳前期の土器

表2-1 弥生末～古墳前期の土器 観察表

No.	種類	器種	口径 底径	体部 最大径	器高	調整など特徴	胎 土	焼成	色調
1	弥生土器	壺	14.3 —	—	9.1	二重口縁、端部ヨコナデ、体部外面一部ヘラ磨き、口縁部内面横方向のヘラ磨き、	1~2mmの石英・チャートを多く含む	良好	淡乳褐色
2	弥生土器	壺	— —	27.4	21.1	外面2.5条/cmの平行叩きの後横方向のヘラ磨き、内面ナデ仕上げ?	1~3mmのチャート・石英・長石、5mmのクサリレキ	良好	暗褐色

表2-2 弥生末～古墳前期の土器 観察表

No.	種類	器種	口径 底径	体部 最大径	器高	調整など特徴	胎 土	焼成	色調
3	弥生土器	甕	16.6 5.2	22.8	22.1	体部外面2条/cm平行叩き、上半一部板ナデ、内面下半4条/cm、上半10条/cmのハケ	1~3mmのチャート・石英・長石を含む	良好	淡乳褐色
4	弥生土器	甕	12.6 —	16.6	19.4	体部外面2条/cm平行叩き 内面下半6条/cmのハケ	1~2mmの石英・チャートを多く含む	良好	淡乳褐色
5	弥生土器	甕	13.0 —	13.0	6.0	体部外面2条/cm平行叩き半スリ消し 内面ナデ	0.5~1mmの石英・チャート・クサリレキを含む	良好	淡乳色
6	土師器	甕	14.8 —	—	12.2	体部外面下から上へのヘラ削り 内面ナデ	1~2mmのチャート・石英・長石、5mmのクサリレキ	良好	明乳色
7	土師器	甕	18.6 —	—	11.1	体部外面8条/cmのハケ 内面横方向のヘラ削り	1~2mmの石英・チャートを含む	良好	淡乳褐色
8	土師器	甕	13.6 —	—	9.4	体部外面8条/cmのハケ 内面ヘラ削り	0.5~1mmの石英・チャート・クサリレキを含む	良好	暗乳褐色
9	土師器	甕	13.5 —	19.9	19.9	体部外面板ナデ 内面ヘラ削り	1~3mmのチャート・石英・長石、5mmのクサリレキ	良好	淡乳色
10	弥生土器	鉢	18.0 1.5	—	8.9	体部外面ナデ、内面板ナデと6条/cmの横ハケ	1~2mmのチャート・石英・長石、クサリレキ	良好	明乳色
11	土師器	高坏	— 12.5	—	9.5	外面10条/cmのハケの後縦方向のヘラ磨き	1mm前後のチャート・石英・クサリレキ	良好	淡乳褐色

図10 弥生末～古墳前期の木製品

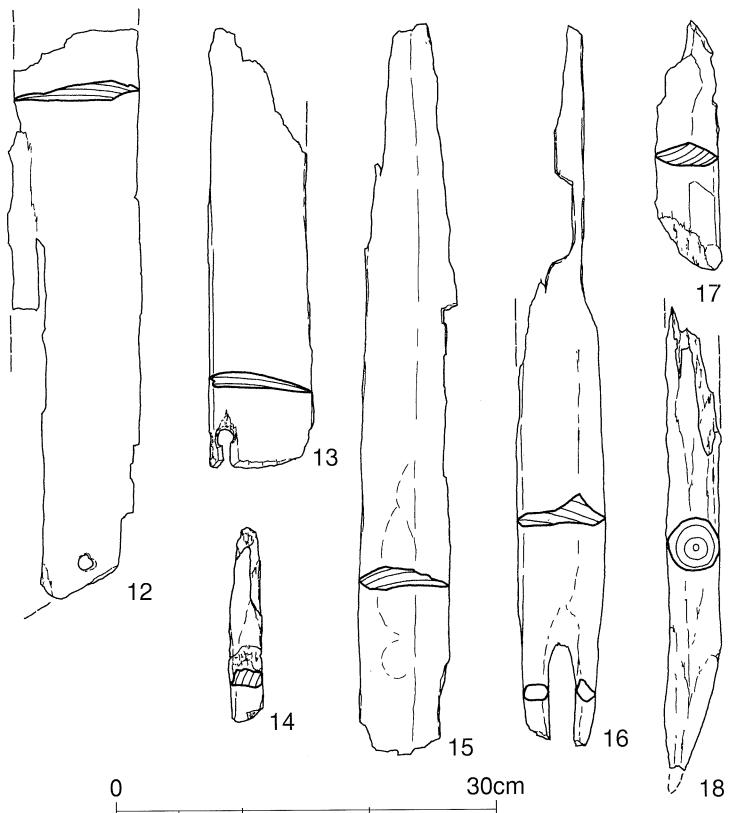


表3 弥生末～古墳前期の木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹 種	備考	W-No.
12	有孔板材	落ち込み内③	45.0	10.5	1.5	コナラ属コナラ節		7277
13	板材	淡灰黒色シルト	35.2	8.1	1.3	スギ		7266
14	割材	黒灰色シルト	17.3	2.7	1.4	アカマツ		7263
15	割板材	落ち込み内②	37.8	5.4	1.8	ヒノキ属		7276
16	割板材	落ち込み内①	55.2	7.0	2.3	ヒノキ属		7275
17	割材	淡灰黒色シルト	18.8	5.0	1.7	アカガシ亜属		7267
18	丸杭	淡黒灰色細砂	37.0	4.2	—	アカマツ		7274

(3) 古墳時代後期

後述する第2遺構面を形成する洪水砂層から出土した遺物を扱う。この洪水砂層が確認できたのは第2遺構面で多数遺構が確認できた調査区の西半からS R 01の西肩部分のみである。

出土した遺物には図11で示したように土師器・須恵器があり、いずれも断ち割りトレンチあるいは柱穴断ち割り中に検出したものである。

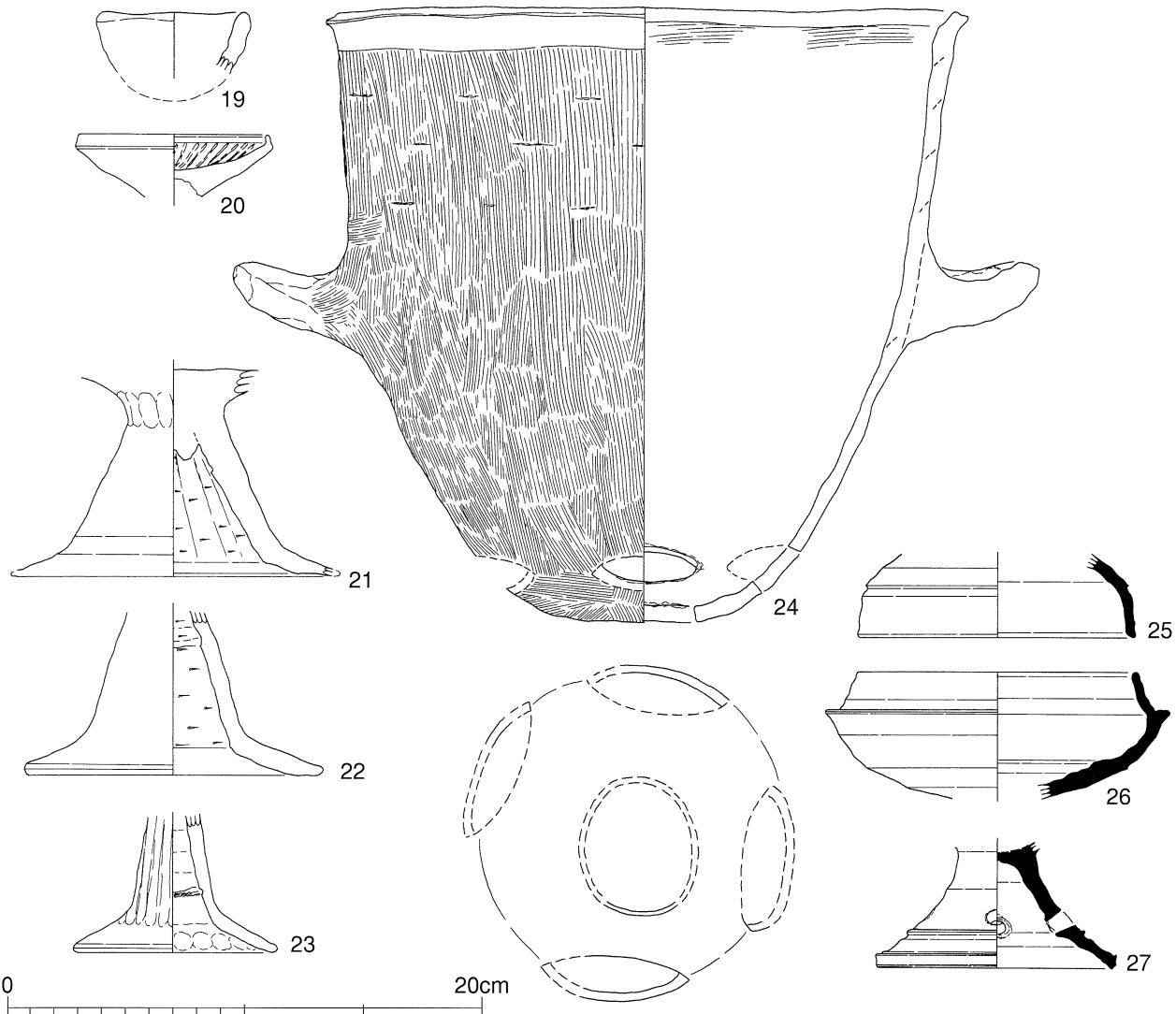


図11 黄色砂出土の土器

表4 黄色砂出土の土器 観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調
19	土師器	鉢	6.0	2.6		67	1mm前後のチャート・石英・長石・クサリレキ	良好	淡乳褐色
20	土師器	器台	8.0	2.6		35	1mmのチャート・石英・クサリレキをわずか	良好	暗乳色
21	土師器	高壺	—	8.8	13.6	65	3mmのチャート・石英を含む	良好	乳茶灰色
22	土師器	高壺	—	7.1	12.3	75	0.5~1mmの石英・チャート・クサリレキ	良好	乳赤褐色
23	土師器	高壺	—	5.9	8.3	95	0.5~1mmの石英・チャート・クサリレキわずか	良好	淡乳橙色
24	土師器	甑	26.1	26.2		55	0.5~2mmの石英・チャート・クサリレキ・長石	良好	暗乳色
25	須恵器	壺蓋	11.8	3.5		10	1mm前後の灰色砂粒わずか	良好	灰色
26	須恵器	壺身	11.9	5.4		33	1mm前後の灰色砂粒	良好	灰色
27	須恵器	高壺	—	5.3	9.9	45	0.5mmの砂粒わずかに含む	やや良	淡乳灰色

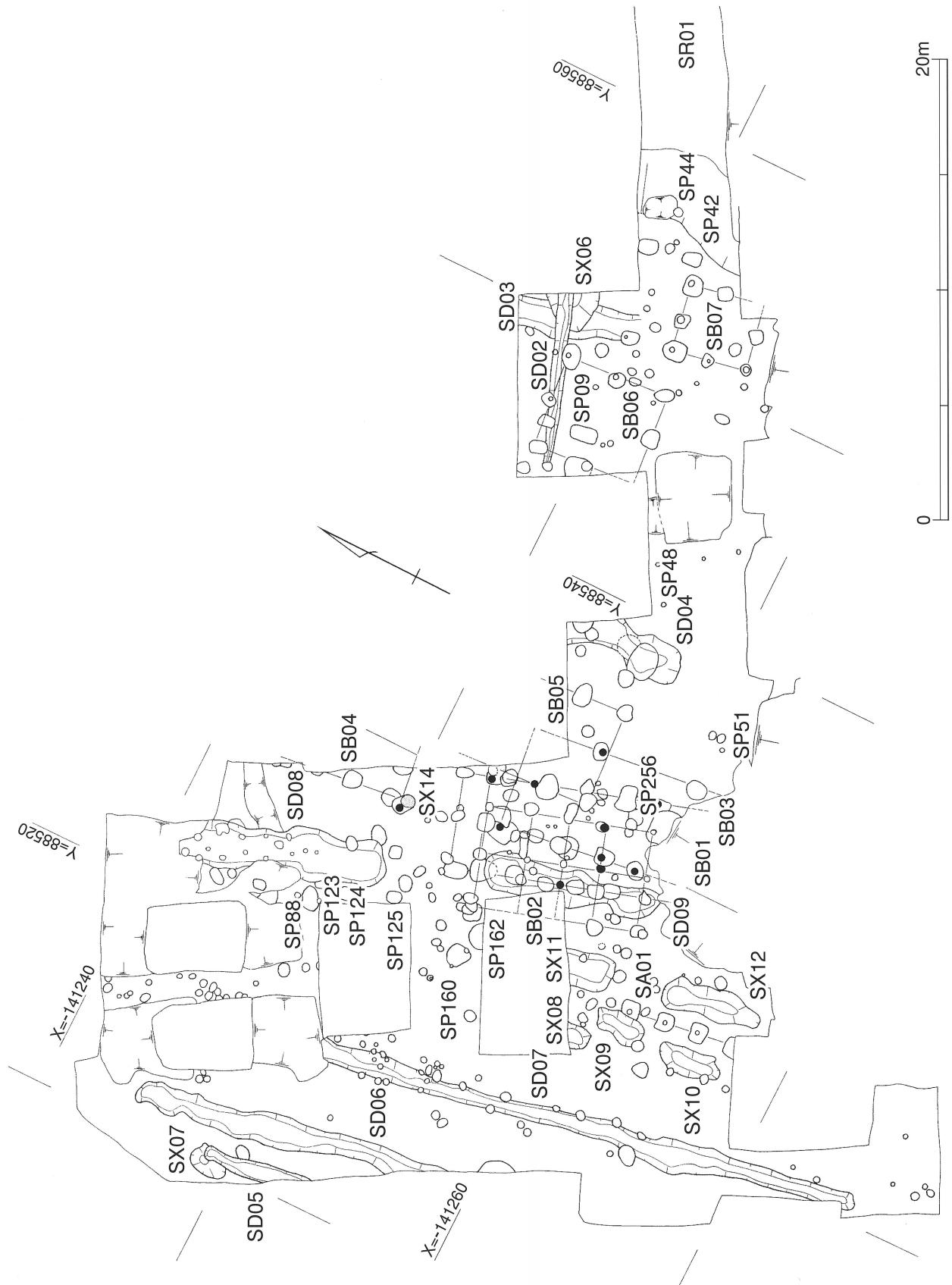


図12 西半区 遺構平面図

(4) 奈良時代前半～平安時代前期 (第2遺構面)

今回の調査では、第2遺構面で最も多くの遺構・遺物を確認することができた(図12)。確認できた遺構には、柵・掘立柱建物・掘立柱建物を構成しないピット・溝・土坑・流路などがある。

a) 柵

SA01

4区西部で確認できた柵列で、3間分(長さ4.9m以上)の4基の柱穴が確認でき、さらに南側に延びる可能性が指摘できる。柱穴の掘形の平面形は一辺80～90cm前後の隅円方形で、深さは40cm前後である。柱間距離は1.50～1.60mと並びが良く、N 7° Wを指向している。S P 88あるいはS P 160などが同一軸線に載りそうであるが、掘形の平面形等の特徴から判断して、4本分として扱い、北側へは判然としないものの、別の柵列が存在した可能性を指摘するにとどめる。

いずれも柱痕の直径は約20cmと小型で、深さは30～40cmである。P 3では花崗岩礫の礎盤が据えられ、柱痕の深さは10cmに過ぎない。柱材の補修が行われたためと考えられる。図化し得るような出土遺物はいずれの柱穴からも確認できていない。

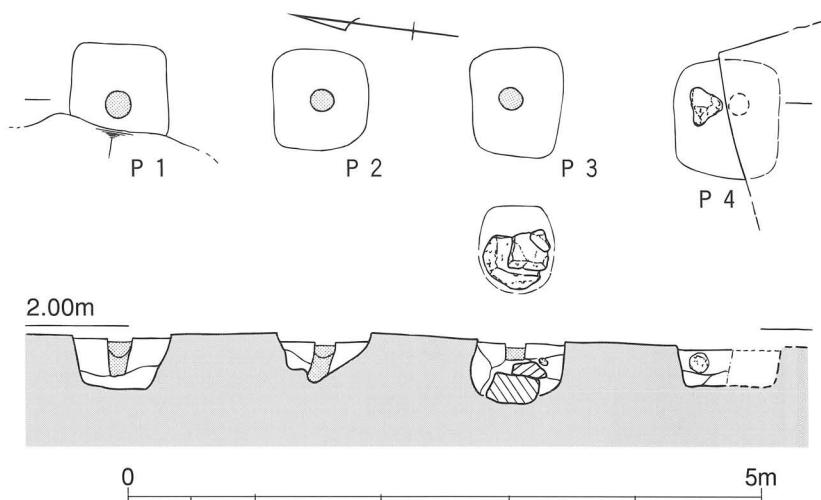


図13 SA01実測図

0 5m

b) 掘立柱建物

SB01

5区南東部から4区西部にかけて確認できた東西2間(4.20m)×南北4間(7.20～7.30m)以上の掘立柱建物で、さらに南側に延びるものと考えられる。また、北側には1間分(1.20m)の庇をもつ。桁行主軸をN 19.5° Wに採る。

柱間距離は東西方向でP 1～P 6間が2.10m、P 6～P 7間が1.90mで、やや東側の柱間が短い。また、南北方向ではP 2～P 3間の2.30mを最大とし、P 4～P 5間の

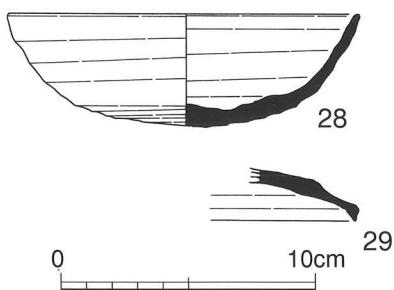


図14 SB01-P14・12出土の土器

1.20mを最小とし、概ね1.70～2.00mの間に収まる。柱穴掘形の平面形は橢円形あるいは不整な隅円方形で、その方向性は一定していない。規模はP 5・P 7が最大長軸1.15mで、深さは最大65cmである。P 1・2・5・9では柱材が、P 6・8・10では直径20cm前後の柱痕が確認できている。

出土土器にはP 14掘形からの口径13.6cm、器高4.5cmの須恵器坏G(28)とP 12掘形からの須恵器坏B蓋(29)がある。また、柱材

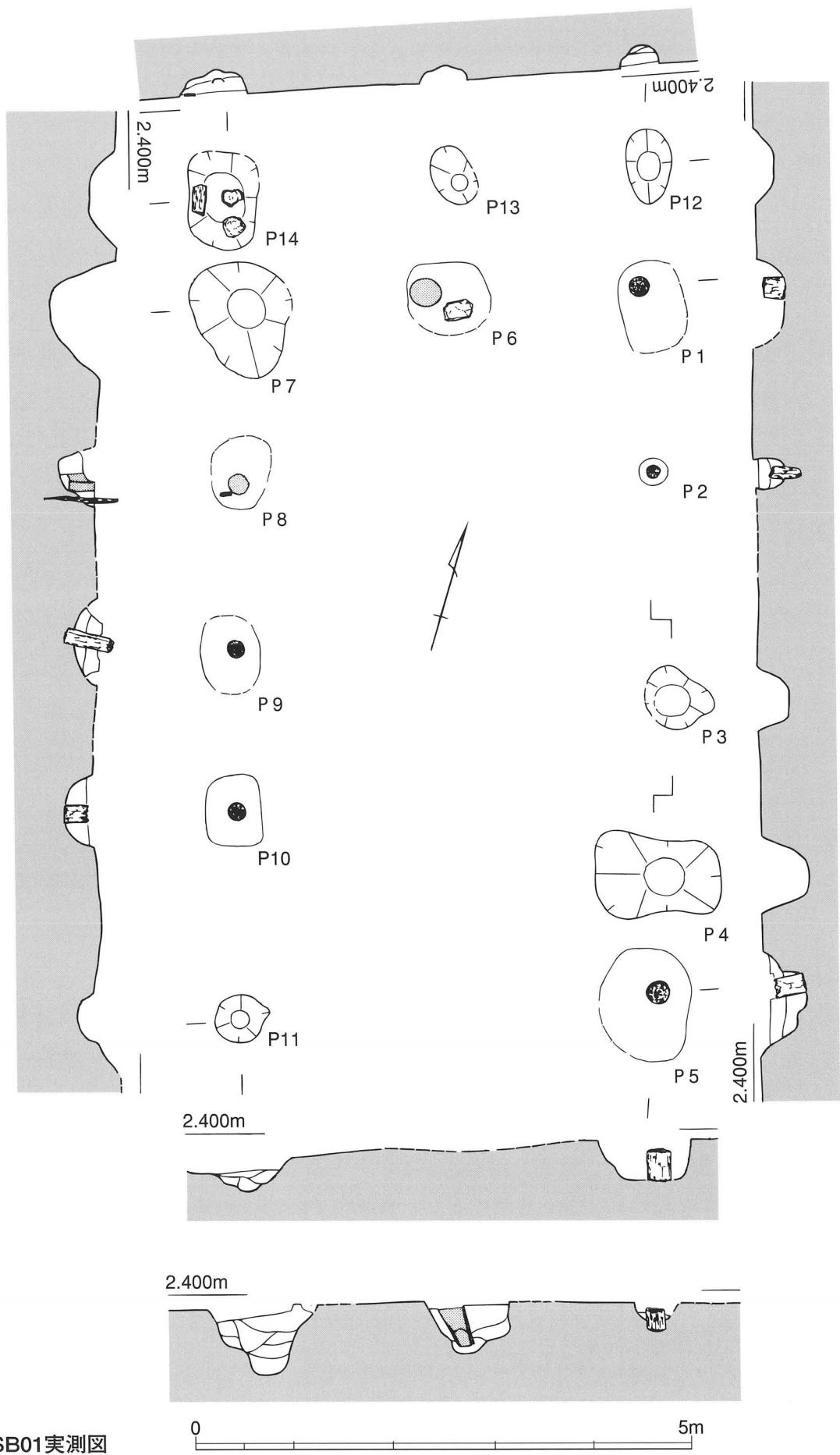


図15 SB01実測図

のほかに、板材（34・35）・ヘラ状製品（36）や加工屑片（37～39）などの木製品も出土している。P 7 が S B02-P 6 に、P 1 が S B05-P 3 に、P 2 が S B05-P 4 に、P 3 が S B05-P 5 に、P 7～P 11 が S D09 にそれぞれ切られていることから、この 2 棟の掘立柱建物よりも古く、奈良時代前半のものと考えている。

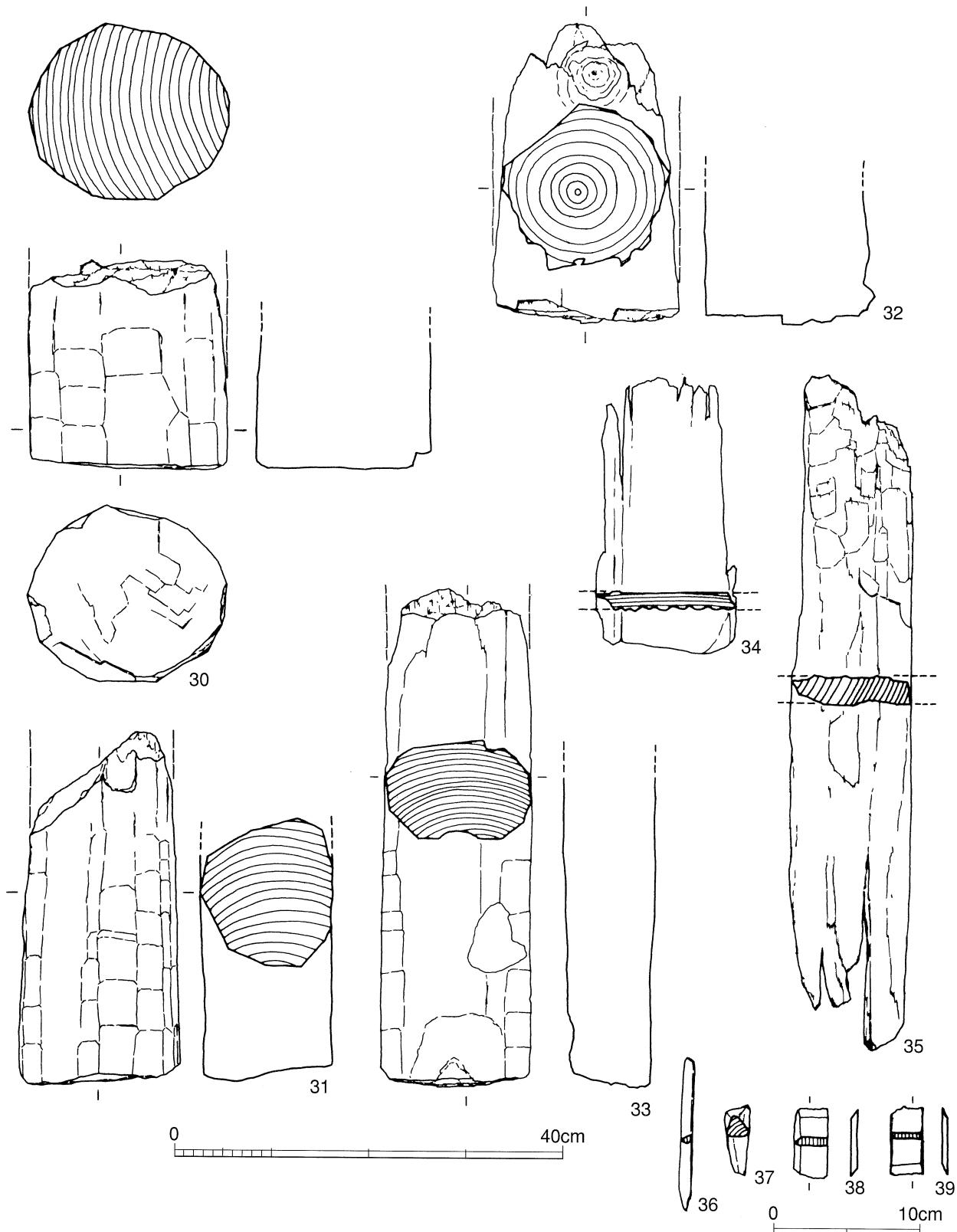


図16 SB01出土の木製品

SB02

5区南東部から4区西部にかけて確認できた東西2間(4.20m)×南北4間(7.20~7.40m)の掘立柱建物で、桁行主軸をN18.5°Wに採る。今回の調査では唯一の総柱建物である。

柱間距離は東西方向が1.90~2.30mで、やや東側の柱間が短く、柱穴も小規模なものが多く、東側が庇を構成していた可能性もある。また、南北方向では中位の2間分の柱間距離が1.60mで、北・南列は2.10mと広くなり、不揃いとなっている。

柱穴の掘形の平面形は円形あるいは橢円形で、その規模は長軸が60~70cmで、深さは30~40cmである。P4・9では柱材が、P6・11・13では直径15~20cmの明確な柱

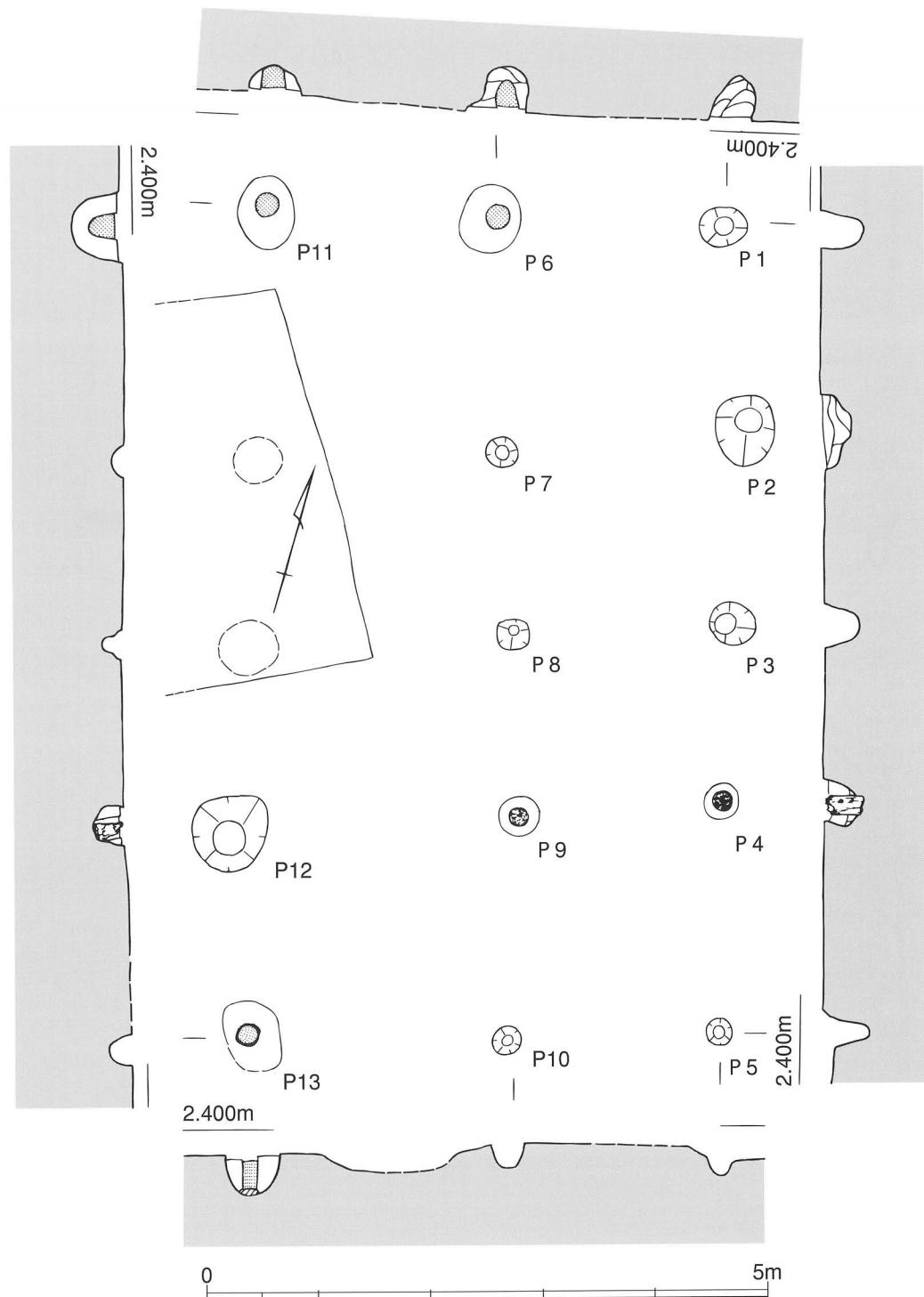


図17
SB02実測図

痕が確認でき、P 13では扁平な自然石の礎盤が底部に据えられている。

出土遺物は概して少なく、P 12から11面となる面取りが明瞭な土師器高壇脚部（40）が、P 11からは底径10.4cmの須恵器壇B（41）が出土している程度である。また、P 7では加工痕が明瞭な杭材様の材が出土している。

これらの出土遺物だけでは俄かに時期を決められないが、S B01と平行方位がほぼ同一で、かつP 6がS B01-P 7を切り、S D09に切られていることから、S B01よりもわずかに時期が降る奈良時代前半の中でもやや新しい時期のものと考えている。

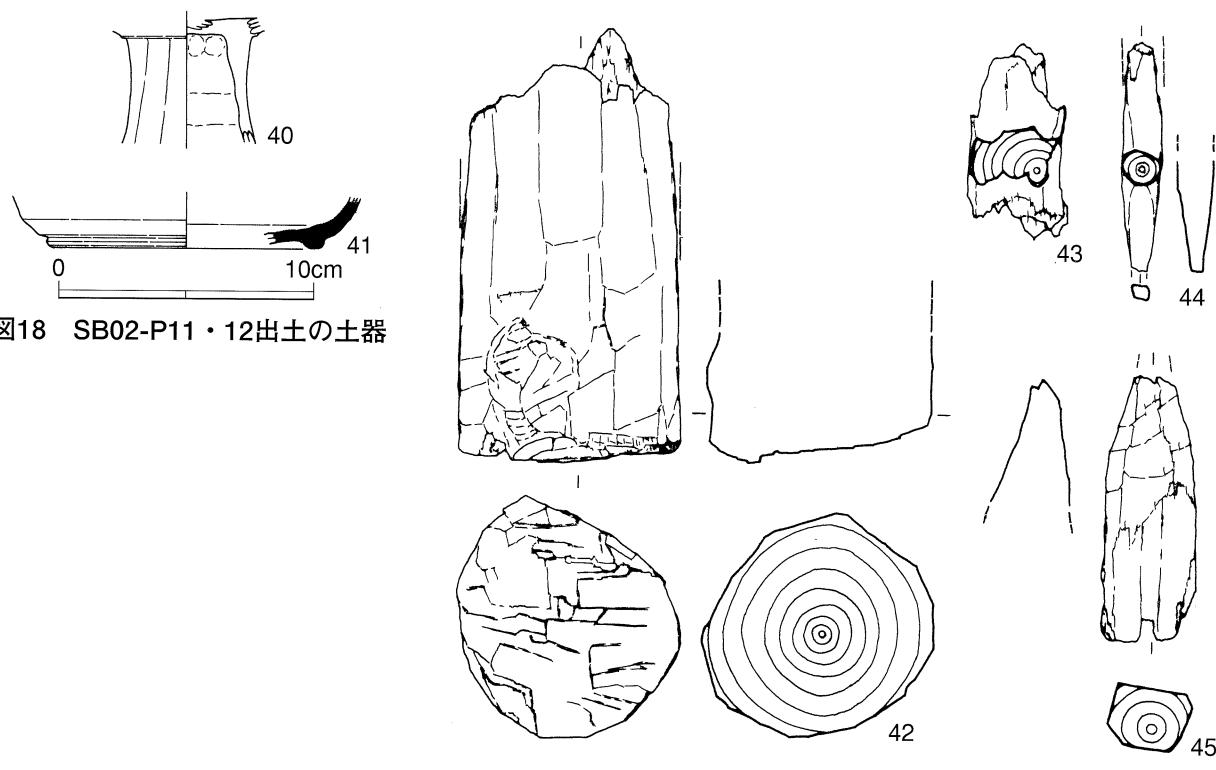


図18 SB02-P11・12出土の土器

図19 SB02出土の木製品

0 40cm

表5 SB01・02出土の木製品 法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
30	柱材	SB01-P1 柱痕	21.8	20.4	18.2	クリ		7278
31	柱材	SB01-P2 柱痕	36.0	16.6	13.4	クリ		7280
32	柱材	SB01-P5 柱痕	31.2	19.2	17.6	ヒノキ属		7241
33	柱材	SB01-P9	51.6	15.5	10.3	クリ		7262
34	板材	SB01-P14	27.8	14.6	1.9	ヒノキ		7211
35	板材	SB01-P8	65.8	12.6	3.1	ヒノキ		7264
36	筒状木製品	SB01-P4	10.7	0.8	0.5	ヒノキ属	斎串状	7265
37	加工片	SB01-P7	4.8	1.8	1.5	トネリコ属		7269
38	加工片	SB01-P7	4.9	2.3	0.7	ヒノキ		7270
39	加工片	SB01-P7	4.6	2.3	0.4	ヒノキ		7271
42	柱材	SB02-P4 柱痕	34.2	17.9	17.8	ヒノキ属		7242
43	柱材?	SB02-P7	14.7	7.6	4.8	ヒノキ科		7272
44	丸杭	SB02-P7	18.5	3.2	3.1	アカガシ亜属		7273
45	柱材	SB02-P9	23.8	12.8	14.0	ヒノキ属		7291

SB03

4区西部で確認できた東西1間(4.60m)×南北4間(6.40m)以上の側柱の掘立柱建物で、桁行主軸はN3.5°Wに採る。南端の柱穴が東西方向で揃っていないため、さらに南側に2間程度延びるものと推定される。

柱間距離は東西方向のP1-P5間が4.65m、P2-P6間が4.60mで、並びの悪いP3-P7間は4.55mとなっている。また、南北方向ではP4-P5間の2.60mを最大として、P1-P2間・P5-P6間が2.10mとほぼ同一距離で、最小となるP6-P7間が1.50mである。

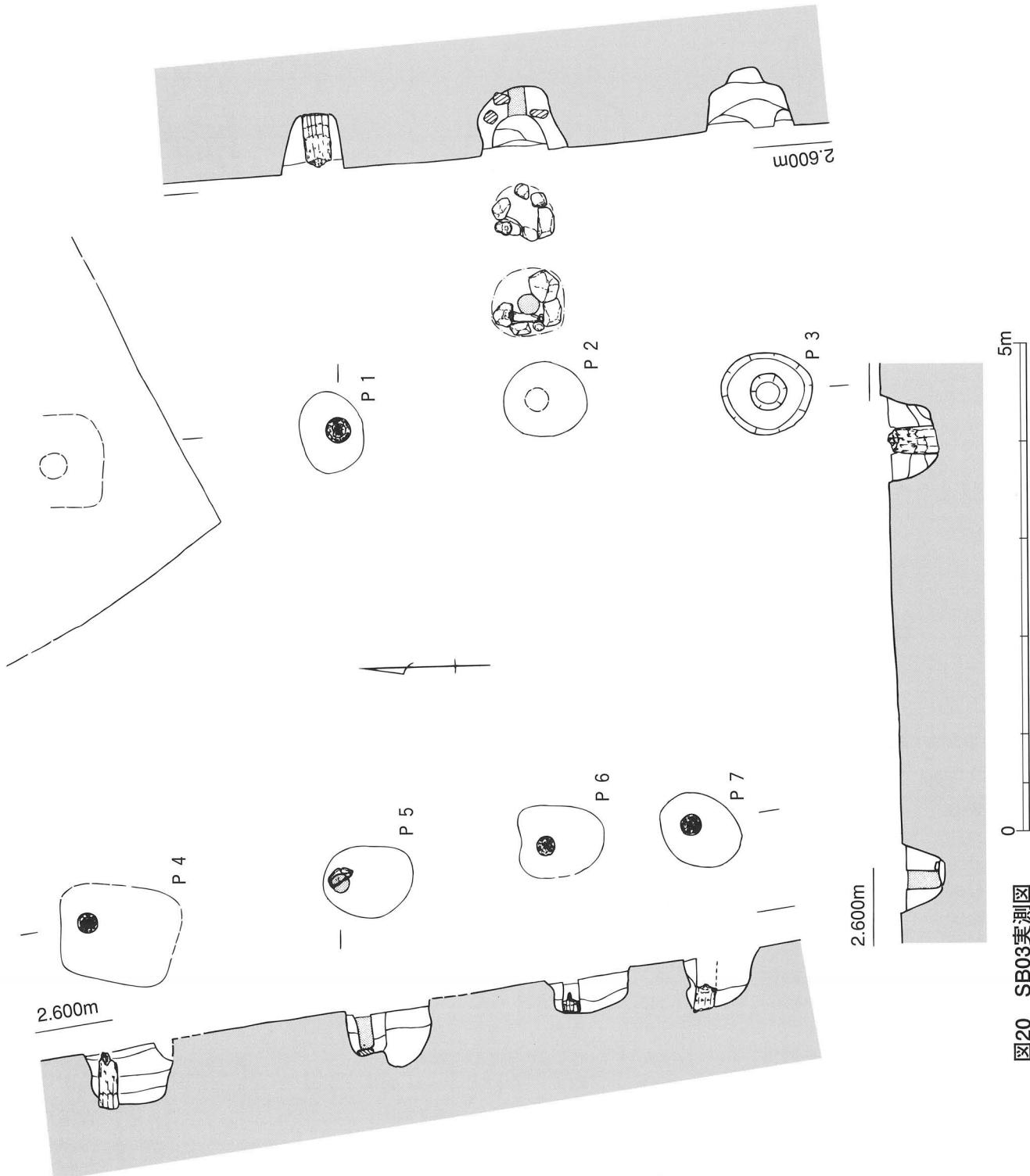


図20 SB03実測図

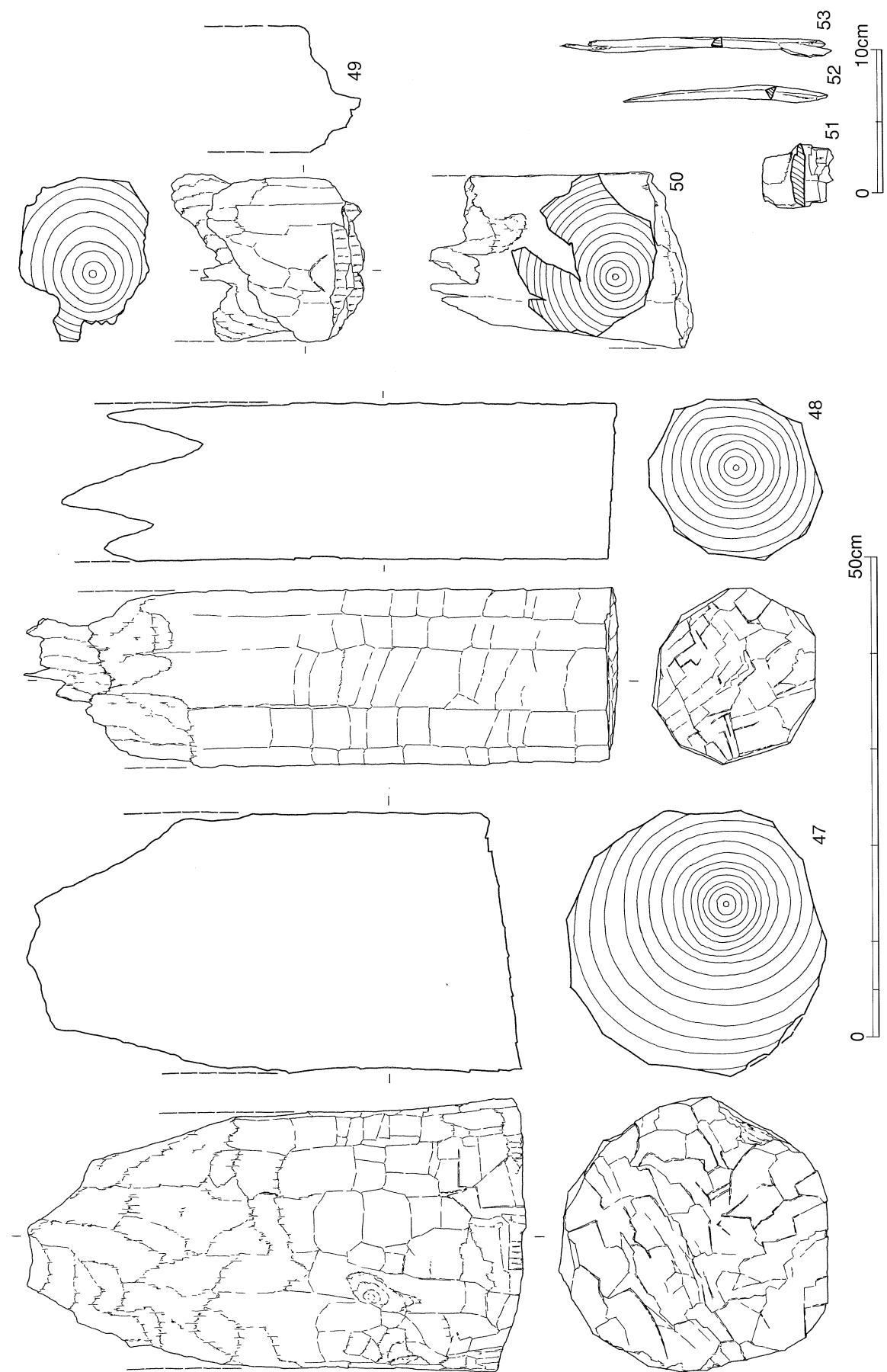


図21 SB03出土の木製品

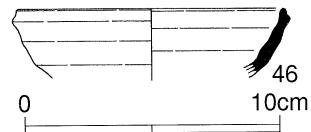


図22 SB03-P5出土の土器

柱穴の掘形の平面形は一様ではなく、橢円形のものから隅円方形のものがある。その規模は総じて大型で、P4の長軸1.20m、短軸1.00mを最大とする。掘形の深さはP2の65cmが最大である。

P1では最大直径28.4cmのマキ属と同定された柱材が、P4・6・7では直径約20cmのヒノキあるいはヒノキ属と同定された柱材が確認された。また、P2では直径0.90mの円形掘形の底から3段分の根固めの礫群と直径約20cmの柱痕が確認されている。北東側最上段の礫が欠損することから、この方向へ柱材が抜き取られたものと考えている。P5では円盤状自然礫の礎盤を伴う直径15cmの柱痕が確認されている。

出土土器は概して少なく、P5掘形から出土した口径10.4cmの須恵器坏Aの口縁部(46)が図化できた程度である。また、P1(47)・P4(48)・P6(49)・P7(50)の柱材以外にP5からは削り屑(51)と棒状の加工木片(52・53)が出土している。

これらの出土遺物だけからは俄かに時期を決められないが、P6がSB02-P9を切ることから、少なくともSB02よりも新しいことが判る。また、建物の桁行方位の違いからも判断して、奈良時代後半頃のものと考えている。(中谷・山本)

表6 SB03・04・05出土の木製品 法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
47	柱材	SB03-P1	51.4	28.4	27.4	マキ属		7288
48	柱材	SB03-P4 柱痕	67.3	18.4	16.8	ヒノキ属	面取あり	7286
49	柱材	SB03-P6	16.7	19.0	13.4	ヒノキ		7212
50	柱材	SB03-P7	26.3	18.0	14.8	ヒノキ		7234
51	加工片	SB03-P5-③層	5.0	4.4	1.0	ヒノキ		7281
52	加工片	SB03-P5-③層	14.3	0.9	0.8	ヒノキ科		7282
53	加工片	SB03-P5-③層	19.0	0.8	0.8	ヒノキ		7289
55	柱材	SB04-P1	66.0	19.2	19.4	ヒノキ	面取あり	7285
56	礎盤	SB04-P2	6.5	6.3	1.0	ヒノキ		7215
57	礎板	SB04-P2	5.2	4.2	0.7	ヒノキ		7216
58	加工片	SB04-P2	9.0	2.5	1.1	ヒノキ		7217
59	加工片	SB04-P2	5.0	1.5	0.4	ヒノキ		7218
60	加工片	SB04-P2	4.1	1.1	0.5	ヒノキ		7220
61	加工片	SB04-P2	2.5	3.6	0.4	ヒノキ		7219
62	丸材	SB04-P2	14.9	2.1	2.3	モミ属		7181
63	礎盤?	SB05-P1	30.1	8.2	9.8	ヒノキ	半面炭化	7279

SB04

5区東部で確認できたもので、SB03と平行が同一方位 ($N3.5^{\circ} W$) で、柱穴が南北方向に2間分並ぶことから、掘立柱建物としている。南北長4.20m以上で、柱間距離はP1-P2間が2.40mである。柱穴掘形の平面形は隅円方形に近いもので、P1が長径0.95m、短径0.81m、P2が長径0.82m、短径0.76mで、最大深さは0.40mである。P1では直径20cmの柱材が、P2では直径25cmの柱痕が確認できた。

出土遺物にはP1の柱材(55)のほか、P2掘形出土の須恵器長頸壺の頸部(54)と加工屑片(56~61)がある程度で、P2柱痕からの柄状の丸棒(62)もある。

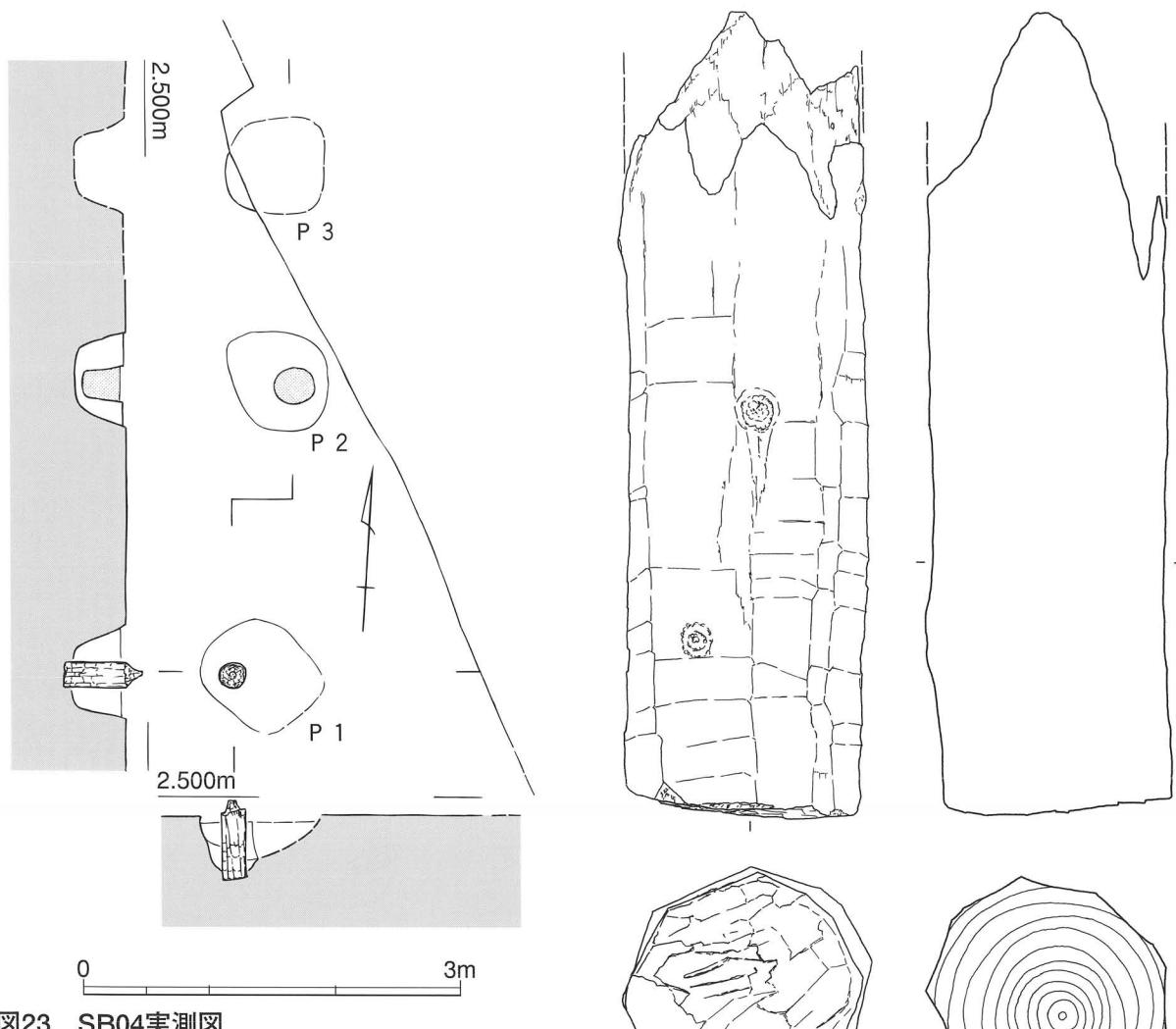


図23 SB04実測図

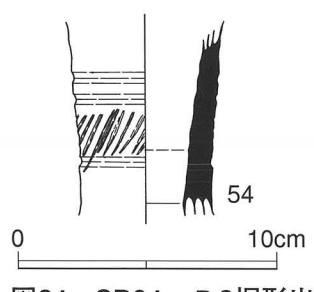


図24 SB04-P2掘形出土の土器

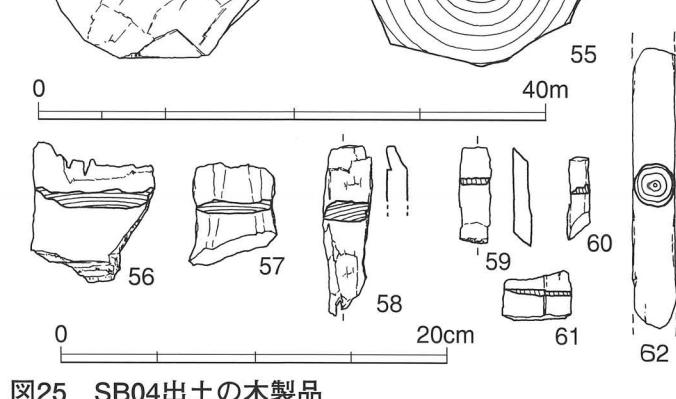


図25 SB04出土の木製品

SB05

4区西部で確認できた東西1間(4.30m)×南北2間(4.30m)以上の側柱の掘立柱建物で、桁行主軸をN3°Wに採る。さらに、北側に延びるものと考えられる。

柱間距離は東西方向がP1-P4間で4.35m、P2-P5間で4.30mである。南北方向はP1-P2間・P4-P5間が2.00m、P3-P4間が2.30mである。

柱穴掘形の平面形は橢円形に近いものが多く、最大深さはP5の0.55cmである。柱痕の確認できた柱穴はなく、いずれも柱材が抜き取られたものと考えている。

なお、P1では底部から浮いた状態で、加工痕が明瞭で、全体の1/2程度が炭化した角材(63)が出土している。

時期について判断できる遺物はない。P3・4・5がSB01-P1・2・3を切っており、桁行方位がSB04・05よりわずかに東に振っており、その位置関係から重複して併存できないことから、SB04・05とは大きな時期差ではなく、奈良時代後半には収まるものと考えている。

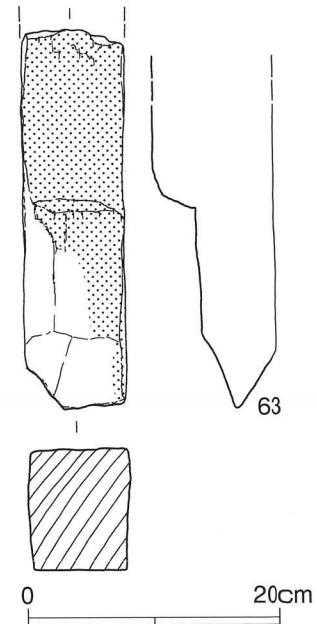


図26 SB05-P1
掘形出土の木製品

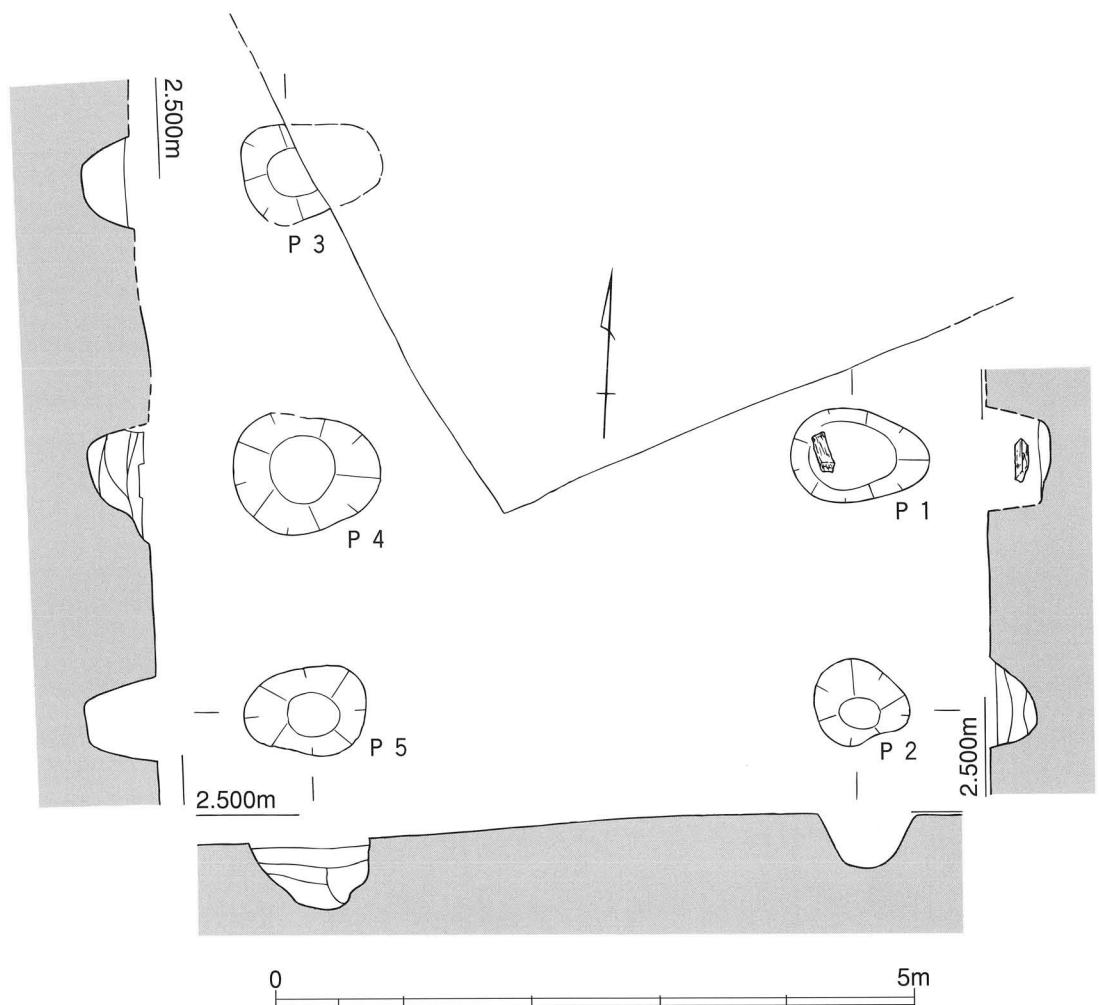


図27 SB05実測図

SB06

4区中央部で確認できた東西2間(4.25m)×南北2間(4.65m)の側柱の掘立柱建物で、桁行主軸をN5°Wに採る。P8は調査区外のため確認できていない。

柱間距離は東西方向で約2.10m、南北方向で約2.30mである。柱穴の掘形の平面形は一様ではなく、円形に近いものから隅円方形のものがある。その規模は長軸が70~80cmで、深さは40~50cmである。P1・2・4では明確な柱痕が確認できている。また、P7では円礫による礎盤が、P4では拳大の円礫で構成される礎盤が確認されている。

出土遺物は概して少なく、P1から須恵器坏B蓋(64)が、P3からは底径10.2cmの須恵器坏B(66)が、P6からも須恵器坏B(65)が出土している程度である。これらの出土遺物だけからは俄かに時期を決められないが、奈良時代中頃のものと考えている。

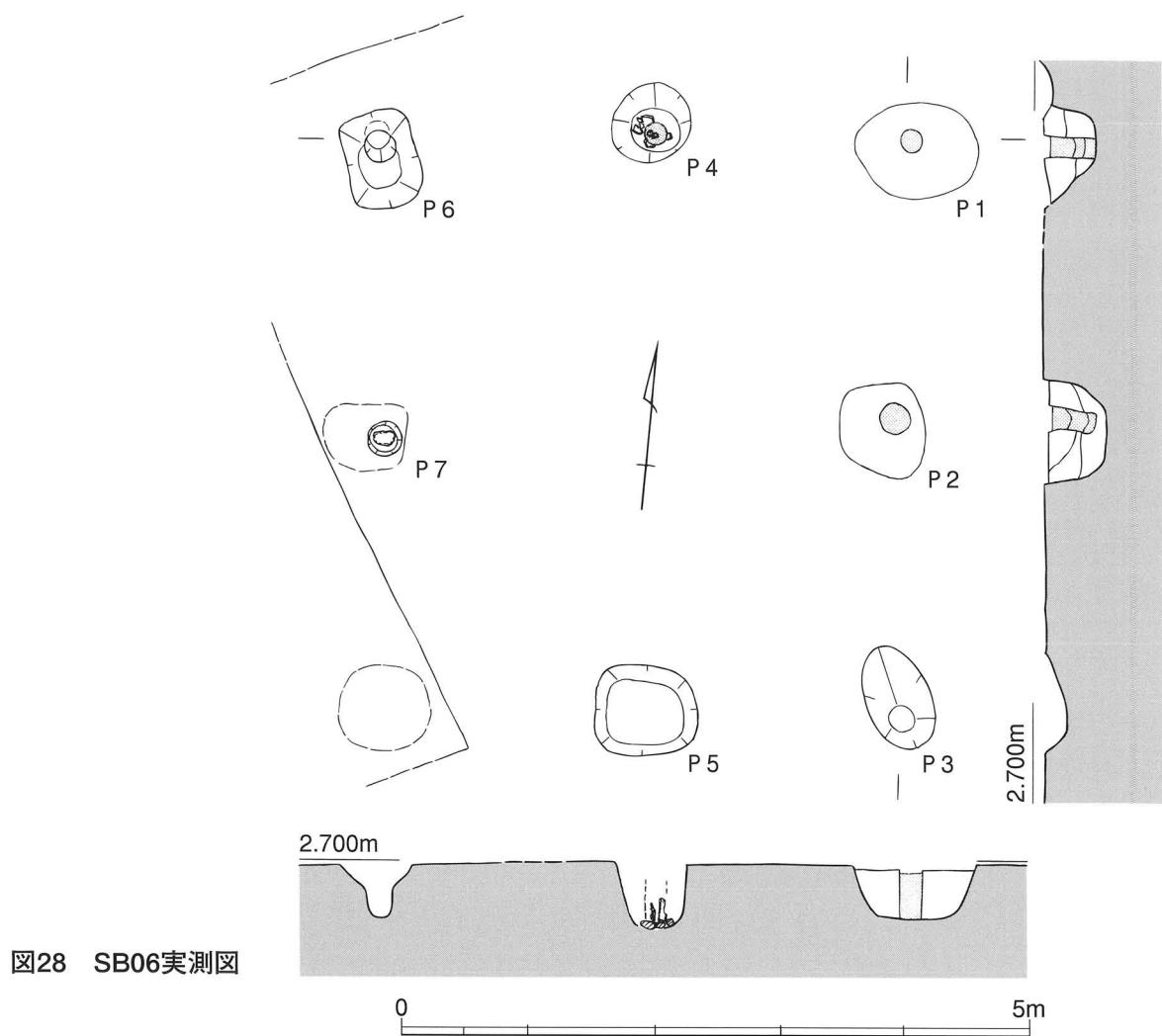
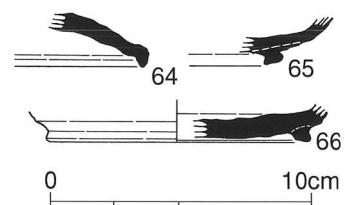


図29 SB06出土の土器



SB07

4区中央部で確認できた東西2間(2.95m)×南北2間(3.35m)の側柱の掘立柱建物で、桁行の主軸をN8.5°Wに採る。P3は調査区外のため確認できていない。

柱間距離は東西方向のP1-P3間が1.65m、P3-P5間が1.30mで、南北方向では約1.65mである。柱穴の掘形の平面形は一様ではなく、円形のものから隅円方形のものがある。また、その規模はP5の長軸1.05mを最大として、北側列の柱穴が大きく、南側列ではやや規模が小さくなる傾向がある。深さはP6の0.55mが最大である。また、P1・3・5・6・7では直径20cm前後の明確な柱痕が確認できている。さらに、P1・7では円礫による礎盤が確認されている。

出土遺物は概して少なく、P1掘形からの土師器壺Aの口縁部(67)、P2からの直径11.5cmの須恵器壺の口縁部(68)が図化できた程度である。これらの出土遺物だけからは俄かに時期を決められないが、奈良時代後半のものと考えている。(山本)

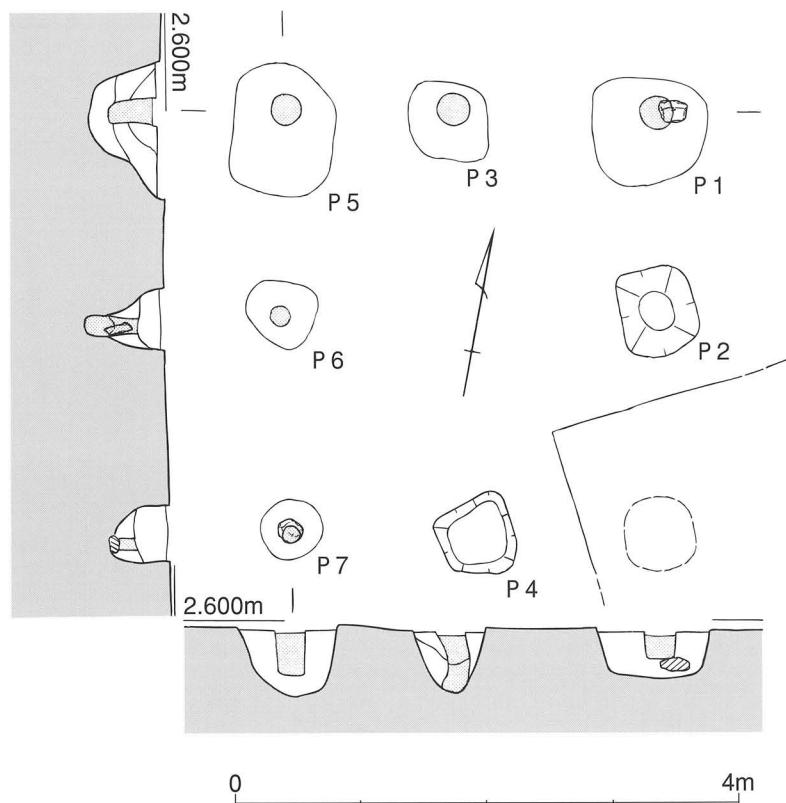


図30 SB07実測図

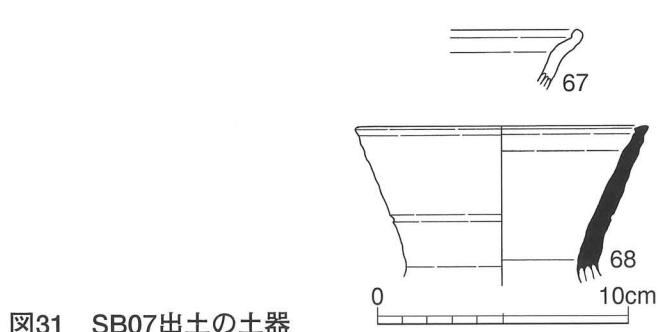


図31 SB07出土の土器

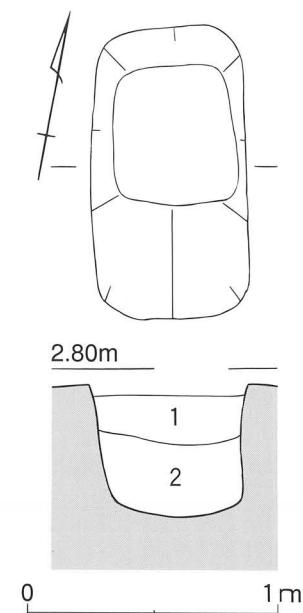
c) 掘立柱建物を構成しないピット

S P 09 4区中央部で確認された土坑状のピットで、長軸1.13m、短軸0.61m、深さ0.52mで、横断面形は「コ」字形である。埋土は2層に分けられ、下半層には拳大の黄白色あるいは灰白色の粘土塊が含まれており、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物には、土師器皿（69）と須恵器壊G蓋（70）がある。（69）は口径21.1cm、器高2.0cmで、内面には細かい暗文が施され、底部外面は不明瞭なヘラ削り調整が施される。これらの遺物から奈良時代中頃の遺構と考えられる。



図33 SP09出土の土器

図32 SP09実測図
1 淡褐色細砂質シルト
2 暗灰色細砂混粘土

S P 42 4区東部のS R01西肩部分に接して確認された土坑状のピットで、長径0.86m、短径0.62m、最大深さ0.47mで、断面形はすり鉢形である。埋土は3層に分けられる。

出土遺物には、3方向に長方形2段スカシをもつ須恵器高壊脚柱部（71）と口径14.0cmの須恵器甕の口縁部がある。これらの遺物から奈良時代を遡る時期の遺構と考えられる。

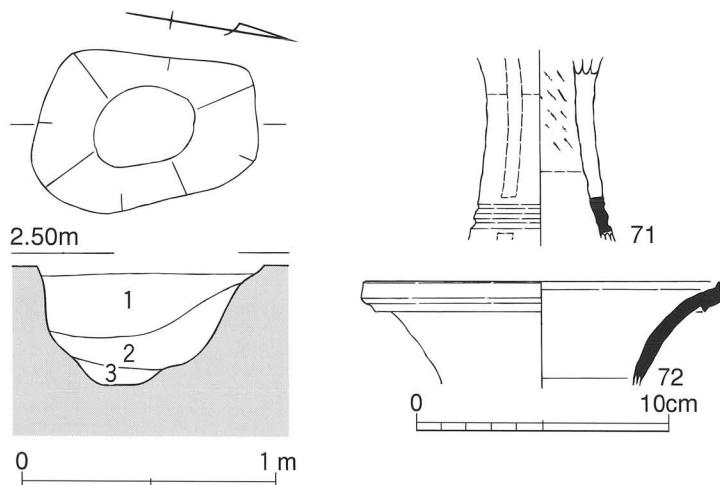


図34 SP42実測図と出土の土器

- 1 褐灰色シルト質細砂
- 2 淡褐色シルト質極細砂～細砂
- 3 暗褐色シルト混細砂

S P 44 4区東部のS R01西肩部分で確認された直径0.41m、最大深さ0.35mの柱穴である。大型の柱材が南に傾いて検出された。埋土はわずかに細礫を含む灰色シルト混じり細砂～中砂である。

出土遺物は直径26.0cm、残存高53.4cmの柱材のみで、ヒノキ属材と同定されている。かなり劣化が進んでおり、表面観察はやや困難であるが、側面には明瞭に面取りが施され、底面もハツリによる加工痕が明瞭で、平坦に仕上げられている。

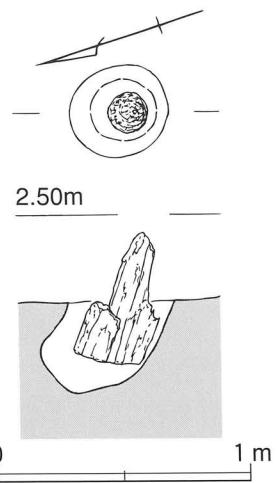


図35 SP44実測図

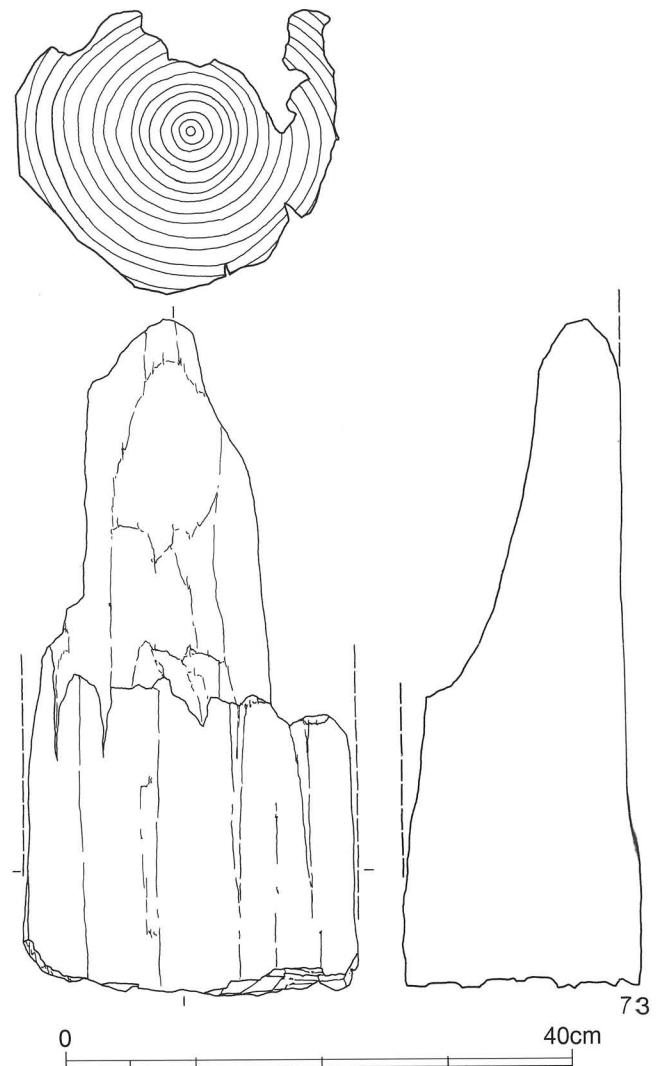


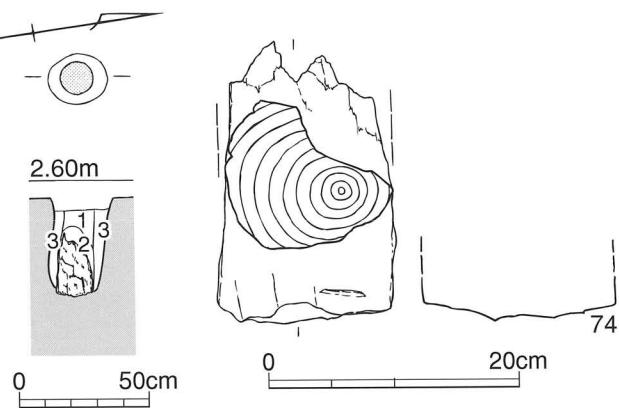
図36 SP44出土の柱材

S P 48 4区中央の西よりで確認された直径0.23m、深さ0.38mの柱穴である。掘形の埋土は淡乳灰色シルト混じり細砂である。

確認された柱材は直径15.0cm、残存高22.4cmと小型で、マツ属複維管束亜属と同定されている。遺存状態は悪く、側面の一部に面取りの痕跡が認められるに過ぎない。底面は加工痕が明瞭である。このほかに出土遺物は確認されていない。(山本)

図37 SP48実測図と柱材

- 1 明灰色シルト質細砂
- 2 明乳色細砂～中砂
- 3 淡乳灰色シルト混細砂



SP51

5区南東端に位置する直径0.45m、深さ0.50mのピットである。埋土は3層に分けられ、そのうち最上層から押し潰された状態で、ほぼ完形の黒色土器A類の椀(75)が出土している。この土器の法量は、口径15.2cm、器高5.6cm、底径6.2cmである。口縁端部はヨコナデにより外傾する平坦面をつくり出し、高台は体部と底部の境界にやや低く、若干内湾しながら下方に延びる。9世紀前半のものと考えられる。(中谷)

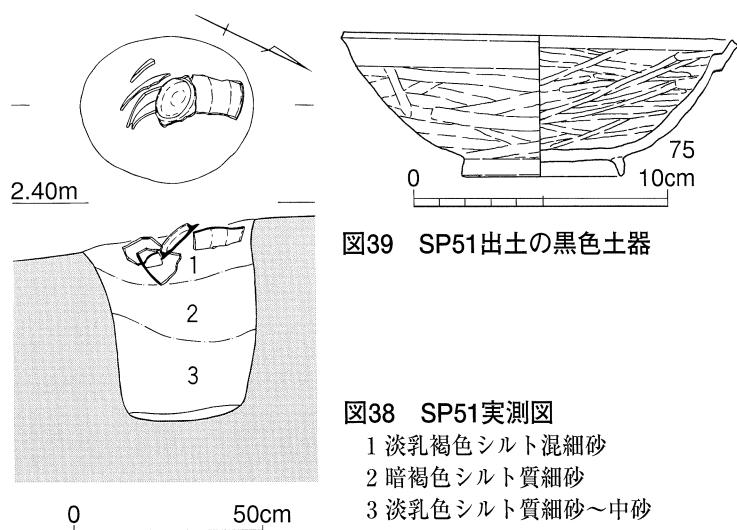


図38 SP51実測図

1 淡乳褐色シルト混細砂
2 暗褐色シルト質細砂
3 淡乳色シルト質細砂～中砂

SP88

5区北東部で確認した長径1.08m、短径0.75m、深さ0.42mの楕円形のピットで、断面形はU字形に近い。埋土は4層に分けられ、灰色あるいは淡黒灰色のシルト系で構成される。柱痕は確認できておらず、自然に徐々に埋没していったものと考えられる。なお、後述するSP160とともにSA01の延長線上に位置する。

出土遺物は木製品のみで、モミ属と同定された付け木状の棒製品(86)のほかは、いずれもヒノキあるいはヒノキ属と同定された礎盤様のやや厚みをもつ加工木片(76～81)と加工屑(82～85・87・88)が出土している。土器の出土がないため、詳細な時期は明確にできない。

図40 SP88実測図

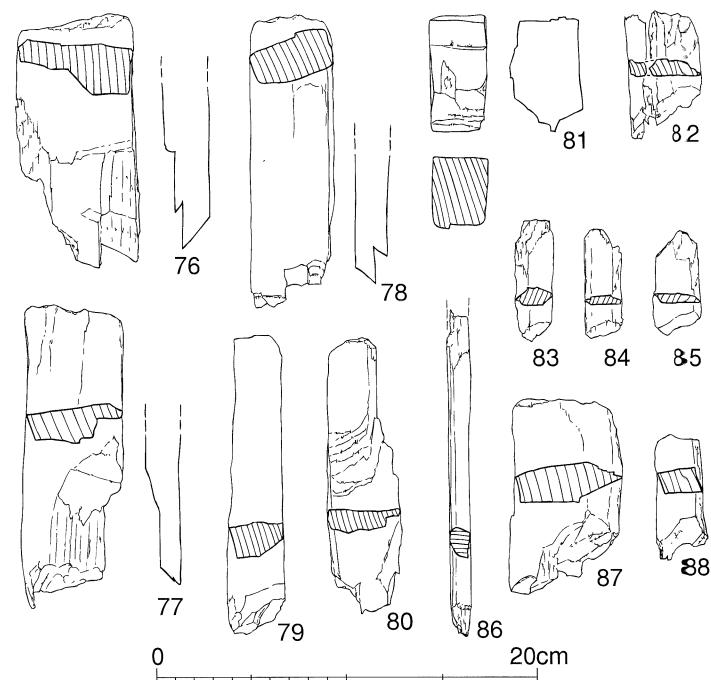
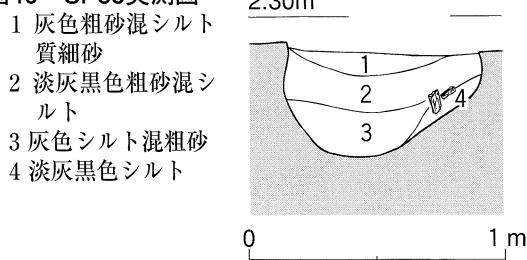


図41 SP88出土の木製品

表7 SP88出土木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
76	礎盤	SP 88②層	12.8	6.1	2.6	ヒノキ		7245
77	礎盤	SP 88②層	15.7	5.2	1.8	ヒノキ属		7246
78	加工片	SP 88②層	15.0	4.3	2.5	ヒノキ		7247
79	加工片	SP 88②層	15.3	3.0	1.8	ヒノキ		7248
80	加工片	SP 88②層	14.1	3.8	1.2	ヒノキ		7249
81	加工片	SP 88②層	6.0	3.0	3.7	ヒノキ		7250
82	加工片	SP 88②層	6.3	3.8	0.9	ヒノキ		7251
83	加工片	SP 88②層	6.1	2.0	0.9	ヒノキ		7252
84	加工片	SP 88②層	5.7	1.9	0.5	ヒノキ		7253
85	加工片	SP 88②層	5.3	2.5	0.5	ヒノキ		7254
86	加工片	SP 88埋土	16.4	1.1	1.6	モミ属		7221
87	礎盤	SP 88埋土	10.0	5.7	2.0	ヒノキ	炭化	7222
88	加工片	SP 88埋土	6.4	2.4	1.2	ヒノキ		7223

S P 123

5区北東部で確認した隅円方形の平面形をもつピットで、S D08に東半を切られ、S P 88の東側に位置する。その規模は東西0.59m、南北0.50m、深さ0.20mである。埋土は淡黒灰色シルト質細砂の単層である。

長さ39.6cm、幅14.0cm、厚さ2.8cmの板材が出土しており、この板材の上層では自然円礫を2個検出している。土器の出土がなく、詳細な時期は明確にできないものの、S D08より時期の遡る遺構である。(山本)

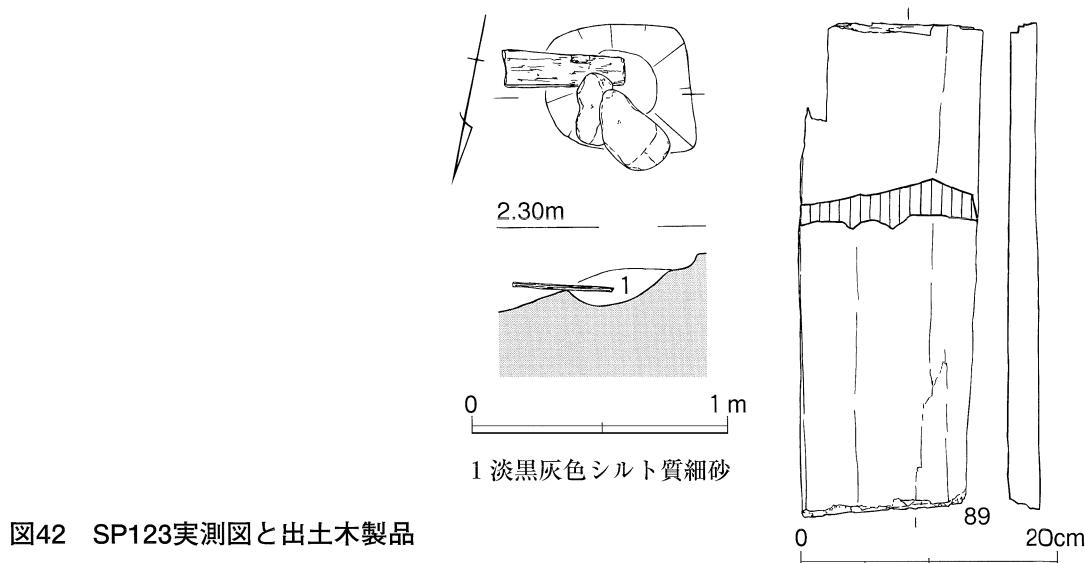


図42 SP123実測図と出土木製品

S P 124

5区中央で確認した直径0.62m、深さ0.45mの柱穴である。掘形の埋土は淡黒茶色粗砂混シルトおよび暗青灰色シルト混粗砂である。淡黒灰色粗砂混シルトあるいは淡灰黒色シルト質細砂を埋土とする直径23cm、深さ32cmの明瞭な柱痕が確認できたものの、掘立柱建物を構成するには至らない。

掘形埋土からは10点の加工屑片(90~99)が出土している。樹種同定の結果、そのほとんどがヒノキ・ヒノキ属と判明している。

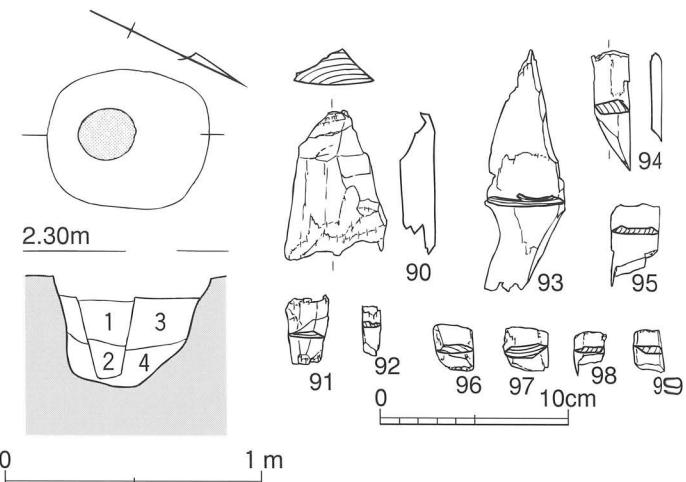


図43 SP124実測図と出土木製品

- 1 淡黒灰色粗砂混シルト
- 2 淡灰黒色シルト質細砂
- 3 淡灰黒茶色粗砂混シルト
- 4 暗青灰色シルト混粗砂

表8 SP124出土木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
90	礎盤	SP 124 柱痕	7.7	5.3	1.9	ヒノキ		7235
91	加工片	SP 124 柱痕	3.5	2.2	0.3	ヒノキ		7236
92	加工片	SP 124 柱痕	2.6	1.0	0.3	ヒノキ		7237
93	礎板	SP 124 挖形	12.0	4.3	0.7	ヒノキ		7227
94	加工片	SP 124 挖形	6.2	2.0	0.8	ヒノキ		7228
95	加工片	SP 124 挖形	3.7	2.7	0.4	ヒノキ		7229
96	加工片	SP 124 挖形	2.4	2.2	0.5	ヒノキ		7230
97	加工片	SP 124 挖形	2.3	2.3	0.7	ヒノキ		7231
98	加工片	SP 124 挖形	1.8	1.6	0.3	ヒノキ		7232
99	加工片	SP 124 挖形	2.2	1.7	0.4	ヒノキ		7233

SP 125 5区中央部で検出した隅円方形の平面形をもつ東西0.50m、南北0.65m、深さ0.55mのピットである。埋土は上層に黒灰色シルト系、下層に淡灰色粗砂が堆積している。中央部分には柱材の抜き取り痕があり、上面では須恵器坏B蓋と拳大の円碟が数点出土している。

出土遺物には針葉樹と同定された長さ25.5cm、直径1.0cmの付け木様の割木（101）とヒノキと同定された長さ22.1cm、直径0.7cmの加工木片（102）の木製品がある。上面から出土した須恵器坏B蓋（100）は口径17.0cm、器高2.6cmで、つまみをもつ平らな天井部と口縁部の境が稜をもって屈曲し、口縁部はなだらかに斜め下方に延び、端部は折り曲げずにつぶされたように終わる。

これらの遺物から奈良時代後半のものと考えられる。

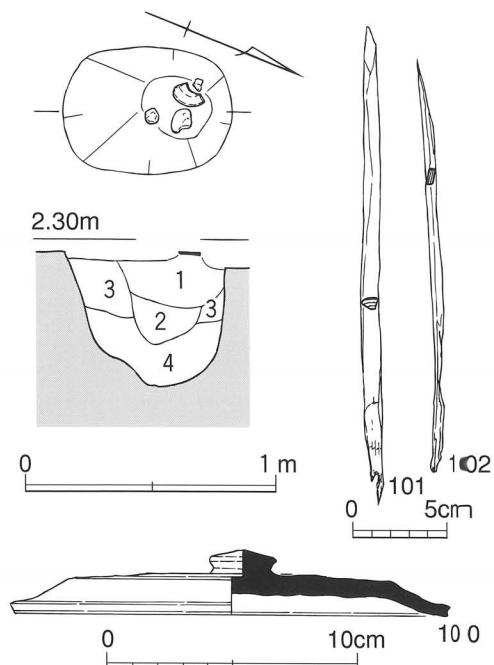


図44 SP125実測図と出土遺物

- 1 淡黒灰色シルト質細砂
- 2 淡灰黒色シルト
- 3 淡灰黒色シルト混細砂
- 4 淡灰色粗砂

SP160

5区中央部で検出されたやや不整形な隅円方形の平面形をもつ大型のピットで、その規模は東西0.90m、南北1.00m、深さ0.50mである。西寄りに直径26cm、深さ30cmの柱痕状の埋土もみられるが、掘形底部中央に据えられた長径30cm、高さ18cmの自然角礫を礎盤としていた柱材が抜き取られた後埋没した結果と考えている。SP88とともに、SA01の延長線上に位置する。

埋土からの出土遺物には土師器高環脚端部（103）と内面にかえりのつく須恵器環G蓋（104）のほか、クスノキ科と同定された長さ32.0cm、直径2.3cmの柄状の棒材（105）やヒノキと同定された角材や加工木片（106～109）がある。これらの遺物から奈良時代前半のものと考えられる。

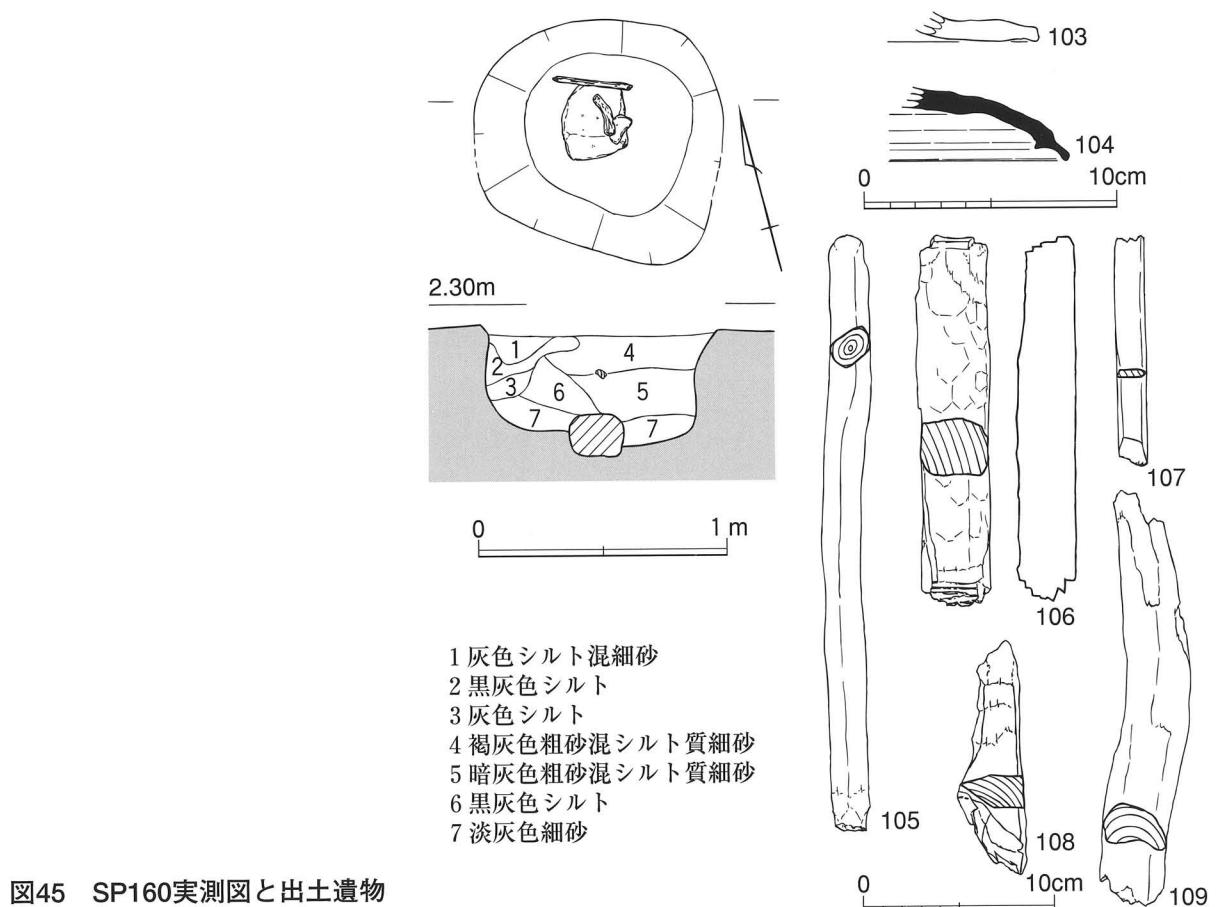


図45 SP160実測図と出土遺物

表9 SP160出土木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
105	柄	SP 160 掘形 (⑤層)	32.0	2.3	—	クスノキ科		7260
106	角材	SP 160 掘形 (⑤層)	19.8	3.9	3.2	ヒノキ		7259
107	加工片	SP 160 掘形 (⑤層)	12.5	1.5	0.4	ヒノキ		7261
108	加工片	SP 160 埋土	12.4	3.5	1.6	ヒノキ		7239
109	柱材？	SP 160 掘形	22.0	3.7	2.2	ヒノキ科		7256

SP162

5区中央部で検出された直径1.15m、深さ0.10mの平面円形の浅いピットで、南半は調査対象地外に延びる。埋土は褐灰色シルトで、他のピットと比較して浅く、柱穴の可能性は低い。また、SX11から連続する遺構と考えると、SD09などと同規模・同一方位を採り、一連の遺構群として把えることも可能であるが、その性格は不明である。

出土遺物で図化可能なものは、長さ85.2cm、幅14.8cm、厚さ3.4cmのスギと同定された板材(110)のみである。中央部がわずかにくびれた形態で、ほぼ全面に加工が施され、平滑に仕上げられているが、その用途は不明である。この他には遺物は出土しておらず、明確な時期は不明である。

SP256

5区中央部で検出された直径0.62m、深さ0.45mの平面不整円形のピットである。西端部はSP258に切られている。埋土は3層に大別できるが、柱痕は確認されていない。しかし、コウヤマキと同定された長さ10.0cm、幅7.6cm、厚さ2.1cmの加工材(111)が出土しており、柱穴であった可能性がある。この他には、埋土から時期を明確にできる遺物は出土していない。(中谷)

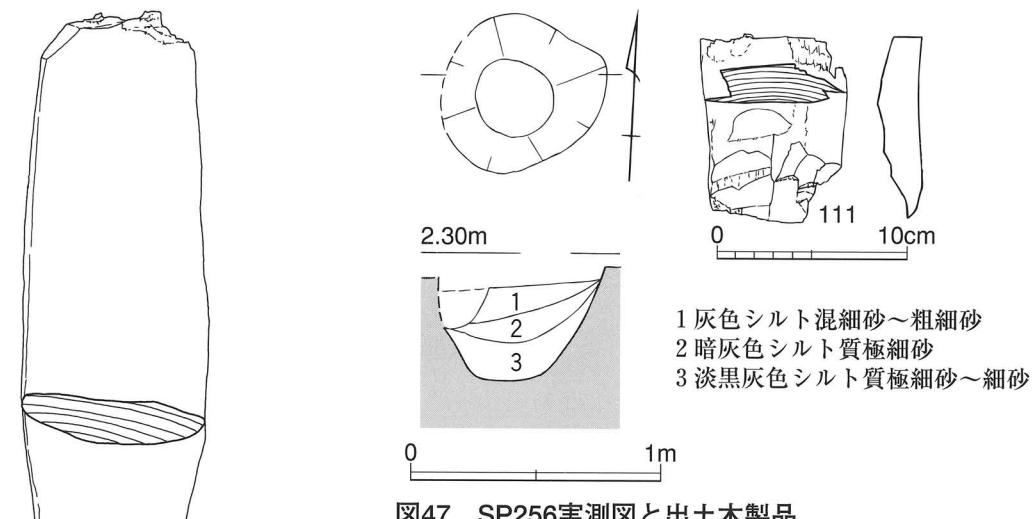


図47 SP256実測図と出土木製品

図46 SP162出土の木製品

d) 溝

SD03

S X 06を切って南北方向に延びる溝状遺構である。最大幅1.53m、最大深さ0.13mで、断面形は逆蒲鉾形である。埋土は暗褐色系のシルト混じり細砂で、焼土とともに土器小片がまとまって出土している。

土師器の器種には壺A・壺B・皿A・皿B・皿B蓋・椀B・高壺・甕などがあり、須恵器には壺B・壺B蓋・中型の甕体部がある程度である。この他には、棒状有孔土錘や直径3.6cm、残存長4.4cm、重さ62.8gの棒状に仕上げられた片岩片(132)も出土している。

土師器の壺B(113~115)については当地域での類例が乏しく、詳らかにできない。丸みをもった貼り付け高台が底部外面端部に位置する点から、平安時代前期にまで下るものと考えている。S X 06を切っている点もこれを首肯するものであろう。(山本)

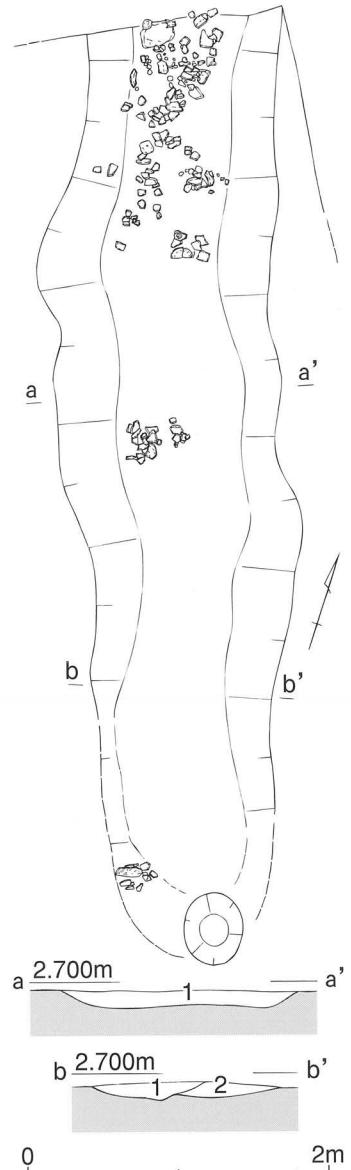


図48 SD03実測図

1 暗褐色シルト質極細砂～細砂
2 暗褐灰色シルト細砂

表10 SD03出土の土器 観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	その他特徴
112	土師器	壺A	13.6	2.6		50	0.5mm前後のチャート・長石含む	良好	暗乳橙色	磨滅顯著
113	土師器	壺B	12.8	3.4	9.0	25	微粒のチャート・石英を含む	良好	淡橙色	
114	土師器	壺B	12.6	3.9	9.4	25	微粒のチャート・石英・クサリレキを含む	良好	暗乳橙色	
115	土師器	壺B	12.0	3.5	8.6	20	1mm前後のチャート・石英を含む	良好	暗橙色	
116	土師器	皿A	17.6	2.3		30	1mm前後のチャート・石英を含む	良好	淡乳橙色	
117	土師器	皿A	16.5	2.6		33	ほとんど砂粒を含まない	良好	暗乳橙色	
118	土師器	皿A	14.6	2.0		25	0.5mmのチャート・長石・クサリレキを含む	良好	明橙乳色	
119	土師器	皿B	25.5	3.5	19.0	20	1mmのチャートをわずかに含む	良好	乳橙色	図上復元
120	土師器	椀B	18.8	5.3	9.4	50	0.5~1mmのチャート・石英・クサリレキを含む	良好	明赤橙色	図上復元
121	土師器	高壺	18.8	1.7		10	0.5mmのチャート・長石・クサリレキを含む	良好	暗橙色	
122	土師器	高壺脚	—	6.6		33	1mmのチャート・石英・クサリレキを含む	良好	暗橙色	
123	土師器	皿B蓋	—	—		100	0.5mm前後のチャート・長石含む	良好	暗乳橙色	
124	土師器	甕	17.6	4.5		17	1~2mmのチャート・長石・石英・クサリレキ含む	良好	暗乳色	
125	須恵器	壺B蓋	15.1	3.2		20	1mm前後の白色砂粒を含む	良好	灰色	
126	須恵器	壺B蓋	18.2	1.6		20	1~2mmの灰・白色砂粒を含む	良好	淡緑灰色	
127	須恵器	壺B蓋	16.9	1.2		25	1~2mmの灰・白色砂粒を含む	良好	淡乳灰白色	
128	須恵器	壺B	—	3.4	11.2	33	わずかに微砂粒を含む	良好	淡灰色	口縁欠損
129	須恵器	壺B	—	3.0	10.0	20	1mm前後の白・灰・褐色砂粒を含む	良好	淡紫灰色	口縁欠損
130	須恵器	甕	—	29.0	24.3	33	0.5mm前後の白色砂粒を含む	良好	灰色	
131	棒状有孔土錘		1.3	5.7		100	0.5mmのチャート・長石を含む	良好	暗灰色	12.0 g

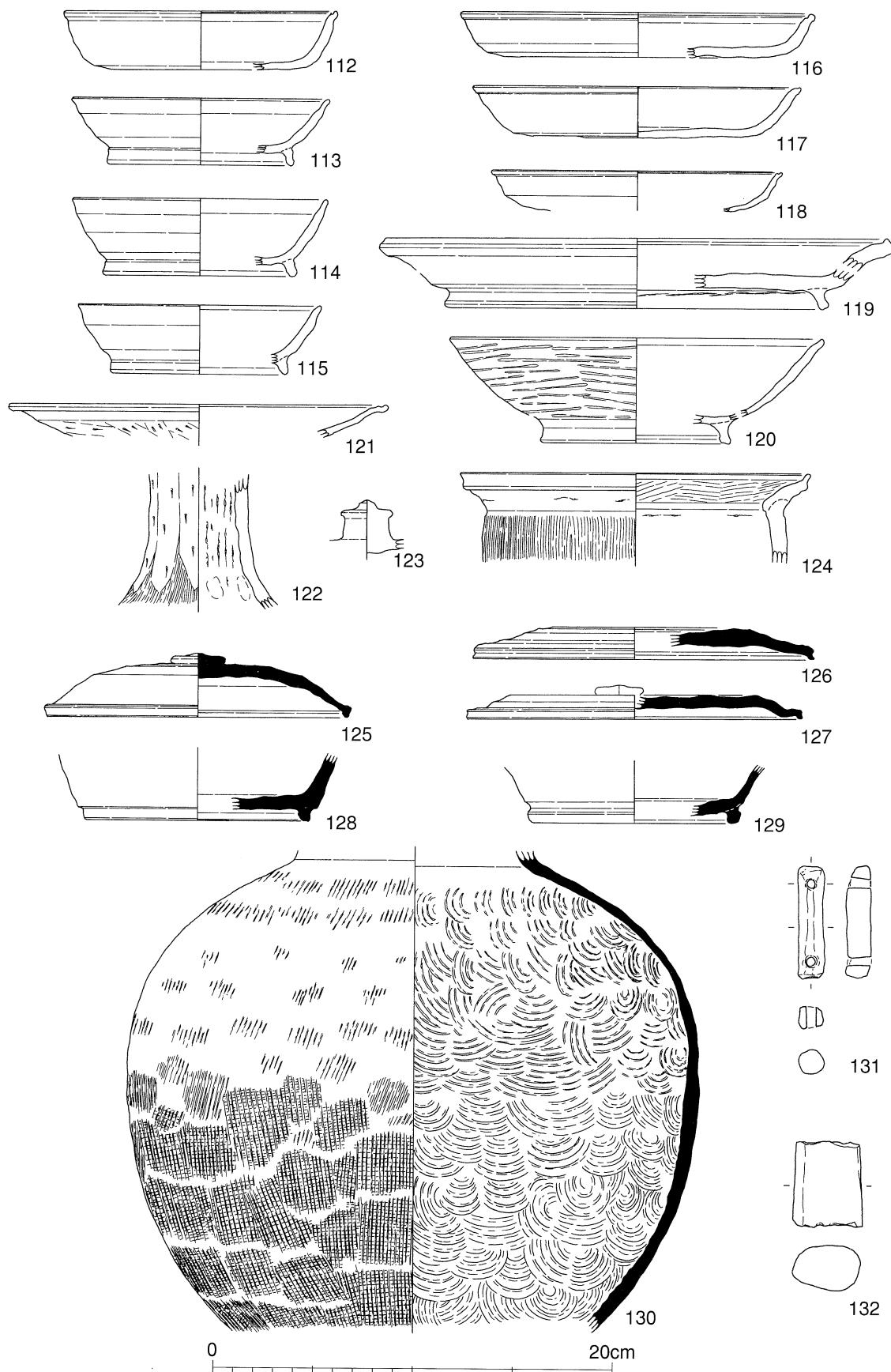


図49 SD03出土の遺物

SD05

5区北西端に位置し、検出長4.5m、幅0.8m、深さ0.05mの規模で、主軸はN 6° Wを指向する。大部分は調査区外に伸びているため、全体の規模は不明であるが、近接するSD06・07などと同様の遺構になる可能性が高い。埋土は2層に分けられる。なお、時期を明確にできる土器は出土していない。

木製品が2点出土しており、いずれも素材はヒノキと同定されている。(133)は残存長7.6cm、幅3.3cm、厚さ2.1cmの木柄の端の部分で、小口部分の握りが明瞭に削り出されている。(134)は残存長4.7cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmの薄い板状製品で、中央に約5mmの穴を穿っている。

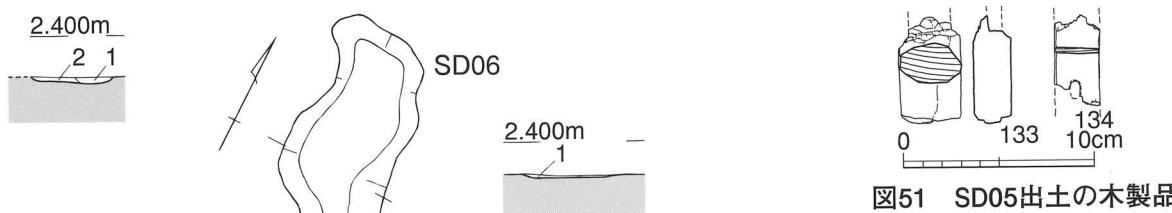


図51 SD05出土の木製品

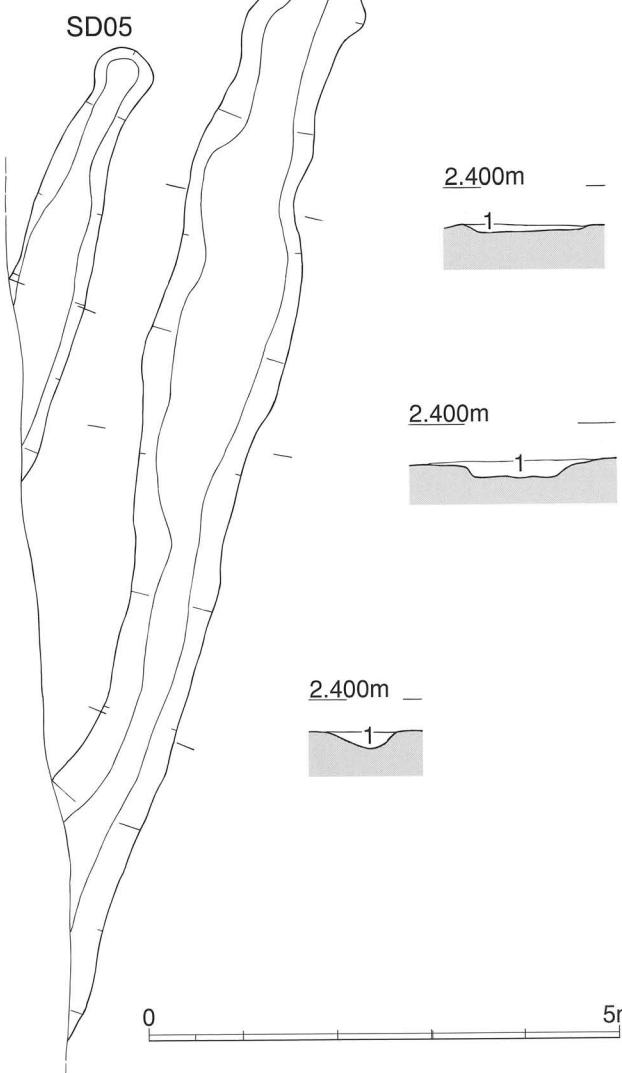


図50 SD05・06実測図

- 1 暗褐色シルト質極細砂～細砂
- 2 暗褐色シルト細砂

SD06

5区北西端に位置し、検出長13.5m、最大幅 1.4m、深さ0.10~0.20mの規模である。S D05と同様に南側が調査区外に延びているため、全体の規模は不明である。また、南側に向かって徐々に深くなっているが、これは傾斜があるため削平を免れたものと考えられる。この溝も S B01・S B04・S A01などと同様に、N 9° Wを指向しており、これらの遺構と何らかの関係があると考えられる。

埋土からは土師器・須恵器・綠釉陶器・漁網錘と多くの木製品が出土している。(135) は須恵器壺Aで、口径12.4cm、器高 3.5cmである。底部外面には欠損するものの、「大カ垣」の墨書が認められる。また、体部外面にも欠損しているものの、「大カ」の墨書が認められる。底部外面は回転ヘラ切り未調整である。(136) は須恵器甕の口縁部で、口径 18.5cm、残存器高 5.5cm。口縁端部はやや内側に突出し、頸部は緩やかに外湾している。また、表面には若干の自然釉の付着が認められる。(137) は綠釉陶器椀で、底径 6.7cm、残存高1.2cm。底部は円盤状高台で、釉色は暗青緑色、胎土は淡褐色の軟質である。(138) は土師質の管状土錘で、長さ 5.6cm、幅 1.2cm、孔径0.35cm、重さは 6.8 g。(139) は土師質の有溝土錘で、長さ 5.1cm、幅 3.0cm、厚さ 1.6cm、重さは25.7 g。胎土にはチャートや角閃石などを含んでおり、(138) とは胎土が異なっている。

(140) は均整唐草文軒平瓦で、瓦当の一部しか残存していないため、ほとんどの法量は不明であるが、瓦当厚は 5.0cmである。上外区を肉薄の連珠文で飾り、左縁と下外区を線鋸歯文で飾り、内区を均整唐草文で飾る。瓦当底面は 7.0cmと幅が広く、顎部には強いヨコナデによる明瞭な段が見られる。凹面の上端面はヘラ削りによる隅切りが施され、布目はナデによってスリ消されている。側面は狭端から広端への強いヘラ削

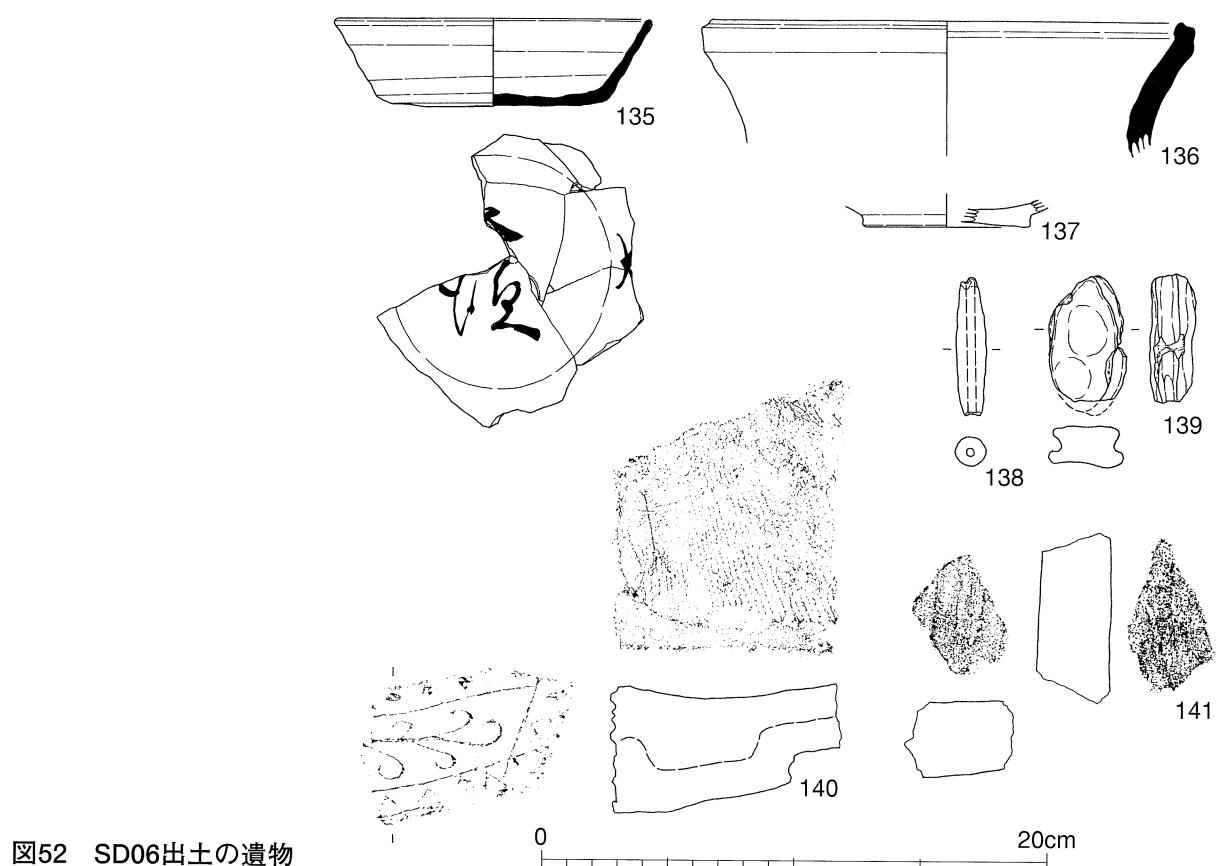


図52 SD06出土の遺物

りが施される。焼成は硬質である。なお、芦屋廃寺遺跡⁽¹⁾に同範資料がある。

(141) は軟質の平瓦の小片で、凹凸面ともにナデで仕上げられる。

木製品については表11に詳しいが、そのほとんどが加工片であり、製品には柄8点・曲物底1点・抉入り板材1点のほかC型式の斎串(169)などもあり、全体の20%程度を占める。また、その素材はヒノキやスギのような針葉樹材が用いられている。この傾向は他の加工片・板材などでも同じで、ヒノキ・ヒノキ属が選択されていたことが判明している。また、この他の遺物として馬歯(写真図版65-B25)が出土している。

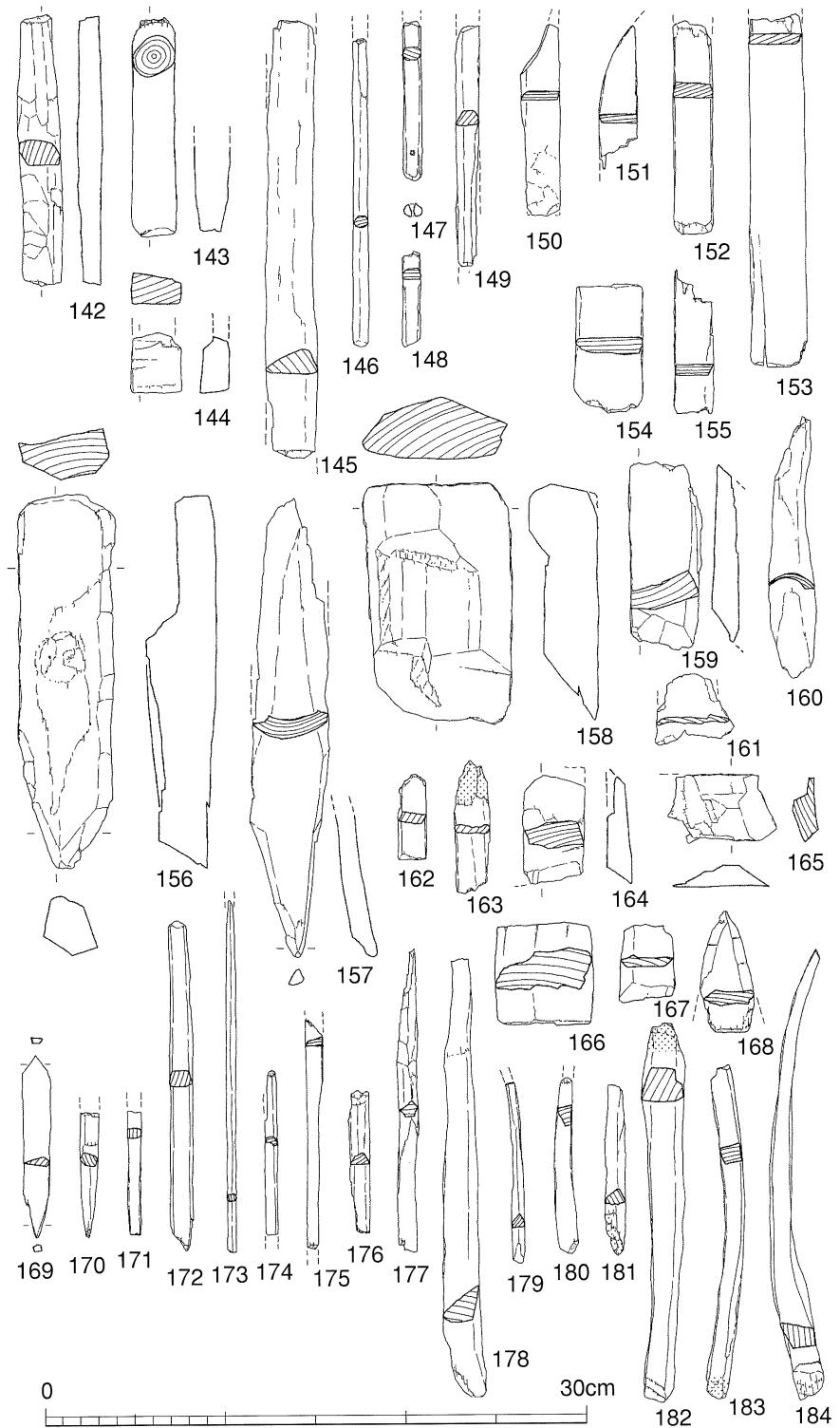


図53 SD06出土の木製品

表11 SD06出土木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
142	柄?	SD 06-②・③区間	15.0	2.4	1.3	ヒノキ		7159
143	丸柄?	SD 06-③区	11.2	2.5	2.2	ヤブツバキ		7088
144	角柄?	SD 06-③区	3.4	2.9	1.6	ヒノキ		7118
145	丸柄	SD 06-②区	24.4	2.9	1.4	ヒノキ		7073
146	丸柄	SD 06-③区	34.4	1.7	1.4	ヒノキ		7086
147	柄	SD 06-②・③区間	8.8	1.0	0.7	スギ		7160
148	角柄	SD 06-②区	5.0	1.0	0.6	スギ		7085
149	角柄	SD 06-②区	13.4	1.3	0.8	ヒノキ		7079
150	抉入り板材	SD 06-④区	10.7	2.2	0.5	ヒノキ		7128
151	曲物底	SD 06-④区	6.2	2.1	0.5	ヒノキ属		7126
152	角材	SD 06-②区	11.8	1.0	0.8	ヒノキ	炭化	7115
153	板材	SD 06-②区	19.5	3.0	0.6	ヒノキ		7077
154	板材	SD 06-③区	9.1	3.8	0.9	ツガ属		7090
155	板材	SD 06-②区	8.1	2.2	0.6	ツガ属		7082
156	丸杭	SD 06-③区	21.0	5.3	3.9	ヒノキ		7087
157	加工片	SD 06-④区	25.6	4.2	1.2	マツ属複維管束亞属		7127
158	割材	SD 06-②区	13.2	8.1	3.8	ヒノキ属		7113
159	加工片	SD 06-②区	10.4	4.0	1.6	ヒノキ		7074
160	加工片	SD 06-⑤区	14.6	2.6	0.6	ヒノキ		7098
161	加工片	SD 06-⑤区	4.1	4.4	0.4	ヒノキ		7100
162	加工片	SD 06-②区	4.7	1.6	0.5	ヒノキ		7076
163	加工片	SD 06-②区	7.4	2.0	0.5	アカマツ	炭化	7083
164	加工片	SD 06-⑤区	5.8	3.4	1.4	マツ属複維管束亞属		7099
165	加工片	SD 06-②区	5.7	3.7	1.3	ヒノキ		7075
166	加工片	SD 06-②区	5.7	5.4	2.2	ヒノキ		7089
167	切断角材	SD 06-③区	4.1	3.1	0.7	スギ		7116
168	加工片	SD 06-③区	6.8	3.0	0.8	ヒノキ		7117
169	斎串?	SD 06-②区	10.2	1.5	0.5	ヒノキ		7080
170	加工片	SD 06-④区	5.0	1.1	0.7	ヒノキ	炭化	7096
171	加工片	SD 06-④区	6.9	0.7	0.5	ヒノキ		7095
172	割材	SD 06-②区	18.1	1.3	0.9	ヒノキ	炭化	7114
173	加工片	SD 06-③区	19.6	0.5	0.4	ヒノキ		7091
174	加工片	SD 06-④区	9.2	0.7	0.5	ヒノキ		7094
175	加工片	SD 06-④区	12.6	1.0	0.5	ヒノキ		7092
176	割材	SD 06-②区	8.0	1.1	0.6	ヒノキ	炭化	7084
177	加工片	SD 06-②区	17.0	1.1	0.9	ヒノキ		7078
178	割材	SD 06-③区	25.0	1.7	1.3	アスナロ	炭化	7119
179	加工片	SD 06-④区	10.0	0.7	0.9	ヒノキ		7093
180	割材	SD 06-③区	9.6	1.2	1.0	ヒノキ		7101
181	割材	SD 06-③区	9.5	1.1	0.9	ヒノキ	炭化	7181
182	加工片	SD 06-⑤区	21.3	1.5	1.3	アカマツ	炭化	7123
183	割材	SD 06-③区	18.6	1.0	0.8	ヒノキ属		7124
184	加工片	SD 06-②区	25.7	1.2	1.0	ヒノキ属	炭化	7122

SD07

5区西部に位置し、検出長24m、最大幅1.5m、深さ0.10~0.20mで、各所で時期不詳

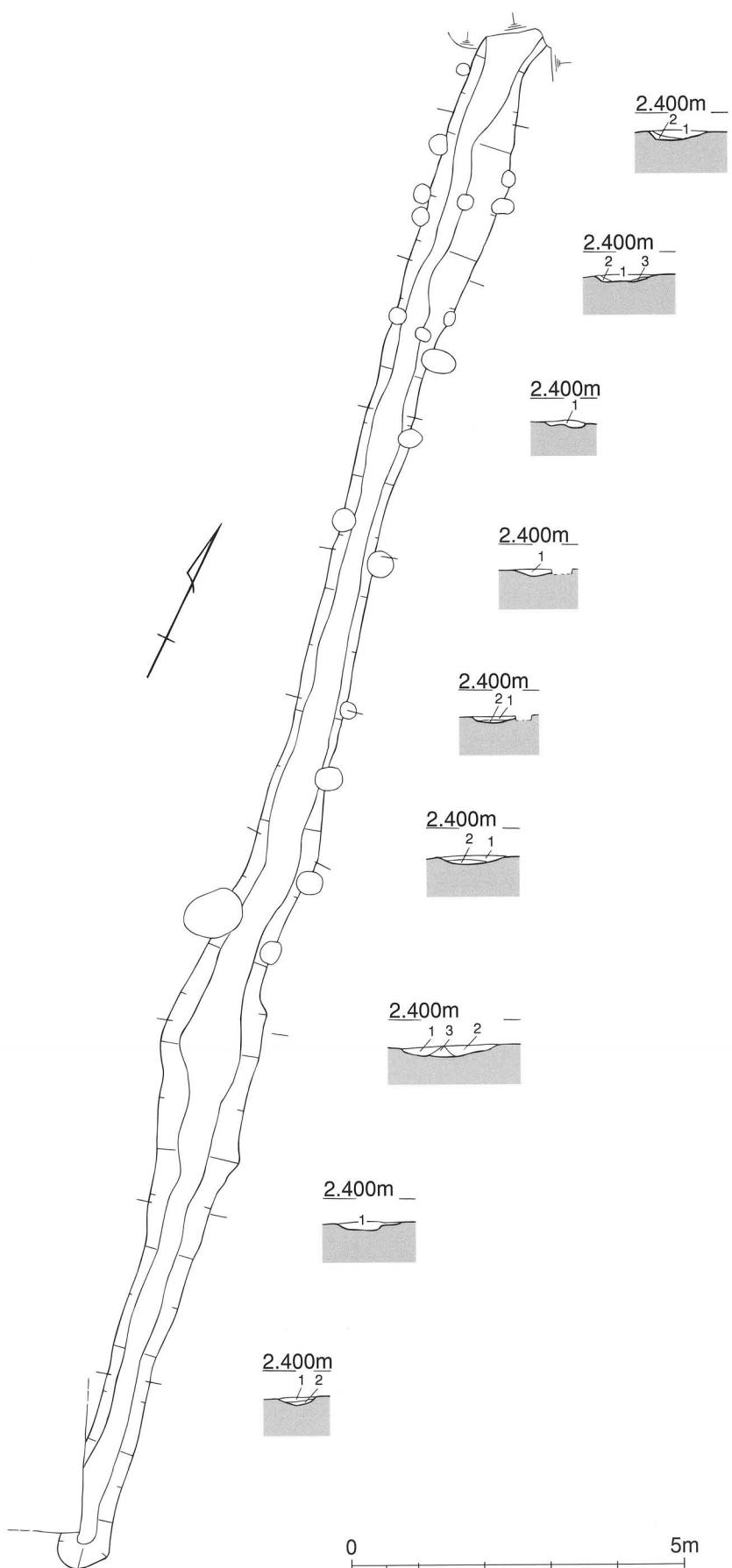


図54 SD07実測図

- 1 暗褐色小礫混じりシルト質細砂
- 2 暗灰色細砂
- 3 暗褐色小礫混じり細砂

の松杭に切られ、北端は攪乱により消失している。この溝もN10°Wを指向し、直線的に掘削されている。

遺物は土師器・須恵器・土錘・馬齒・木製品が出土しており、詳細は表12・13に譲る。(185)は土師器高坏で、ナデ仕上げの比較的浅い坏部と、裾部が大きく外方に開く脚部をもつ。(188)は須恵器坏B蓋で、内面に墨痕が認められ、転用硯と考えられる。(191)は須恵器の短頸壺で、胴部は算盤形で、頸部には明瞭な接合痕が残る。

(193～195)は須恵器の甕で、カキ目や櫛描波状文など他の遺構の遺物よりもやや古い傾向がみられる。

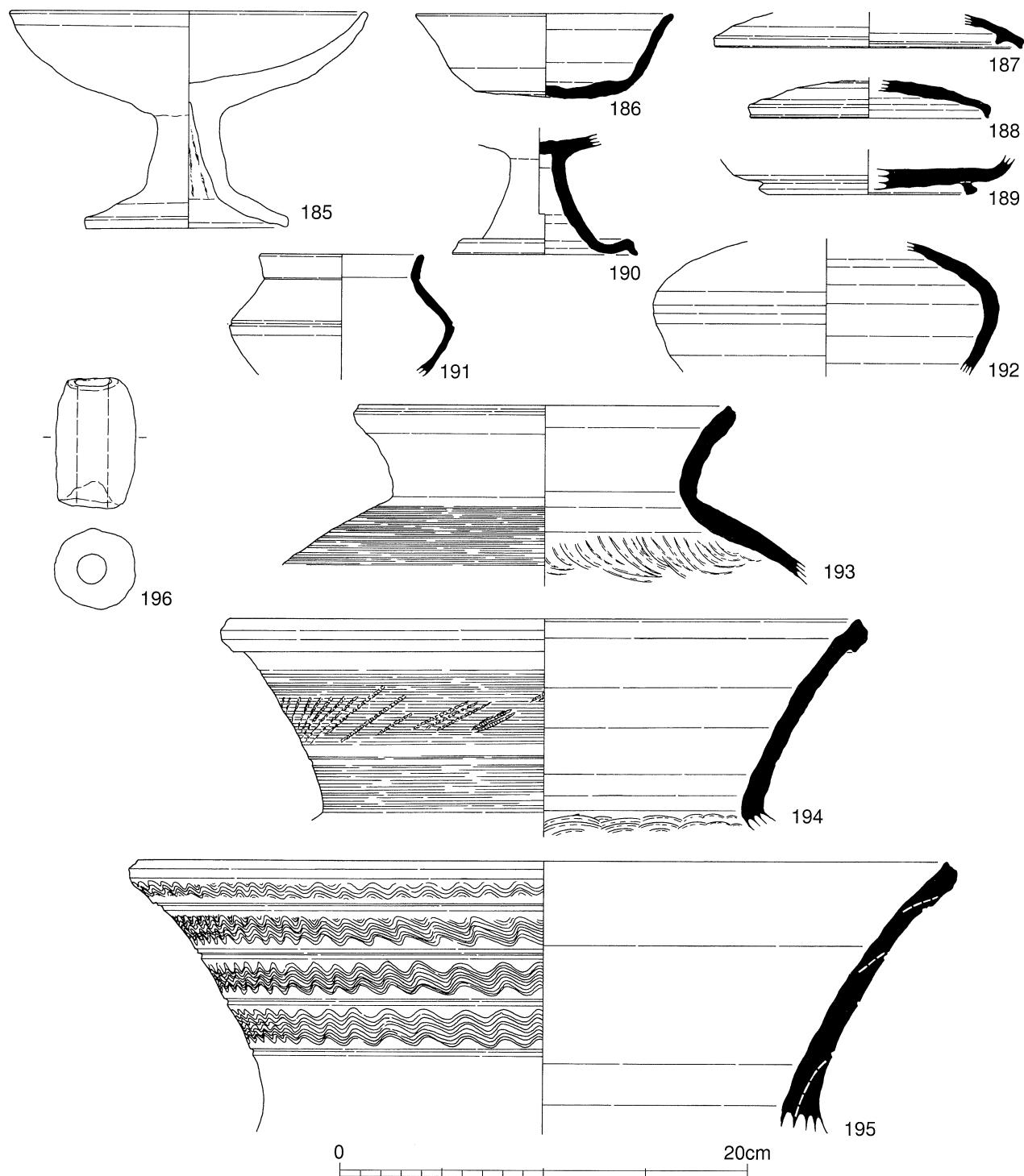


図55 SD07出土の土器

表12 SD07出土の土器 観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	その他特徴
185	土師器	高坏	17.55	10.8	9.9	65	1~3mmのチャート・長石・石英・クサリレキ含む	良好	淡乳橙色	
186	須恵器	坏G	12.6	4.2		90	1mm前後の白色砂粒を多く含む	良好	灰色	
187	須恵器	坏B蓋	15.1	1.7		16	0.5~1mmの白色砂粒を含む	良好	灰色	つまみ欠損
188	須恵器	坏B蓋	11.7	1.9		17	1mmの白・灰色砂粒を含む	良好	灰色	転用硯
189	須恵器	坏B	—	2.0	9.8	25	0.5mm前後の白・灰色砂粒を多く含む	良好	淡灰色	口縁部欠損
190	須恵器	高坏	—	6.0	9.0	90	1mmの白・灰色砂粒を含む	良好	灰色	坏部欠損
191	須恵器	壺A	7.8	6.1		20	1mm前後の白・灰色砂粒を含む	良好	灰色	底部欠損
192	須恵器	壺A	17.1	6.5		25	0.5mm前後の白・灰色砂粒を多く含む	良好	淡青灰色	体部のみ
193	須恵器	甕	18.2	8.8		33	0.5mm前後の白・暗灰色砂粒を多く含む	良好	淡灰色	
194	須恵器	甕	31.1	10.5		25	1~3mmの白・灰色砂粒を多く含む	良好	暗灰色	
195	須恵器	甕	39.9	13.4		12	1~2mmの白色砂粒を含む	良好	明灰色	
196	管状土錘		6.5	3.9	1.5	100	1~2mmのチャート・石英・クサリレキ含む	不良	淡橙乳色	84.5 g

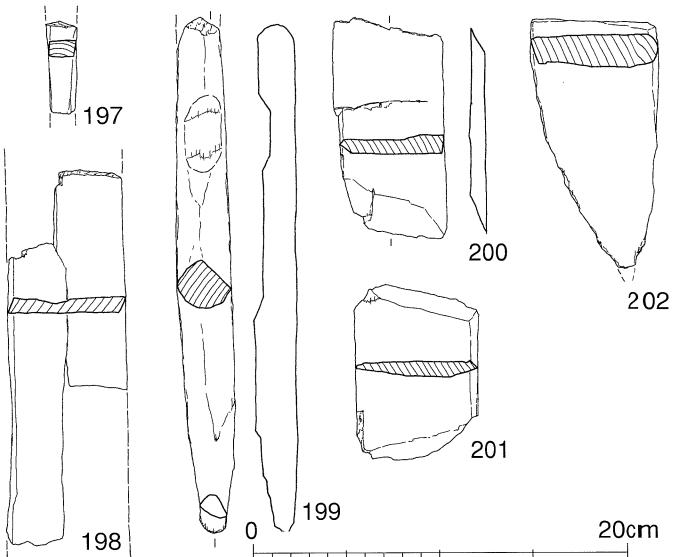


図56 SD07出土の木製品

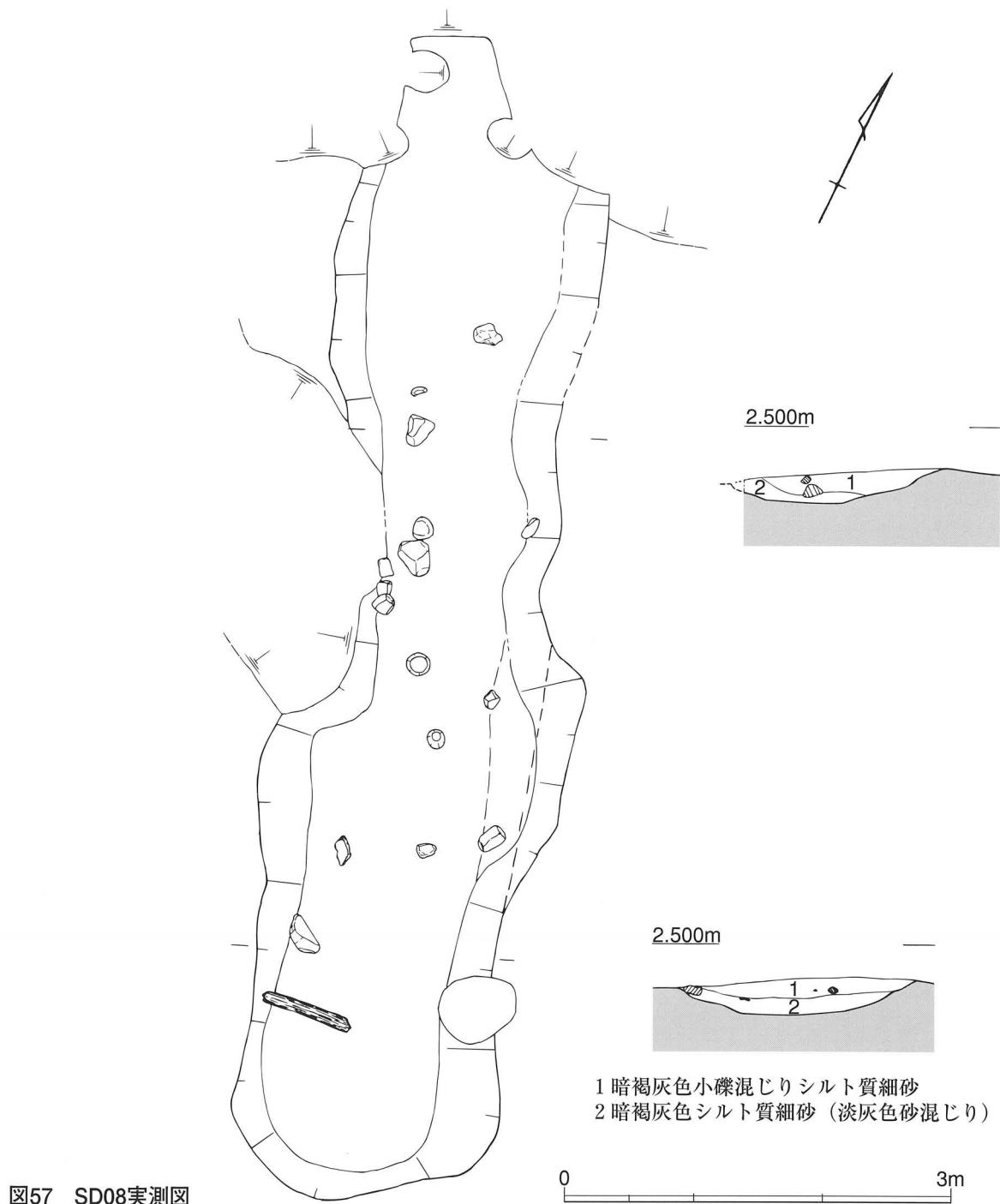
表13 SD07出土木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹 種	備考	W-No.
197	角柄?	SD 07-①区	4.9	1.5	0.9	ヤブツバキ		7130
198	板材	SD 07-①・②区間	19.8	6.2	0.8	ヒノキ		7176
199	丸柄?	SD 07-②区	27.2	2.8	2.3	ヒノキ属		7133
200	角材	SD 07-②区	11.1	2.8	1.0	ヒノキ		7131
201	加工片	SD 07-②区	9.1	6.6	0.8	ヒノキ		7132
202	板杭	SD 07-①区	13.0	6.7	1.7	ヒノキ		7163

木製品には（198・200・201）の薄い板状品が多いが、（199）は側面に長さ4cm、幅2cmの抉りがあり、農工具の柄である可能性が高い。（中谷）

S D 08 5区北東で確認した溝状の遺構で、検出長9.0m、最大幅2.3m、最大の深さ0.23mである。北側と西側の一部を搅乱により欠いているほか、遺構上部も搅乱を顕著に受けている。埋土は砂あるいは小礫の混じり具合により2層に分けられるが、基本的に暗褐色のシルト質細砂である。主軸方向は、N 18.5° Wを指向する。このS D 08と、南側で検出したS D 09はほぼ同様・同規模で、両者は東側の掘立柱建物群からなる区域を区画する性格をもつ、一連の遺構とも考えられたが、主軸方向にやや違いが認められる。この違いは時期差によるものと考えられるが、出土遺物からは明確な時期差を示すことはできない。

遺物は、土師器・須恵器・瓦・木製品が出土している。(203) のように古い時期の遺物も含むが、概ね奈良時代中頃の遺物と考えられる。須恵器には、壺B蓋内面に墨痕が認められ転用硯と考えられるもの(204)や、4点の墨書き土器を含む。(205)は、壺B蓋内面に墨書きが認められるが、判読は不能である。(206・207)は壺B底部外面に墨書きが認められるが、(206)は判読不能、(207)は「少カ」と判読できる。(209)はいわゆる稜椀の底部外面に「驛」の墨書きを施す。体部下半の回転ヘラ削りは丁寧に施しているが、底部外面は、回転ヘラ切りを施すものと思われるが、その後のナデによるものか不鮮明である。稜椀に墨書きを施す類例は少なく貴重な例で、丈高な高台も他に類例を見ない。



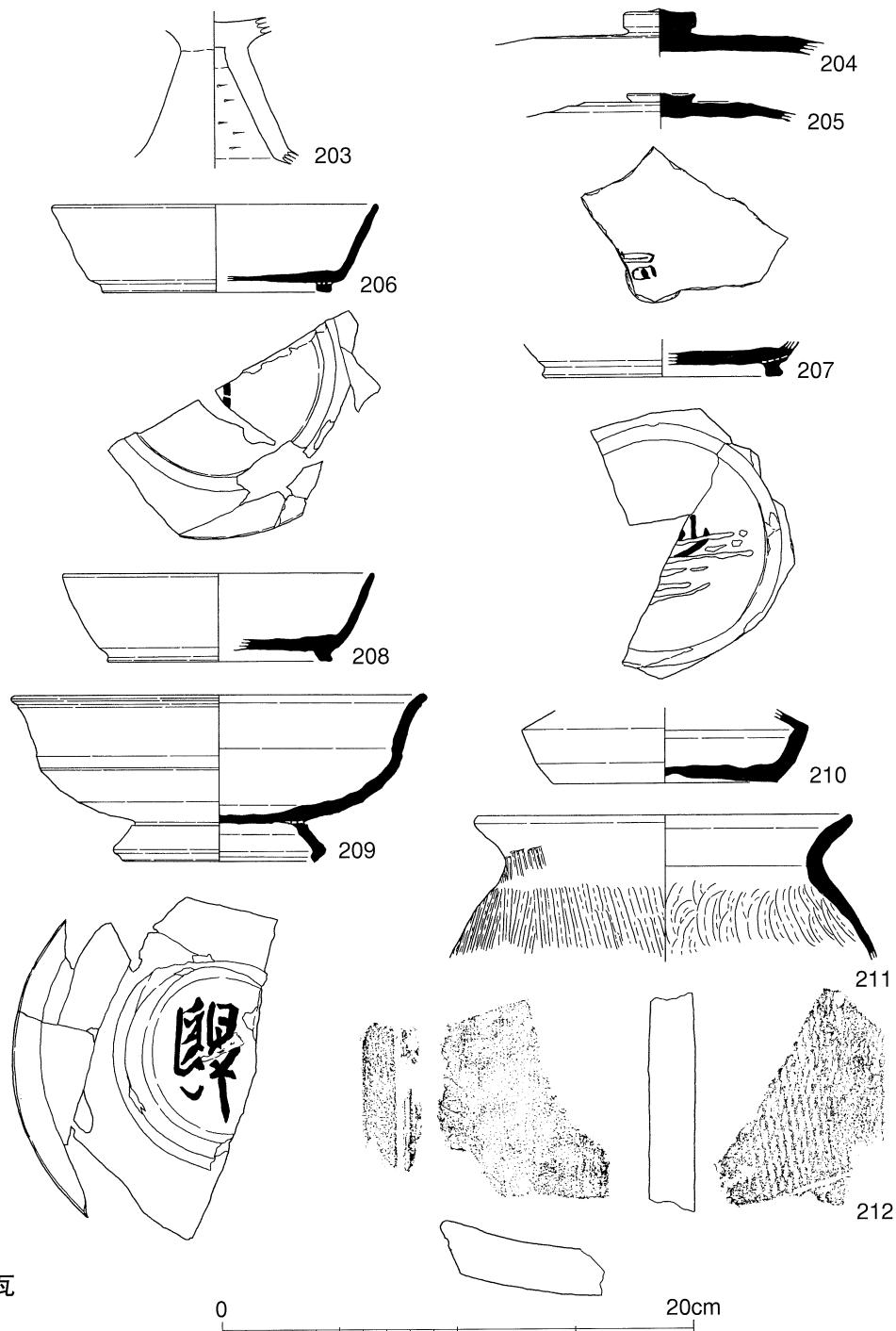


図58
SD08出土の土器・平瓦

0 20cm

表14 SD08出土の土器 観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	その他特徴
203	土師器	高坏	—	6.3		80	1mm前後のチャート・石英を多く含む	良好	淡褐灰色	
204	須恵器	坏B蓋	—	1.95		45	1mm前後の白・暗灰色砂粒を多く含む	良好	淡灰色	転用硯
205	須恵器	坏B蓋	—	1.3		33	0.5~1mmの白色砂粒を含む	良好	灰色	墨書
206	須恵器	坏B	13.9	3.75	9.8	50	1mm前後の白・暗灰色砂粒を含む	良好	黒灰色	墨書
207	須恵器	坏B	13.2	3.8	9.5	40	0.5mm前後の白・暗灰色砂粒を含む	良好	暗灰色	
208	須恵器	坏B	—	1.5	10.3	70	1mm前後の白・暗灰色の砂粒を含む	良好	灰色	墨書『少』
209	須恵器	稜椀	17.5	7.1	8.1	50	0.5mm前後の白・暗灰色砂粒を含む	良好	淡緑灰色	墨書『驛』
210	須恵器	平瓶	12.2	3.1	9.6	85	0.5mm前後の白・暗灰色砂粒を含む	良好	灰色	口縁部欠損
211	須恵器	甕	15.8	6.2		30	1mm前後のチャート・長石・石英を含む	良好	暗緑灰色	
212	平瓦		—	—		—	1mm前後のチャート・長石・石英を多く含む	硬質	淡黒灰色	

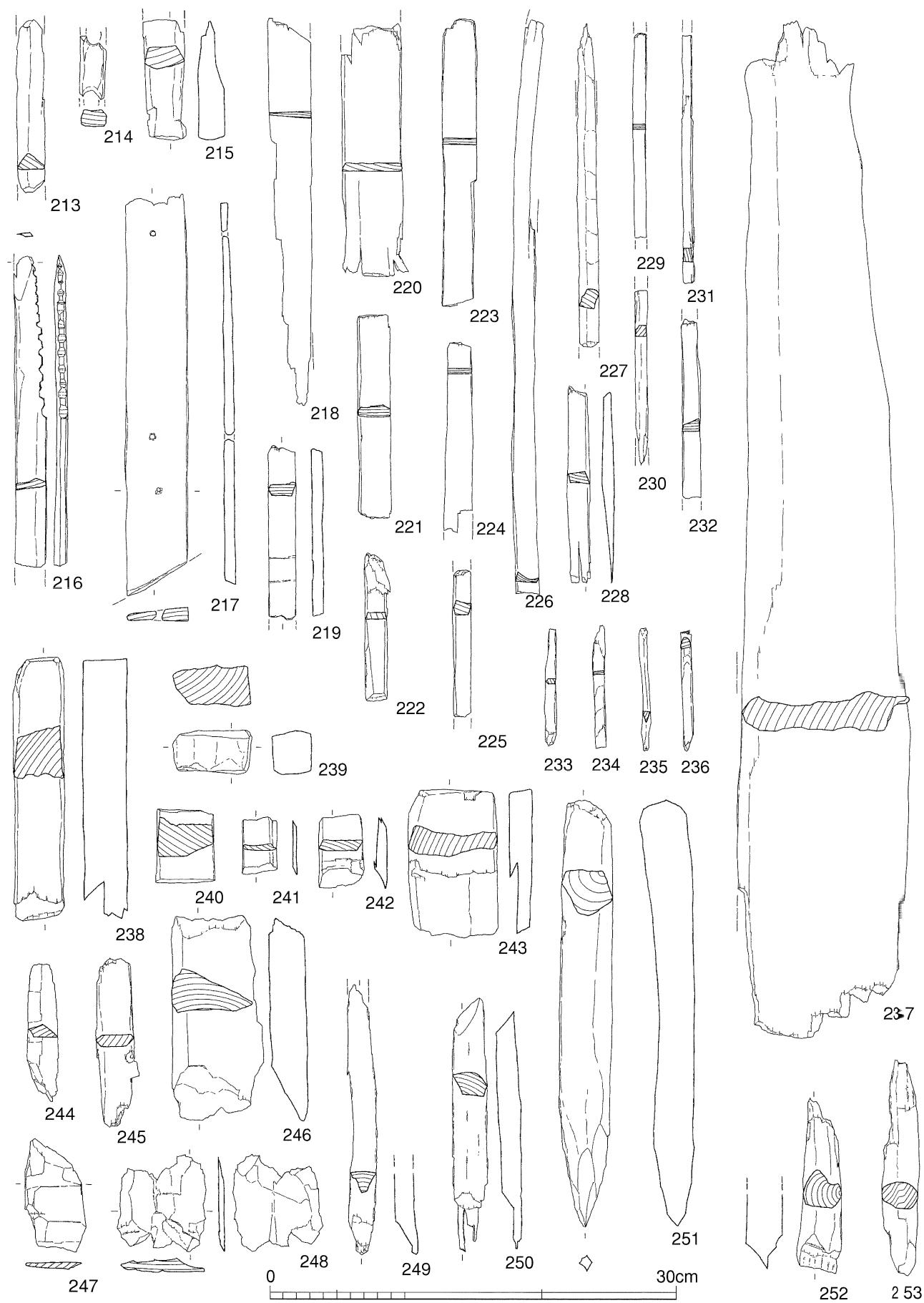


図59 SD08出土の木製品

表15 SD08出土木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
213	柄?	SD 08-②区	12.8	2.0	1.2	ヒノキ属		7111
214	有孔柄	SD 08-②区	4.5	1.8	1.2	アカガシ亜属		7112
215	丸柄	SD 08-②区	8.9	3.0	1.6	アカガシ亜属		7141
216	用途不明	SD 08-①・②区間	23.0	2.2	0.7	ヒノキ		7164
217	有孔板材	SD 08-②区部分	29.4	4.5	1.0	ヒノキ	板目	7154
218	加工片	SD 08-①・②区間	27.6	3.2	0.5	ツガ属		7166
219	角柄?	SD 08-③区	12.6	2.0	0.8	ヒノキ		7148
220	板材	SD 08-①・②区間	20.4	4.4	0.6	ヒノキ		7165
221	板材	SD 08-①区	15.0	2.4	0.8	ヒノキ		7162
222	加工片	SD 08-①区	10.9	1.8	0.5	ヒノキ	炭化	7139
223	板材	SD 08-②区	42.2	4.6	1.0	ヒノキ	板目	7110
224	加工片	SD 08-①区	14.1	2.0	0.4	モミ属		7138
225	加工片	SD 08-①区	10.8	1.3	1.1	ヒノキ		7103
226	割材	SD 08-②・③区間	42.4	1.8	0.6	ヒノキ		7167
227	割材	SD 08-②区	24.0	1.5	1.5	モミ属		7142
228	割角材	SD 08-①区	14.5	1.7	0.8	針葉樹	炭化	7137
229	角材	SD 08-②区	15.1	0.9	0.4	スギ		7143
230	割角材	SD 08-②・③区間	12.8	0.9	0.8	ヒノキ		7170
231	割角材	SD 08-②・③区間	21.6	0.8	1.0	ヒノキ		7171
232	加工片	SD 08-③区	13.3	1.4	0.9	ヒノキ属		7147
233	割材	SD 08-①区	17.2	1.1	1.0	ヒノキ		7107
234	割材	SD 08-①区	18.4	1.6	0.6	ヒノキ		7109
235	割材	SD 08-①区	18.2	1.0	1.6	ヒノキ		7108
236	割材	SD 08-②・③区間	8.8	0.8	0.8	ヒノキ	炭化	7173
237	板材	SD 08-①	75.4	12.3	3.0	ヒノキ		7292
238	加工片	SD 08-①区	19.3	3.6	3.9	スギ		7134
239	用途不明	SD 08-②・③区間	3.2	5.8	2.9	ヒノキ		7169
240	角材	SD 08-①区	5.4	4.4	2.9	ヒノキ属		7140
241	加工片	SD 08-①区	4.0	2.6	0.5	スギ		7106
242	加工片	SD 08-①区	5.2	3.3	0.9	スギ		7105
243	加工片	SD 08-①区	10.9	6.4	2.0	ヒノキ		7102
244	加工片	SD 08-②・③区間	10.1	2.2	0.9	ヒノキ		7172
245	割材	SD 08-②区部分	12.2	2.9	0.8	ヒノキ		7155
246	加工片	SD 08-③区	14.8	6.7	3.2	ヒノキ		7145
247	加工片	SD 08-①区	6.7	4.1	0.5	ヒノキ		7104
248	加工片	SD 08-①区	7.0	6.3	1.0	ヒノキ		7161
249	加工片	SD 08-①区	19.9	2.0	1.5	コウヤマキ		7135
250	加工片	SD 08-③区	17.1	2.5	1.7	ヒノキ属		7146
251	割杭	SD 08-③区	32.0	3.8	3.5	ヒノキ		7144
252	丸材	SD 08-②・③区間	12.4	3.2	2.7	ヒノキ	炭化	7168
253	丸杭	SD 08-①区	15.7	2.5	1.9	ヒノキ		7136

(212) は平瓦片で、凸面は縄叩き目、凹面は削りを施す。側面はヘラ削りを施す。

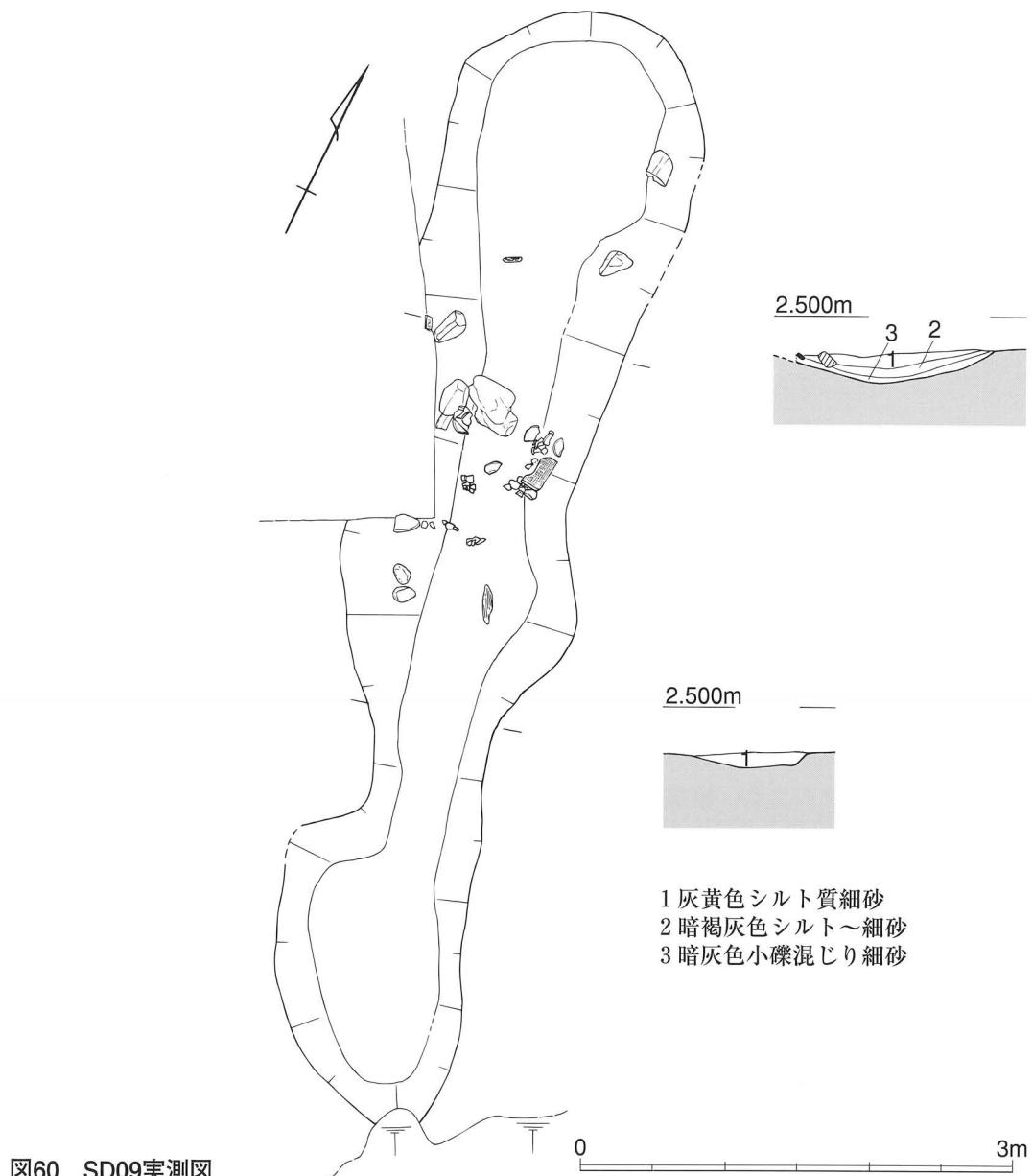
木製品や加工木も多く出土しているが、杭や柄材の他には明確な製品は含まれていない。むしろ割材や加工片などの製作過程の段階で生じたものが目立つ状況である。樹種はヒノキ・ヒノキ属が大半を占めるほか、スギやコウヤマキなどの針葉樹が用いられている。

SD09

5区南東で確認した溝状の遺構で、検出長 7.8m、最大幅 1.8m、最大の深さ 0.2mである。一部が搅乱や未調査部分にかかるが、ほぼ遺構の全容が窺える。主軸方向は、概ね N13°W であるが、南端部はやや西側に振っており、N25°Wを指向する。SD08と有機的な関係にあるものとも考えられたが、前述のように、両者には若干の時期差が考えられる。また、SB01・02と切り合い関係が認められ、SD09の方が新しい。

遺物は、土師器・須恵器・瓦がある。土師器には、皿A、皿B蓋、壺B蓋、椀A、甕がある。墨書土器は3点確認した。いずれも須恵器で、(261・262)は壺B蓋内面に一部が欠損するものの、「驛」の墨書が認められる。(261)はヘラ削りによるほぼ水平な天井部に宝珠つまみがつく。(262)もヘラ削りを施すがやや丸みをもった天井部をもち、つまみを欠く。(269)は壺Bの底部外面にやはり欠損するものの、「大ヶ垣」の文字が確認できた。

(272・273)は平瓦片で、いずれも凸面は縄叩き目、凹面は布目が認められ、側面は、狭端から広端へのヘラ削りを施す。(阿部)



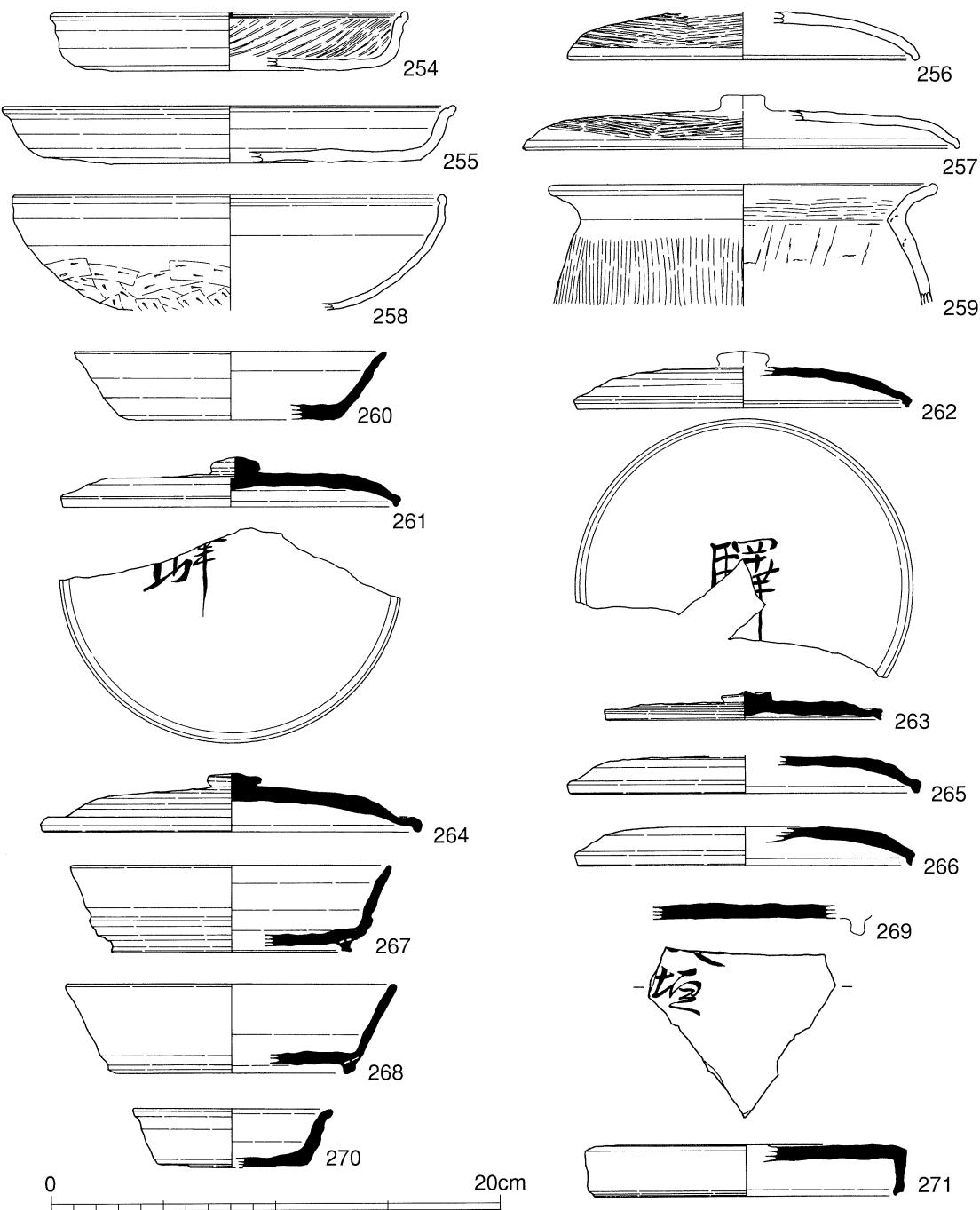


図61 SD09出土の土器

表16-1 SD09出土の土器 観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	その他特徴
254	土師器	ⅢA	15.8	2.6		33	1mmのクサリレキをわずかに含む	良好	淡乳褐色	内面暗文
255	土師器	Ⅲ.A	20.0	2.6		55	1mm前後のチャート・長石をわずかに含む	良好	暗乳色	
256	土師器	坏B蓋	17.5	2.2		55	1mmのチャート・クサリレキをわずかに含む	良好	乳色	つまみ欠損
257	土師器	ⅢB蓋	19.4	1.7		35	1mm前後のクサリレキをわずかに含む	良好	暗乳色	つまみ欠損
258	土師器	椀A	19.0	5.2		25	1mm前後のチャート・長石をわずかに含む	良好	暗乳色	
259	土師器	甕	17.1	5.5		27	2mmのチャートをわずかに含む	良好	淡乳褐色	
260	須恵器	坏A	13.8	3.1		25	1mm前後の灰・乳色砂粒を含む	良好	淡灰白色	
261	須恵器	坏B蓋	14.9	2.2		55	1mm前後の白・灰色砂粒を含む	やや良	淡乳灰色	墨書『驛』
262	須恵器	坏B蓋	14.8	1.8		65	1mmの白色砂粒をわずかに含む	やや良	淡乳灰色	墨書『驛』
263	須恵器	坏B蓋	12.3	1.3		75	0.5~1mmの白・灰色砂粒をわずかに含む	良好	灰色	

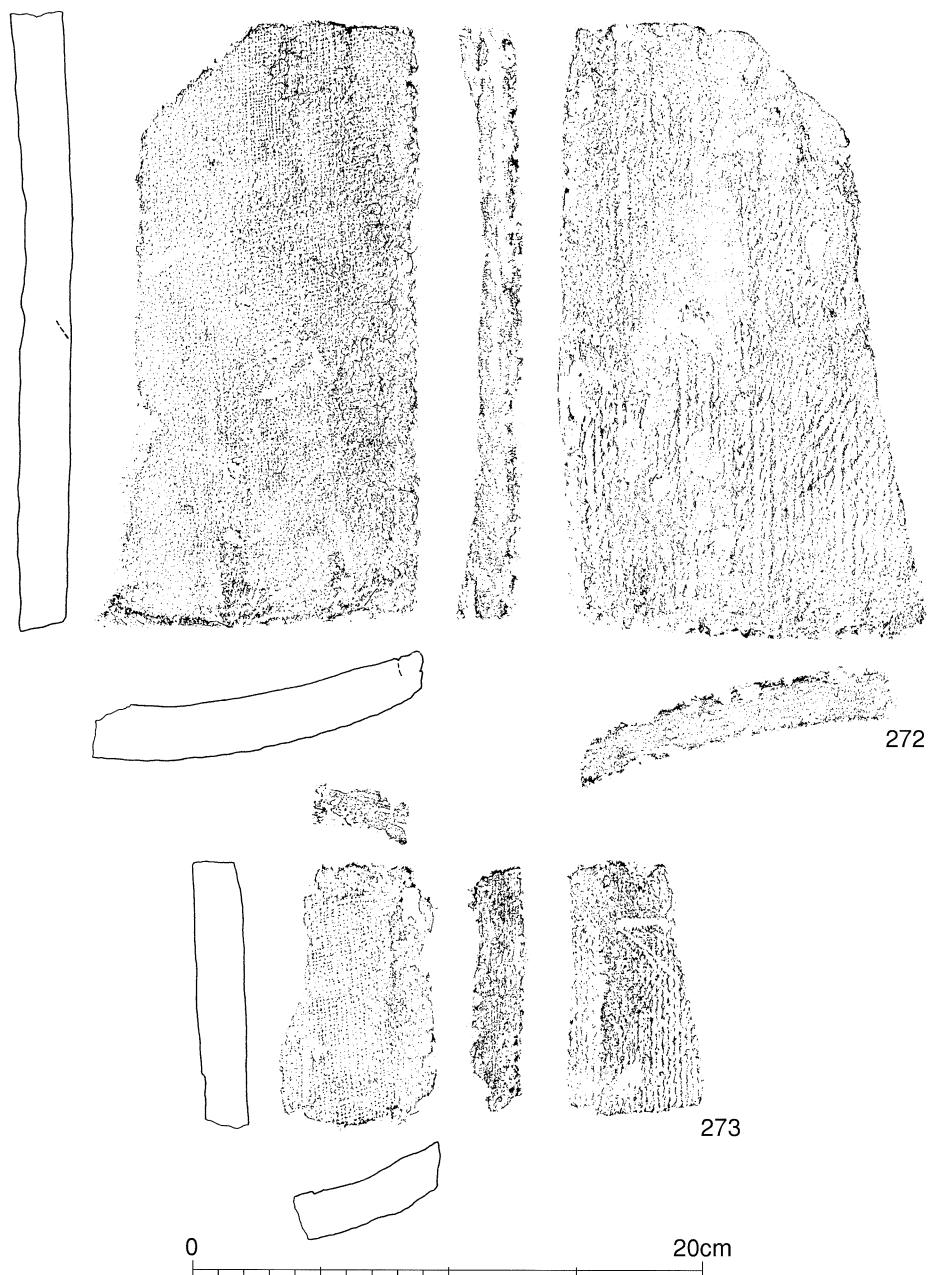


図62 SD09出土の平瓦

表16-2 SD09出土の土器 観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	その他特徴
264	須恵器	壺B蓋	16.7	2.7		55	1mm前後の白・灰色砂粒を含む	良好	淡乳灰色	
265	須恵器	壺B蓋	15.4	1.7		50	0.5mm前後の白・灰色砂粒を多く含む	良好	淡灰色	つまみ欠損
266	須恵器	壺B蓋	14.9	2.7		50	0.5mm前後の白・灰色砂粒を多く含む	良好	淡乳灰色	つまみ欠損
267	須恵器	壺B	14.2	3.9	10.6	33	1mm前後の白・灰・褐色砂粒を含む	良好	暗灰色	
268	須恵器	壺B	14.6	4.0	10.2	33	1~2mmの灰色砂粒を含む	やや良	淡乳灰色	
269	須恵器	壺B	—	—	—	—	0.5mm以下の微砂粒わずかに含む	良好	灰色	墨書「大垣」
270	須恵器	壺?	8.7	2.6		13	1~2mmの灰色砂粒を含む	良好	明灰色	
271	須恵器	壺A蓋	12.4	2.3		45	1mm前後の白・灰色砂粒を含む	良好	灰色	つまみ欠損
272	平瓦		—	—	—	—	1~8mmチャート・石英・長石・クサリレキ多く含む	軟質	乳橙色	
273	平瓦		—	—	—	—	0.5~5mmのチャート・石英・長石を多く含む	須恵質	乳灰色	

e) 土 坑

S X06

4区中央部で確認した大型の不整形の土坑で、東半は調査対象地区へ延びる。南北径4.72m、東西径3.30m以上で、最大深さ1.37mである。S D02およびS D03に切られている。最下層から出土した遺物には土師器甕が若干ある程度で、大半を占めるこの他の遺物は埋土の観察からも花崗岩礫とともに上半層に流れ込んだ状態で検出されている。土器群が流れ込んだ後は、徐々に埋没していったことが判る。

出土遺物には土師器壺A・壺B・壺B蓋・椀A・皿A・皿B・皿B蓋・甕、須恵器壺A・壺B・壺B蓋・皿A・壺A底部・壺A蓋・甕の器種がある。この他には製塙土器片や加工痕跡の不明瞭な緑色片岩の棒材などがある。これらの遺物の特徴から奈良時代後半には埋没したものと考えられる。

表17 SX06出土の土器 観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	その他特徴
277	土師器	壺	13.0	3.1		25	1~3mmのチャート・長石・石英・クサリレキ含む	良好	淡乳橙色	磨滅顯著
278	土師器	壺B蓋	12.8	2.5		50	0.5~1mm前後のチャート・石英を含む	良好	暗橙色	
279	土師器	壺B	12.5	2.7	8.3	80	1mm前後のチャート・石英・クサリレキ多く含む	良好	暗橙色	
280	土師器	椀A	16.5	5.0		33	1~2mmのチャート・石英・クサリレキを多く含む	良好	淡乳橙色	
281	土師器	皿A	18.4	2.4		33	1mm前後のクサリレキ含む	良好	明乳橙色	
282	土師器	皿A	18.6	2.9		33	1~3mmのチャート・クサリレキ含む	良好	淡赤橙色	
283	土師器	皿A	17.3	2.0		25	1mmのチャート・長石・1~5mmのクサリレキ含む	良好	明乳色	
284	土師器	皿A	16.6	2.0		13	1~3mmのチャート・クサリレキ含む	良好	明乳色	
285	土師器	皿A	17.7	2.6		33	1~3mmのクサリレキ多く含む	良好	暗乳橙色	
286	土師器	皿A	17.3	2.2		55	1mm前後のクサリレキ含む	やや良	暗橙色	
287	土師器	皿A	18.5	2.2		40	0.5~1mmのチャートをわずかに含む	良好	暗橙褐色	
288	土師器	皿A	14.9	2.1		80	0.5~5mmのクサリレキを多く含む	良好	明乳色	
289	土師器	皿A	15.0	2.2		14	2mmのチャート・1~2mmのクサリレキ含む	良好	淡乳橙色	
290	土師器	皿A	15.9	2.8		40	0.5~1mmのチャート・長石・クサリレキを含む	良好	橙色	
291	土師器	皿A	15.0	2.7		25	1mm前後のチャート・クサリレキ含む	良好	暗赤橙色	
292	土師器	皿A	15.0	2.5		40	0.5~1mmのチャートをわずかに含む	良好	暗褐色	
293	土師器	皿B蓋	20.0	2.0		25	1mm前後のチャート・石英・クサリレキ含む	良好	暗橙色	
294	土師器	皿B	—	2.9	12.0	12	0.5~1mmのチャート・長石・クサリレキを含む	良好	明乳橙色	端部欠損
295	土師器	甕	14.6	12.8		25	1~2mmのチャート・長石・石英・クサリレキ含む	良好	淡乳橙色	
296	土師器	甕	22.6	15.0		15	1~2mmのチャート・長石・石英・クサリレキ含む	良好	暗乳褐色	スヌ付着
297	土師器	甕	28.8	8.6		13	1mm前後のチャート・長石・石英・クサリレキ含む	良好	明乳色	
298	製塙土器	—	—				1~3mmのチャート・長石・石英・クサリレキ含む	良好	淡乳橙色	
299	須恵器	壺A	14.9	4.8		50	1mm前後の砂粒多く含む	やや良	淡乳灰色	
300	須恵器	壺B蓋	16.5	2.8		50	1~2mmの乳色砂粒を含む	良好	灰色	
301	須恵器	壺B蓋	18.5	1.3		33	1~2mmの白色砂粒を含む	やや良	淡緑灰色	
302	須恵器	壺B蓋	17.2	1.8		20	1mm前後の砂粒わずかに含む	良好	暗褐灰色	
303	須恵器	皿A	14.0	1.8		25	0.5~1mm前後の砂粒多く含む	良好	暗緑灰色	
304	須恵器	壺A蓋	14.4	2.3		67	0.5~1mmの白色砂粒含む	良好	暗灰色	
305	須恵器	壺	—	7.1	9.5	33	1mm前後の砂粒多く含む	良好	灰色	底部のみ
306	須恵器	甕	19.2	10.8		60	1~2mmの白・乳・褐色砂粒をわずかに含む	良好	灰色	車輪文印き
307	須恵器	甕	20.2	11.2		50	1~2mmの砂粒を含む	良好	明灰色	



図63 SX06実測図

- | | |
|---------------------------------|------------------------------|
| 1 淡乳灰色シルト混細砂～中砂 | 2 暗乳灰色シルト混極細砂～細砂 |
| 3 淡乳黃灰色シルト混細砂～中砂 (指頭大の焼土塊含む) | 4 暗褐色シルト質極細砂～細砂 |
| 5 淡乳灰色シルト混極細砂～細砂 | 6 暗乳灰褐色シルト混細砂 |
| 7 淡褐色シルト質極細砂～細砂 | 8 淡灰白色シルト混極細砂 |
| 9 淡黒灰色シルト混極細砂～細砂 (5～30mm大の炭多量) | 10 乳褐色シルト質細砂～中砂 (炭の微粒含む) |
| 11 暗乳褐色細砂混シルト | 12 淡乳色シルト混細砂 |
| 13 淡灰色シルト混極細砂～細砂 (3～5mm大の炭多く含む) | 14 淡黒灰色シルト質細砂～中砂 (5mm前後の炭多し) |
| 15 暗灰色シルト質極細砂～細砂 (3～5mm大の炭含む) | A 淡乳灰色シルト質極細砂～細砂 (SD 02埋土) |

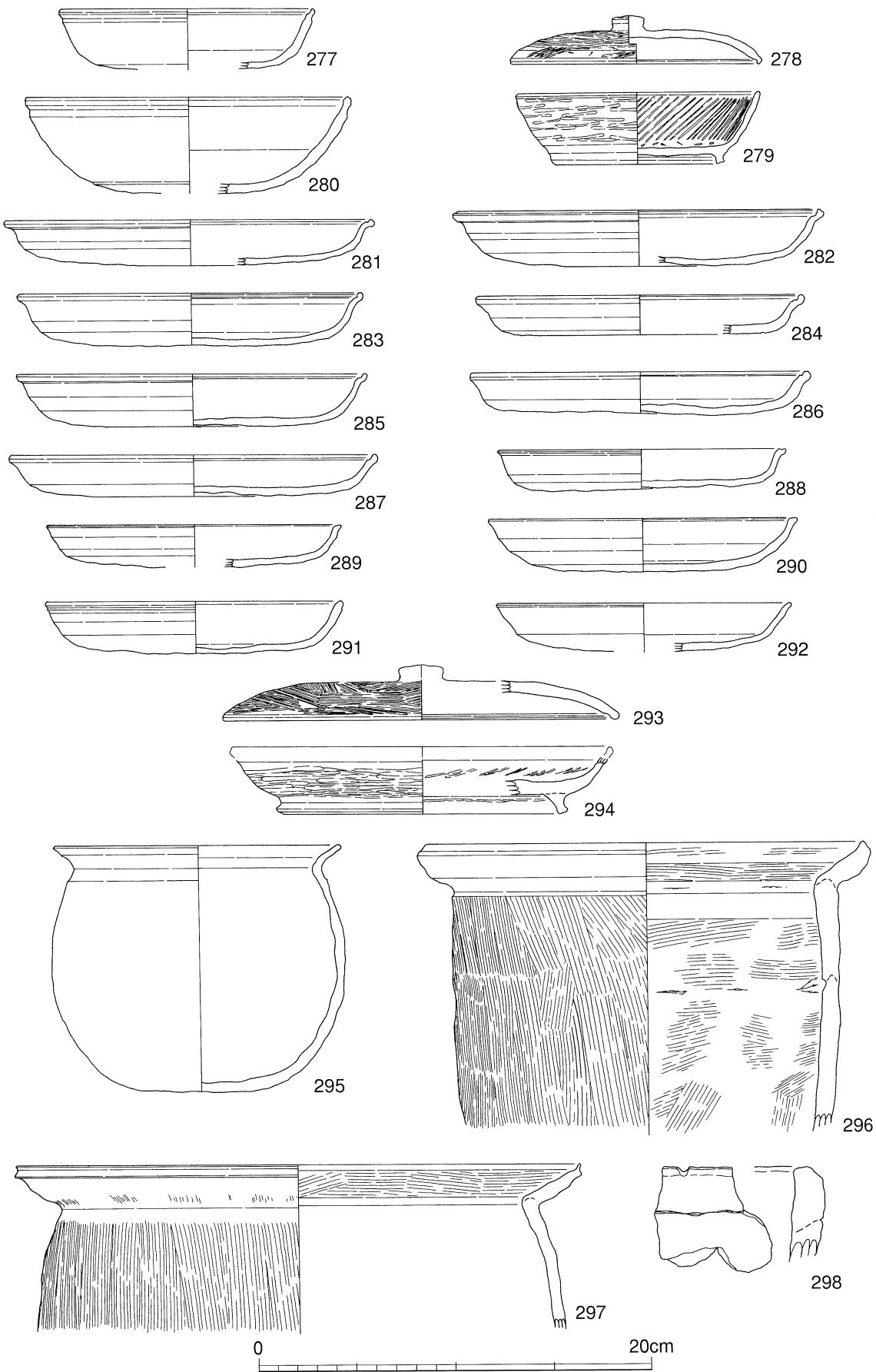


図64 SX06出土の土器（1）

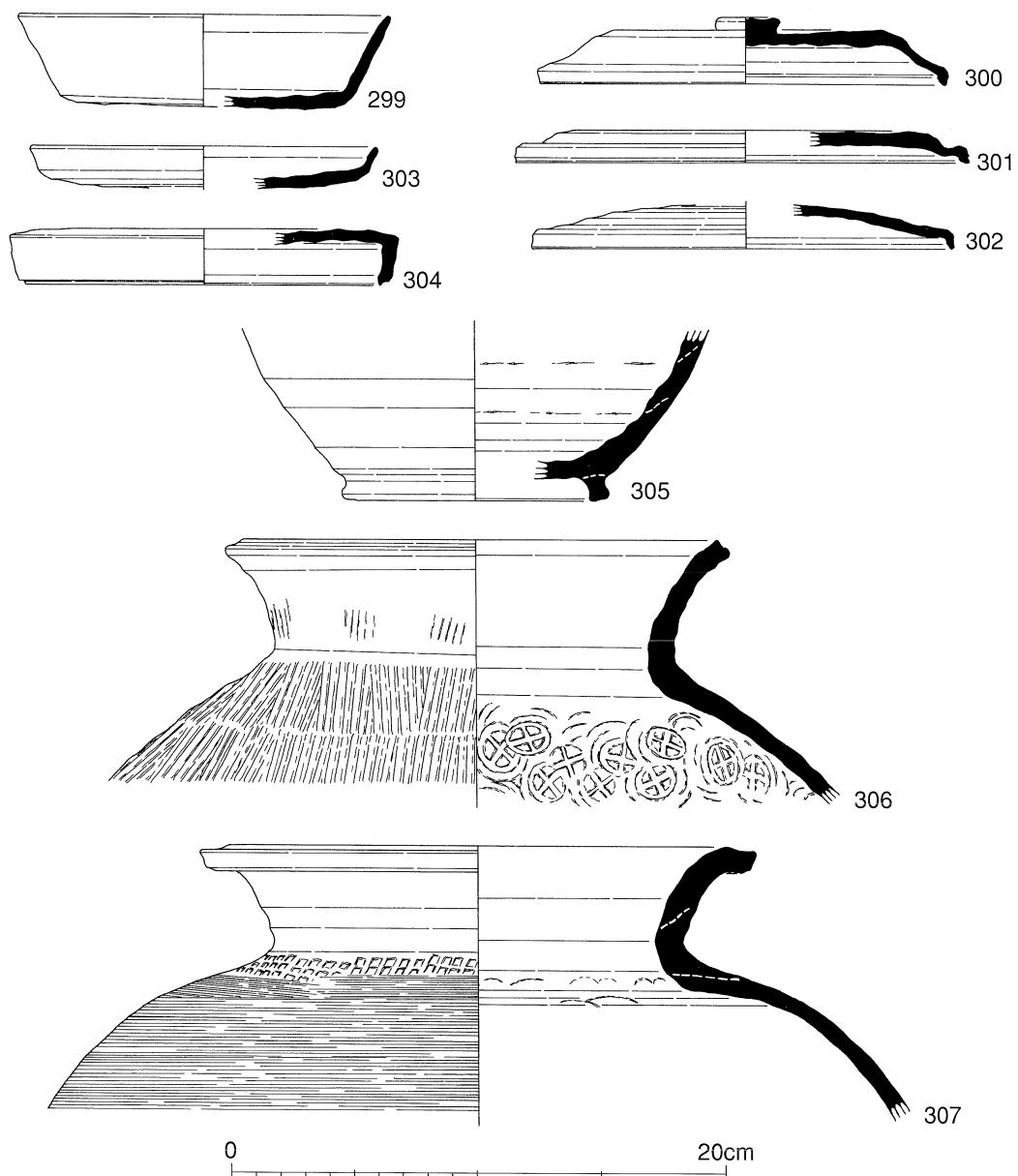
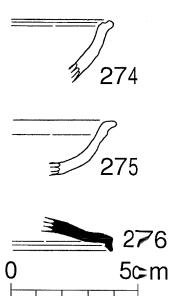


図65 SX06出土の土器（2）

S X04 2区北西隅で、S R01の西肩上端に接して確認した不整形の落ち込みである。東西2.16m、南北0.96m以上、最大深さ0.18mで、北半部が調査区外に延びる。坑底にはやや凹凸が認められ、直径25cm、深さ8cmのピット1基があるほか、西側が一段深く掘り込まれている。

埋土は暗灰褐色シルト質細砂で、土師器・須恵器の小片が出土している。土師器皿Aの口縁部（275）の特徴からみて、奈良時代後半のものと考えられる。

S X05 S X04と同様に、S R01の西肩上端に接して確認した隅円方形の落ち込みである。南北長2.02m、東西長0.74m、深さ0.16mの掘形に、最大長1.36m、高さ0.47mの花崗岩礫が据えられている。埋土は直径5mmの炭粒を含む暗灰褐色シルト質細砂で、土師器・須恵器の小片がわずかに出土している。（山本）

図66 SX04
出土の土器

S X07

5区北西隅に位置し、S D 05に一部を切られている。長径1.71m、短径1.00m、深さ0.13mの不整楕円形の土坑である。埋土の暗灰色シルト質細砂からは木製品が出土している。

(308) は最大長13cm、幅1.6cm、厚さ 1.6cmの棒状木製品で、ヒノキ材と同定されている。農工具の柄と考えられる。(309) もアカガシ亜属と同定された柄と考えられ、最大長 7.4cm、最大幅 2.8cm、厚さ 1.8cm、(310) は最大長9.3cm、直径2.3cm。

S X08~12

4区西部で確認したほぼ座標北方向に並ぶ不整形な土坑群である。いずれも幅 1.5m前後で、深さ0.05~0.10m前後の規模である。長さは調査区外に延びているものもあるが、2.5~4.5mである。これらの埋土は暗灰茶色シルト質細砂を主体として、ほぼ同様の土質であり、レンズ状の堆積をみせている。これらの特徴から、S X09以外は一連の遺構と考えている。なお、S X09はやや方向性が異なり、S A01-P 1を切っていることから、これらよりも新しい遺構と考えられる。

遺物はいずれも小片で、土師器・須恵器などが出土している。

(312) はS X08から出土した須恵器壺Bで、底径 9.2cm、残存高 2.4cmである。高台は体部と底部の境界からやや内寄りに貼り付けられ、わずかに外方に踏ん張った形態である。

(313) はS X10から出土した須恵器壺B蓋で、残存高1.7cmである。わずかに丸みをもつ天井部から屈曲して延びる口縁部をもつ。(314) もS X10から出土した須恵器壺Bで、底径8.8cm、残存高2.3cmである。高台は水平で低く、底部外端部に貼り付けられている。

(315) はS X12から出土した須恵器壺Bで、底径10.8cm、残存高 1.9cmである。高台は低く、やや外方にやや踏ん張っている。(316) もS X12から出土した須恵器壺Bで、高台は水平で低く、接地部分では外方に広がる。

以上の出土遺物から、8世紀前半～中頃のものと考えている。(中谷)

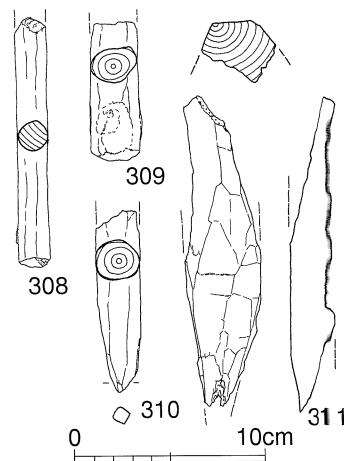


図67 SX07出土の木製品

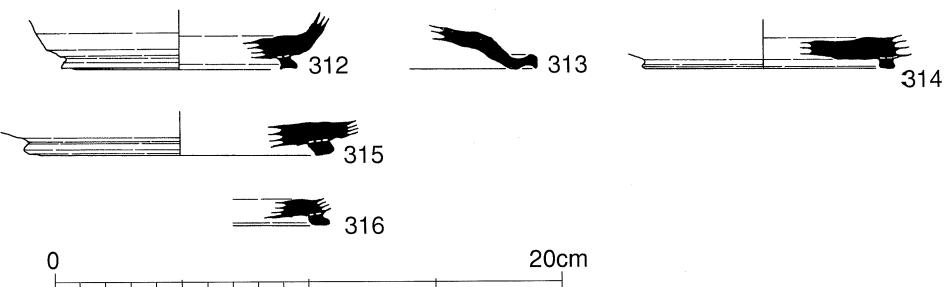


図68
SX08~12出土の土器

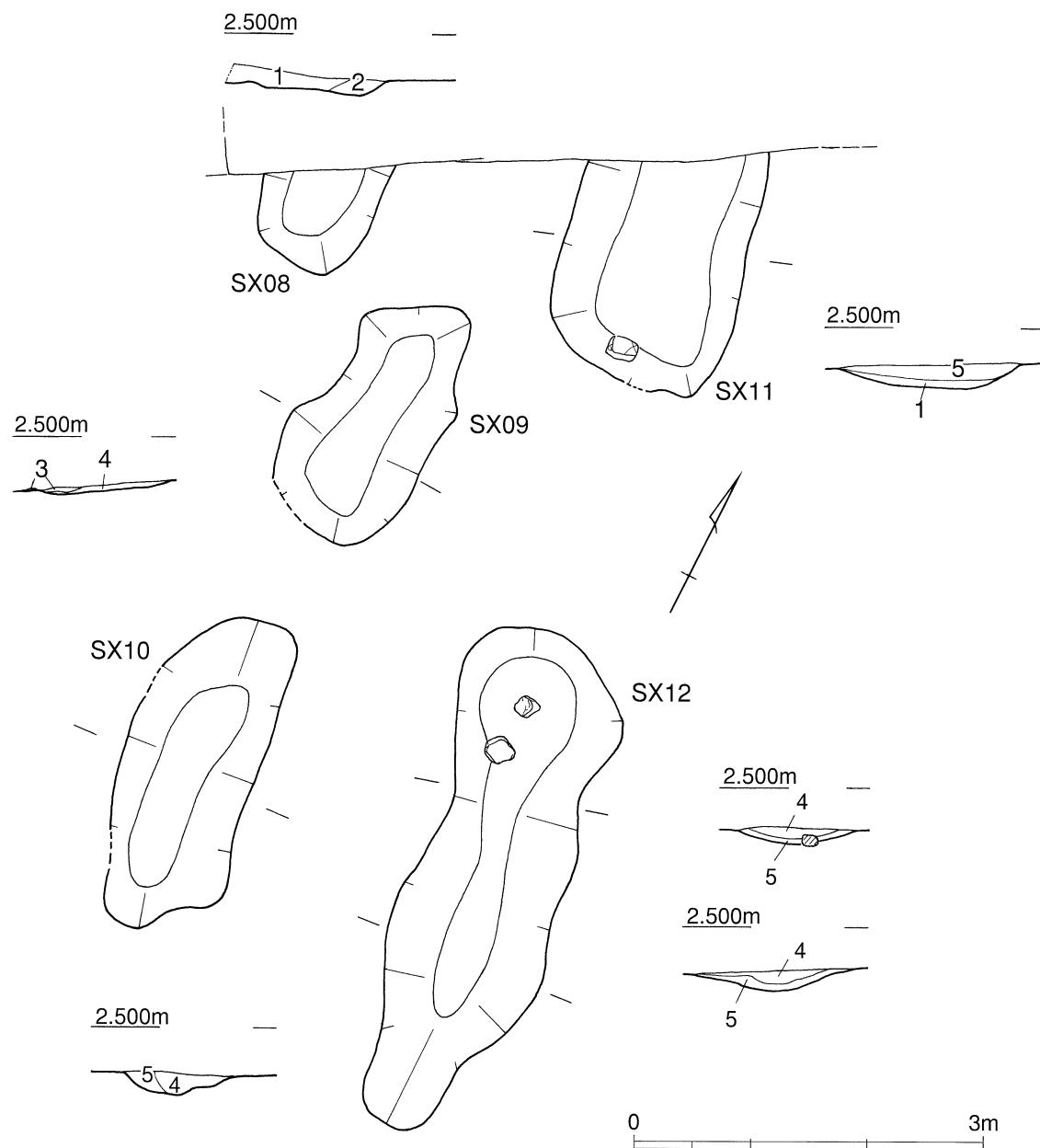


図69 SX08～12実測図

- | | | |
|----------------|--------------|----------|
| 1 暗灰色シルト質細砂 | 2 淡黄灰色極細砂～細砂 | 3 黒灰色シルト |
| 4 暗灰茶色粗砂混じりシルト | 5 暗灰茶色シルト質細砂 | |

f) 流路

SR01

調査区東半全域に広がる流路で、東肩は全く確認できていない。上述したように、

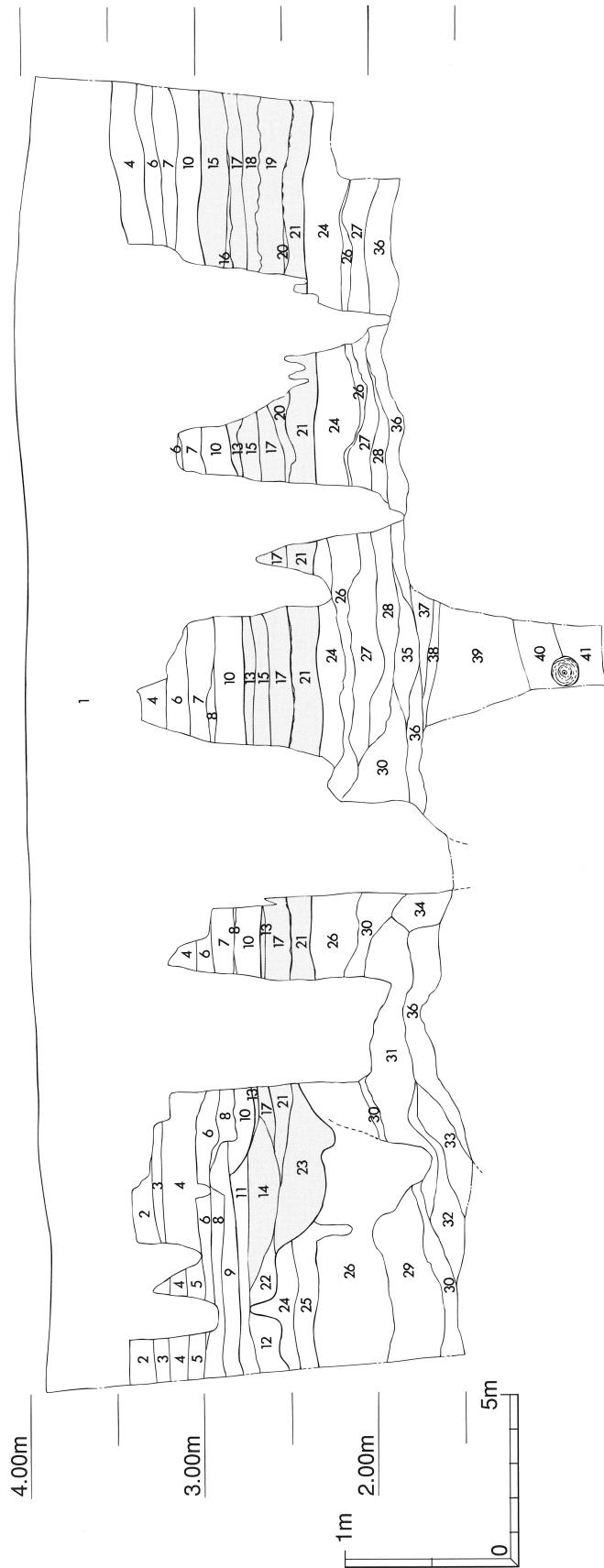


図70 2区 北壁土層断面図 (SR01横断面)

- 1 盛土・擾乱
- 2 暗灰褐色シルト質細砂(耕土)
- 3 淡黄灰色シルト質細砂
- 4 明赤黄色細砂
- 5 淡青灰色シルト混じり極細砂～細砂
- 6 淡青灰色シルト質極細砂
- 7 暗褐灰色細砂質シルト
- 8 淡乳灰褐色細砂質シルト
- 9 暗乳灰褐色細砂
- 10 暗褐灰色細砂質シルト(SX04埋土)
- 11 淡褐灰色シルト質細砂～中砂
- 12 暗褐灰色シルト質細砂～細礫
- 13 淡青灰色シルト混じり極細砂
- 14 乳褐色シルト質細砂～中砂
- 15 淡黄灰色細砂～細礫
- 16 淡青灰色シルト混じり極細砂
- 17 暗褐灰色シルト混じり細砂
- 18 淡黄灰色細砂質シルト(木製品)
- 19 淡灰褐色細砂質シルト5mm以上の炭粒を多く含む
- 20 淡青灰色極細砂
- 21 暗灰褐色細砂混じり細砂～中砂
- 22 黒灰色細砂質シルト質極細砂(土壤化)
- 23 暗灰色シルト質細砂
- 24 暗灰褐色シルト混じり細砂～中砂
- 25 暗褐灰色極細砂質シルト
- 26 暗灰色極細砂質シルト
- 27 乳白色極細砂～中砂
- 28 黑灰色極細砂質シルト
- 29 灰白色極細砂～粗砂
- 30 黑色極細砂質シルト
- 31 明乳白色シルト質細砂～中砂
- 32 淡黑色シルト質細砂～細礫
- 33 淡灰褐色細砂～中砂
- 34 淡乳灰色シルト混じり細砂～細礫
- 35 淡灰褐色細砂質シルト
- 36 黑色細砂質シルト
- 37 淡乳灰色細砂混じりシルト(植物遺体多し)
- 38 淡黑灰色極細砂質シルト
- 39 淡青灰色細砂～細砂
- 40 淡灰色極細砂混じりシルト(植物遺体多し)
- 41 淡灰色極細砂混じりシルト(植物遺体多し)

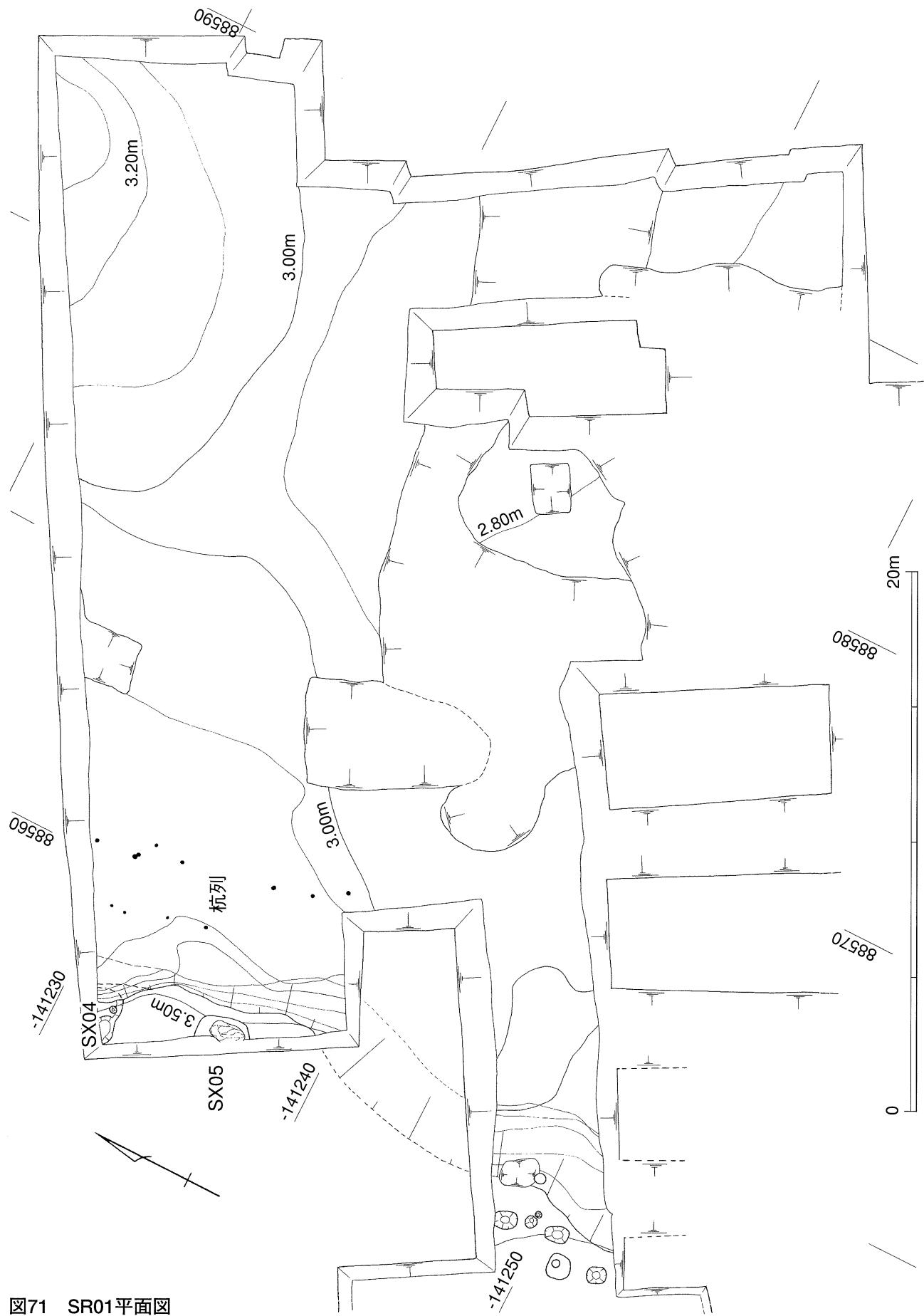


図71 SR01平面図

S P 44を切って流れていることから、奈良時代後半には流下し始め、平安時代中期までには埋没していたものと考えられる。

西肩にはほぼ平行して14本の杭材で構成された2列の杭列が確認できている。杭1～杭5・杭10～杭12はほぼ直線状に位置し、杭5～杭10間を除いては約1.4～1.6mの一定の間隔で杭が並んでおり、護岸に供されたと考えられるが、横木は全く確認されておらず、その構造は明確にはできない。また、杭6～杭9・杭13も0.3～1.4m間隔でほぼ直線上に位置しているが、杭材の細いものがそのほとんどである。杭材には先を尖らせたものと、あたかも柱材を転用したかのような底面が平坦なものやホゾ穴の開けられた材も含まれているものの、本来の形状の窺えるものはない。

さて、S R 01の埋土は図70に示すとおりで、暗褐灰色系の細砂質シルトあるいはシ



図72 SR01西岸の杭列実測図

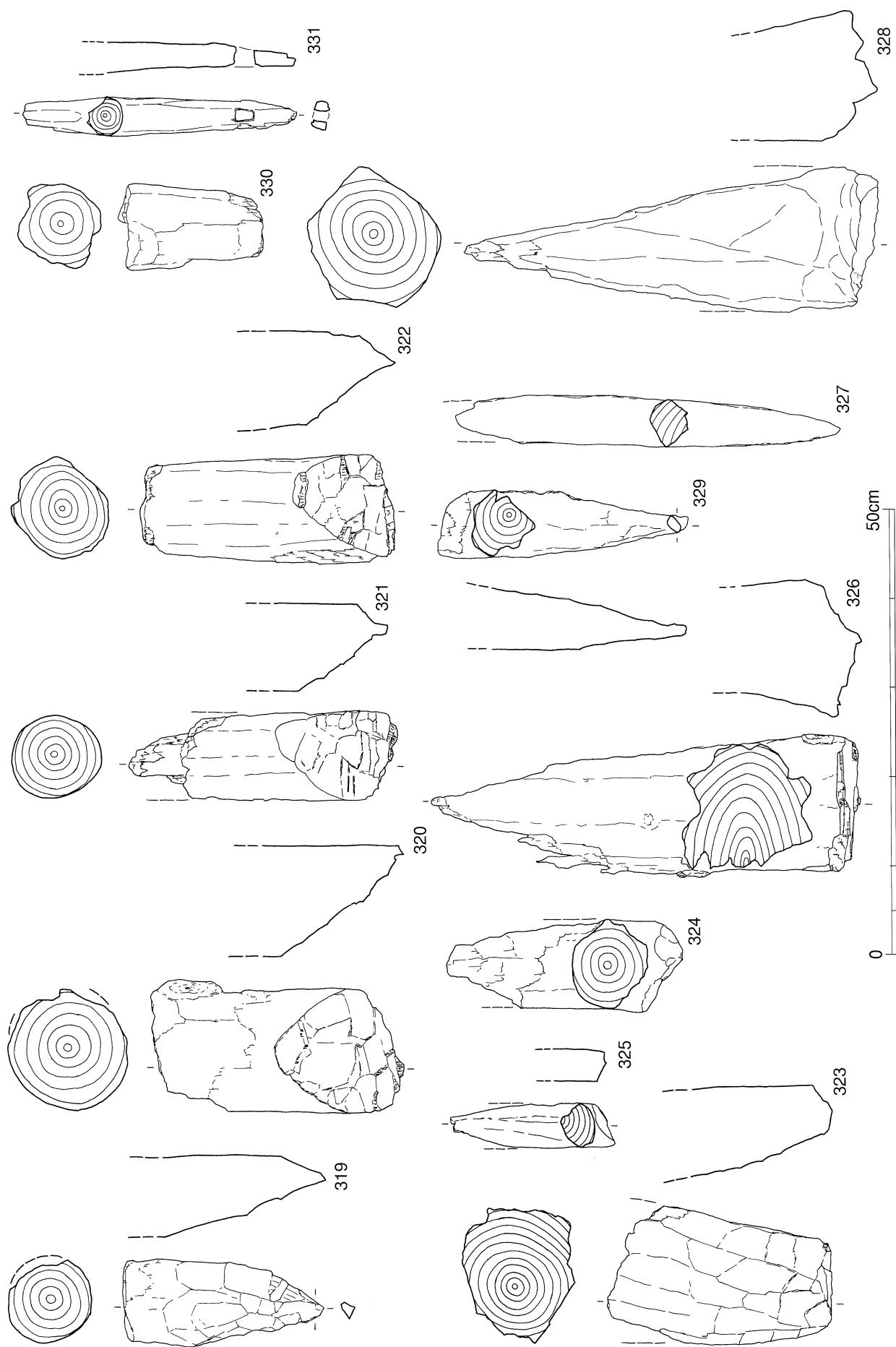


図73 SR01西岸の杭材

表18 SR01西岸の杭材の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
319	丸杭	SR 01－杭①	20.3	9.6	9.1	マツ属複維管束亜属		6965
320	丸杭	SR 01－杭②	27.4	13.8	12.9	マツ属複維管束亜属		6966
321	丸杭	SR 01－杭③	28.7	10.0	9.8	マツ属複維管束亜属		6967
322	丸杭	SR 01－杭④	28.4	12.2	10.8	アカマツ		6968
323	割材	SR 01－杭⑤	25.3	14.8	9.8	ヒサカキ		6969
—	サンプル	SR 01－杭⑥	—	—	—	ヤマモモ	—	—
324	丸杭	SR 01－杭⑦	23.6	10.2	8.4	ハリギリ		6976
325	丸杭	SR 01－杭⑧	18.2	4.9	3.8	タイミンタチバナ		6975
—	サンプル	SR 01－杭⑨	—	—	—	ヤブツバキ	—	—
326	丸杭	SR 01－杭⑩	48.1	15.0	14.8	ヒノキ		6971
327	割材	SR 01－杭⑪	43.2	5.4	4.0	ヒノキ		6972
328	丸杭	SR 01－杭⑫	46.0	15.4	14.9	ヒノキ		6974
329	丸杭	SR 01－杭⑬	27.4	7.6	6.4	ヤマモモ		6970
330	丸杭	SR 01－杭⑭	16.0	9.7	7.0	サカキ		6977
331	丸杭	SR 01－杭⑮	29.0	4.4	3.7	シイ属	ほぞ穴有	6973

ルト混じり細砂を主体として埋没しており、極細砂あるいは細砂の薄層と互層を成している。遺物の出土量についての偏りはなく、ほぼ全域で満遍なく出土している。これらの多量に検出できた遺物群は西側に立地する掘立柱建物を含む遺構群からのものも含んでいるとは考えられるものの、むしろ上流から運ばれてきたものがその大半を占めていると考えている。

以上のように、この流路は後世に「東川用水」⁽²⁾と呼ばれた水路筋とほぼ同一コースを探る流路と想定でき、海岸線にも近づいている今回の調査地点辺りからは川幅も徐々に広がり、流れも緩やかになっていたものと推定できる。

出土遺物 出土遺物には土師器・黒色土器・須恵器・施釉陶器・漁網錘・瓦（軒瓦を含む）・木製品（木簡を含む）・石製品・鉄製品があり、多量かつ多岐にわたる。土器類の法量は観察表（表19）に示したとおりである。

土師器 土師器には壺A・椀A・皿A・高壺・甕・鉢・飯蛸壺などがある。

（336）は精良に仕上げられた椀Aで、底部外面に不整方向ヘラ削り、口縁部外面にヘラ磨きが施される。

高壺（337～339）は口縁部の形態が不明。脚部の長脚化が顕著で、脚柱部外面はヘラ削りによる明確な面取りが施され、内面は絞り痕が確認できる程度である。

甕では全形の窺えるものは少ない。いずれも口縁部を「く」字形に外反するもので、口縁端部に明確な面をもつものが多い。体部は下膨れの丸胴に近いもの（345）と長胴と考えられるものが混在している。外面は概して縦刷毛調整、内面は刷毛・板ナデ・ナデ調整などさまざまである。

（349）は黒色土器A類の高台をもたない椀で、内面見込みは一定方向ヘラ磨き、体部内面は横方向ヘラ磨き調整で、口縁部はヨコナデである。体部外面は指頭圧痕を含むナデである。（350）も黒色土器A類の椀で、やや外方に踏ん張る丸みをもった高台を有する。

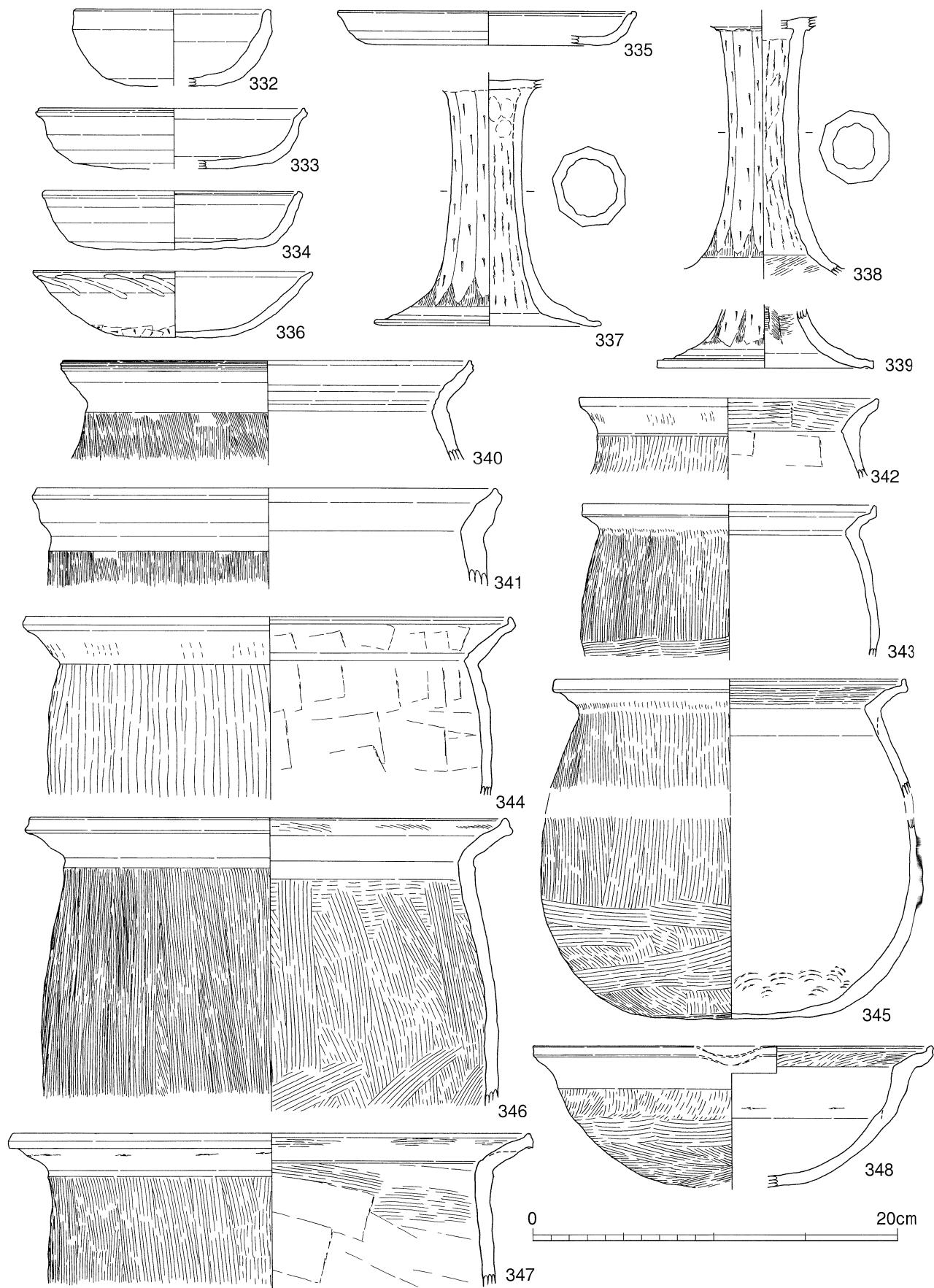


図74 SR01出土の土器 (1)

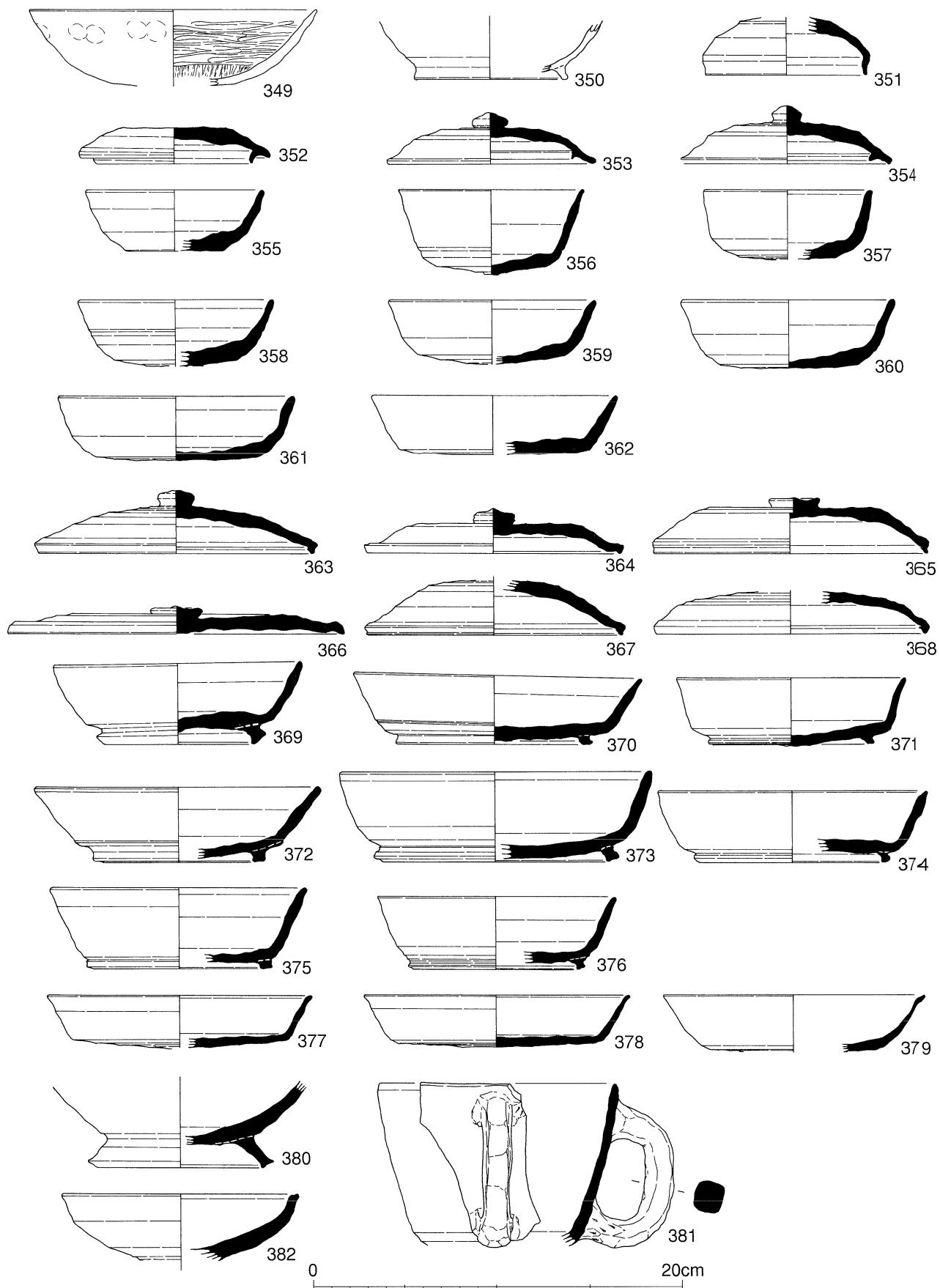


図75 SR01出土の土器 (2)

須恵器

須恵器では、坏G・坏G蓋・坏A・坏B・坏B蓋・皿A・椀・無蓋高坏・圈脚円面硯・壺A・壺A蓋・横瓶・平瓶・鉄鉢・甕・飯蛸壺などがある。

(352) は坏G蓋としているが、つまみのないもので、坏身かもしれない。天井部外表面はヘラ切り未調整で、深黄緑色の自然釉をかぶる。(382) は底部を欠損する把手付椀の破片で、断面隅円方形の把手が全体にやや垂下気味に貼り付けられる。内外面ともに深緑色～乳黄色の自然釉をかぶる。

(383～408) は墨書土器で、(394・395・396・403) に「驛」の文字の一部が判読できる。この他には (386) の「大カ西」や (391) の「東」などが判読できる。

(409) は圈脚円面硯で、脚端部は欠損しているが、脚部に「十」字形のスカシと長方形スカシが交互に配されるものとして復元できる。

(427～430) は硬質の綠釉陶器で、いずれも小片である。 (431) は灰釉陶器の皿の口縁部である。

以上のように、供膳形態の坏を中心とする器種の特徴からみて、7世紀後半代に始まり、奈良時代前半～後半を中心とし、平安時代前期の資料までを含んでいると考えられる。

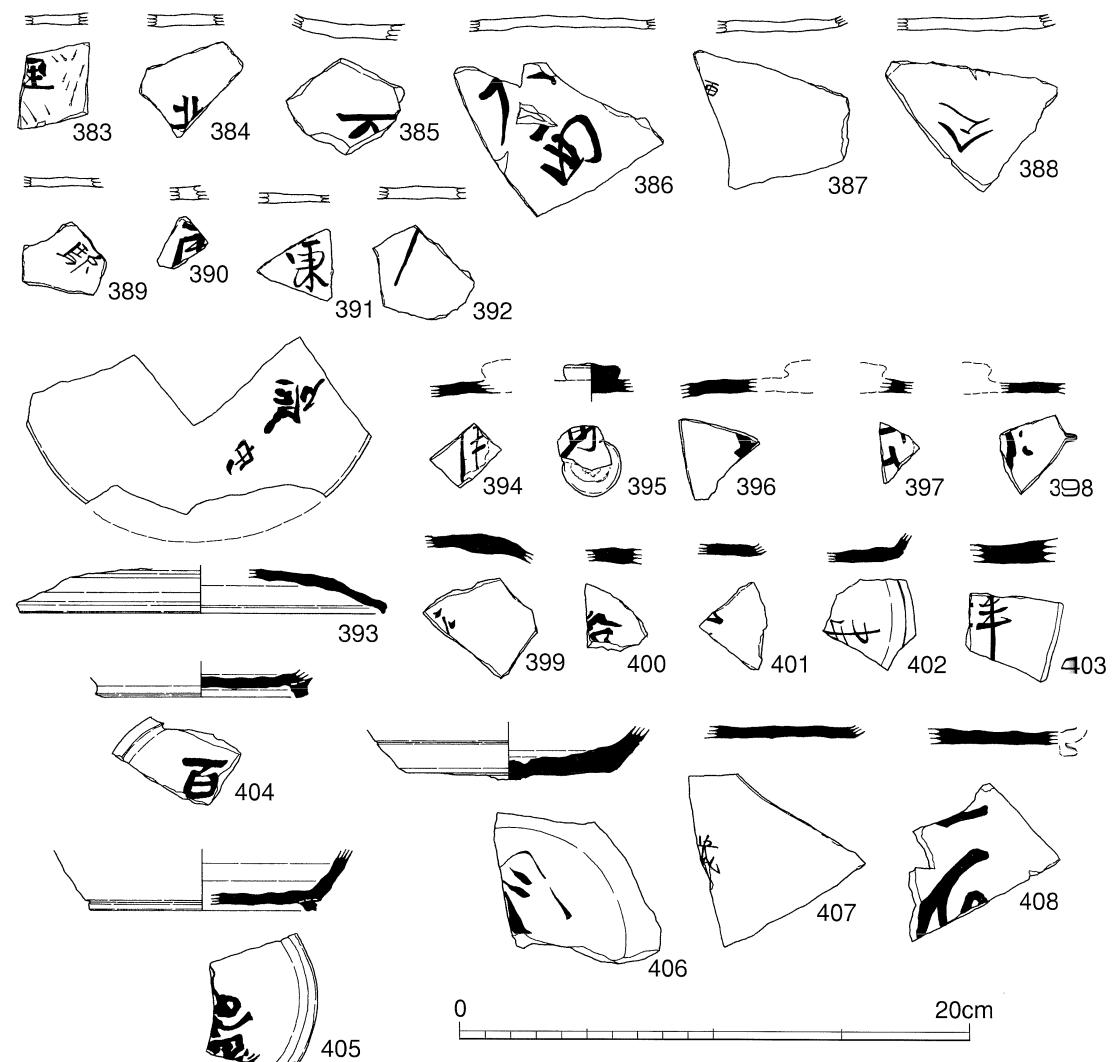


図76 SR01出土の土器 (3)

表19-1 SR01出土の土器 観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	その他特徴
332	土師器	壺	10.4	4.2		45	1mm前後のチャート・長石・石英・クサリレキ含む	良好	暗乳褐色	
333	土師器	壺A	14.2	3.3		17	0.5~1mmのチャート・石英・長石・クサリレキを含む	良好	淡乳色	
334	土師器	壺A	13.7	3.2		67	1mm前後のチャート・石英を含む	良好	乳色	
335	土師器	椀A	15.0	3.6		33	1mmのチャート・石英わずか、クサリレキ多く含む	良好	乳色	
336	土師器	皿A	16.0	1.8		17	0.5~1mmのチャート・長石を含む	良好	暗褐色	
337	土師器	高壺	—	13.4	11.3	85	1~2mmのチャート・クサリレキ含む	良好	暗乳橙色	
338	土師器	高壺	—	13.1	—	60	0.5~1mmのチャート・石英・クサリレキを含む	良好	淡乳色	
339	土師器	高壺	—	3.3	11.8	25	1mm前後のチャート・長石を含む	良好	暗乳色	
340	土師器	甕	21.8	5.4		25	微砂粒をわずかに含む	良好	暗乳褐色	
341	土師器	甕	24.4	5.3		33	1~2mmのチャート・長石を多く含む	良好	乳褐色	
342	土師器	甕	16.2	4.3		20	1mm前後のチャート・石英を含む	良好	明乳色	
343	土師器	甕	15.9	8.3		25	1~2mmのチャート・クサリレキ含む	良好	暗乳褐色	
344	土師器	甕	26.9	9.7		13	1~2mmの石英・チャート・クサリレキを多く含む	良好	明乳橙色	
345	土師器	甕	19.0	18.6		33	1~2mmの石英・チャート・クサリレキを多く含む	良好	淡乳赤橙色	
346	土師器	甕	25.4	15.7		33	1~2mmのチャートを多く含む	良好	暗乳褐色	
347	土師器	甕	27.7	8.3		25	0.5~1mmのチャート・長石・石英を多く含む	良好	暗乳色	
348	土師器	鍋	22.6	9.7		67	2mm石英・チャート・長石, 5mmクサリレキを多く含む	良好	明乳色	
349	黒色土器	椀	15.2	4.1		25	1mm前後のチャート・石英・クサリレキ含む	良好	暗乳色	A類
350	黒色土器	椀	—	3.2	7.9	20	0.5mmの乳白色砂粒をわずかに含む	良好	暗褐色	A類
351	須恵器	壺H蓋	8.8	3.2		25	1mmの白色砂粒をわずかに含む	良好	灰色	
352	須恵器	壺G蓋	8.3	2.0		33	1~2mmの白・灰色砂粒を含む	良好	淡青灰色	
353	須恵器	壺G蓋	11.2	2.8		20	1~3mmの乳白・灰色砂粒を含む	良好	灰色	
354	須恵器	壺G蓋	12.4	3.2		15	1mm前後の白色砂粒を含む	良好	灰色	
355	須恵器	壺G?	9.3	3.3		20	1~2mmの白色砂粒を含む	良好	淡青灰色	
356	須恵器	壺G?	9.8	4.6		45	1~3mmの白色砂粒を含む	良好	灰色	
357	須恵器	壺G?	9.0	3.8		28	0.5~1mmの白・乳・灰色砂粒を含む	やや良	暗緑灰色	
358	須恵器	壺G?	10.2	3.6		30	1mmの乳白色砂粒を含む	良好	暗緑灰色	
359	須恵器	壺A	11.0	3.5		33	0.5mm前後の乳白・灰色砂粒を含む	良好	淡灰白色	
360	須恵器	壺A	11.4	3.7		33	0.5mm前後の白色砂粒を多く含む	良好	灰色	
361	須恵器	壺A	12.8	3.5		30	1mmの白色砂粒をわずかに含む	良好	灰色	
362	須恵器	壺A	13.0	3.2		15	0.5mmの乳白色砂粒をわずかに含む	良好	明灰色	
363	須恵器	壺B蓋	14.5	3.4		45	0.5mm前後の乳白・淡褐色砂粒を含む	良好	灰色	
364	須恵器	壺B蓋	13.5	2.4		33	2mmの乳白色砂粒を含む	良好	淡青灰色	
365	須恵器	壺B蓋	14.8	3.1		30	0.5~1mmの灰・褐色砂粒を多く含む	良好	淡灰色	
366	須恵器	壺B蓋	17.9	1.5		33	0.5mmの白色砂粒をわずかに含む	良好	暗緑灰色	
367	須恵器	壺B蓋	13.5	2.9		33	0.5~1mmの乳白・灰・乳色砂粒を含む	やや良	暗緑灰色	つまみ欠損
368	須恵器	壺B蓋	14.6	2.3		45	1mmの白色砂粒をわずかに含む	良好	暗緑灰色	つまみ欠損
369	須恵器	壺B	13.0	4.4	7.9	35	1~2mmの白・灰色砂粒を多く含む	良好	暗緑灰色	
370	須恵器	壺B	15.3	3.8	10.2	35	1~2mmの白・灰・褐色砂粒を含む	良好	暗灰色	
371	須恵器	壺B	12.4	3.7	8.5	20	黒色微砂粒をわずかに含む	良好	淡乳灰色	
372	須恵器	壺B	15.0	4.1	8.1	65	0.5~1mmの乳白色砂粒を含む	やや良	暗緑灰色	
373	須恵器	壺B	16.5	4.9	12.2	30	1~2mmの白・乳白色砂粒を含む	良好	暗緑灰色	
374	須恵器	壺B	14.6	3.9	10.0	35	0.5~1mmの乳白・白色砂粒を含む	やや良	暗緑灰色	
375	須恵器	壺B	13.5	4.4	9.1	33	1mm前後の白・灰色砂粒を含む	良好	淡灰色	
376	須恵器	壺B	12.6	4.0	4.7	20	1mm前後の乳白色砂粒を含む	良好	灰色	
377	須恵器	皿A	14.0	2.9		25	1mm前後の白色砂粒を含む	良好	青灰色	
378	須恵器	皿A	17.1	2.8		30	白色微砂粒をわずかに含む	良好	淡青灰色	
379	須恵器	皿A?	14.2	3.1		12	1mm前後の白色砂粒をわずかに含む	良好	灰色	
380	須恵器	稜椀?	—	4.7	8.8	35	1~2mmの白色砂粒をわずかに含む	良好	暗灰色	口縁部欠損
381	須恵器	椀	12.6	8.8		17	0.5mmの乳白色砂粒をわずかに含む	良好	淡褐灰色	把手付
382	須恵器	高壺	12.4	3.6		67	1mm前後の白・灰・褐色砂粒を含む	やや良	乳橙褐色	脚部欠損
409	須恵器	円面硯	17.8	4.4		33	1~2mmの乳白色砂粒を多く含む	良好	淡青灰色	脚部欠損
410	須恵器	壺A蓋	12.1	3.1		20	1mmの白色砂粒を多く含む	良好	暗灰色	つまみ欠損
411	須恵器	壺A	11.2	9.0		20	0.5~1mmの乳白色砂粒を含む	良好	暗青灰色	最大径 21.0

表19-2 SR01出土の土器 観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調	その他特徴
412	須恵器	壺E	9.9	6.6	5.8	30	1mm前後の白・灰色砂粒を含む	良好	明灰色	最大径 12.3
413	須恵器	壺?	—	4.1	5.6	40	0.5~1mmの白色砂粒を含む	良好	暗青灰色	最大径 9.6
414	須恵器	壺?	—	10.9	8.7	30	1mm前後の白・灰色砂粒を含む	良好	灰色	最大径 15.9
415	須恵器	壺?	—	9.0	8.8	33	1~2mmの乳色砂粒を含む	良好	暗青灰色	
416	須恵器	壺?	—	3.7	3.7	25	0.5mm前後の白色砂粒を含む	良好	灰色	
417	須恵器	横瓶	12.0	4.7	25		1mm前後の白色砂粒をわずかに含む	良好	灰色	
418	須恵器	壺?	17.0	4.9		12	黒色微砂粒をわずかに含む	良好	灰色	
419	須恵器	壺?	13.8	13.8	13.1	25	1~2mmの乳白・黒色砂粒を多く含む	良好	暗褐灰色	最大径 19.6
420	須恵器	平瓶	—	10.7	14.8	17	1~2mmの乳白色砂粒を多く含む	良好	暗青灰色	最大径 22.9
421	須恵器	鉄鉢	20.8	3.8		10	1mmの白色砂粒をわずかに含む	やや良	淡灰白色	
422	須恵器	甕	18.6	6.6		33	1mm前後の白色砂粒をわずかに含む	良好	明灰色	
423	須恵器	甕	24.6	6.9		20	1mm前後の白色砂粒を含む	良好	灰色	
424	須恵器	甕	19.8	9.3		25	1~3mmの乳白・灰色砂粒を含む	やや良	暗緑灰色	
425	須恵器	甕	28.6	7.2		25	1~2mmの乳白色砂粒を含む	良好	灰色	
426	須恵器	甕	38.7	12.9		33	1mmの白・黒色砂粒を含む	良好	明灰色	
427	縁釉陶器		16.2	1.7		5	砂粒を含まない、堅緻	硬質	淡黒緑色	
428	縁釉陶器		—	2.1	9.9	17	白・灰色微砂粒をわずかに含む	硬質	黒緑色	
429	縁釉陶器		—	1.3	8.8	12	0.5mmのチャートを含む	硬質	濁黄緑色	
430	縁釉陶器		—	1.6	5.6	33	砂粒を含まない、堅緻	硬質	淡黒緑色	
431	灰釉陶器		15.6	1.8		6	0.5mmの白・灰・黒色砂粒を含む	良好	淡乳灰色	
432	土師器	飯蛸壺	4.1	10.5		95	1~2mmの石英・チャート・長石・クサリレキを含む	良好	淡灰色	重さ 195.3 g
433	須恵器	飯蛸壺	—	5.6		50	1mm前後の灰色砂粒を含む	良好	灰色	重さ 78.1 g
434	土師器	指輪?	4.4	3.9		85	0.5mm前後のチャート・長石を含む	良好	淡灰褐色	重さ 34.2 g
435	管状土錘		0.9	3.1			1mmのチャート・石英わずかに含む	良好	淡乳色	重さ 1.4g
436	管状土錘		1.2	4.2			1mm前後のチャート・長石・石英	良好	暗乳色	重さ 4.2g
437	管状土錘		1.1	3.9			ほとんど砂粒を含まない	良好	淡乳橙色	重さ 4.8g
438	管状土錘		1.3	4.4			1mmのチャート・長石を多く含む	良好	暗乳色	重さ 4.2g
439	管状土錘		1.3	4.7			0.5mmの石英・長石	良好	淡乳褐色	重さ 6.2g
440	管状土錘		1.3	4.3			0.5mmのチャート・長石	良好	淡褐色	重さ 7.1g
441	管状土錘		1.3	6.1			0.5~1mmのチャート・長石	良好	暗乳褐色	重さ 8.2g
442	管状土錘		1.2	5.1			ほとんど砂粒を含まない	良好	暗乳色	重さ 5.2g
443	管状土錘		1.5	5.4			0.5mm前後のチャート・長石	良好	暗乳色	重さ 8.9g
444	管状土錘		3.3	6.8			1mm前後のチャート・長石・石英・クサリレキ	良好	淡赤橙色	重さ 69.3g
445	管状土錘		3.8	7.7			1~2mmのチャート・石英・長石	良好	淡乳褐色	重さ 90.8g
446	管状土錘		4.3	7.6			1~2mmのチャート・石英・長石を多く含む	良好	暗乳色	重さ 124.6g
447	管状土錘		4.3	9.4			0.5~1mmのチャート・長石・石英	良好	暗乳褐色	重さ 150.3g
448	棒状有孔土錘		1.2	6.3			1mm前後の石英・長石を多く含む	良好	淡橙色	重さ 10.7g
449	棒状有孔土錘		1.6	6.1			0.5~2mmのクサリレキを多く含む	良好	暗乳色	重さ 17.0g
450	有溝土錘		4.1	7.2			1~2mmのチャート・石英	良好	淡乳色	重さ 92.1g
451	有溝土錘		2.3	4.7			ほとんど砂粒を含まない	良好	暗乳色	重さ 20.3g

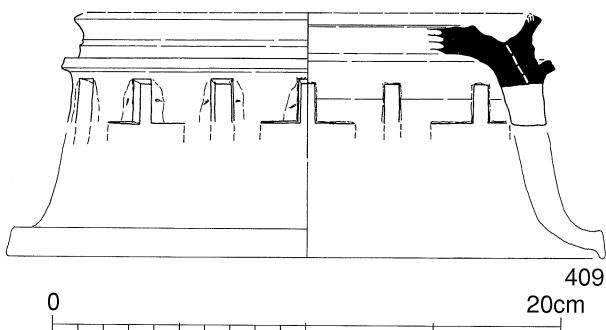


図77 SR01出土の土器（4）

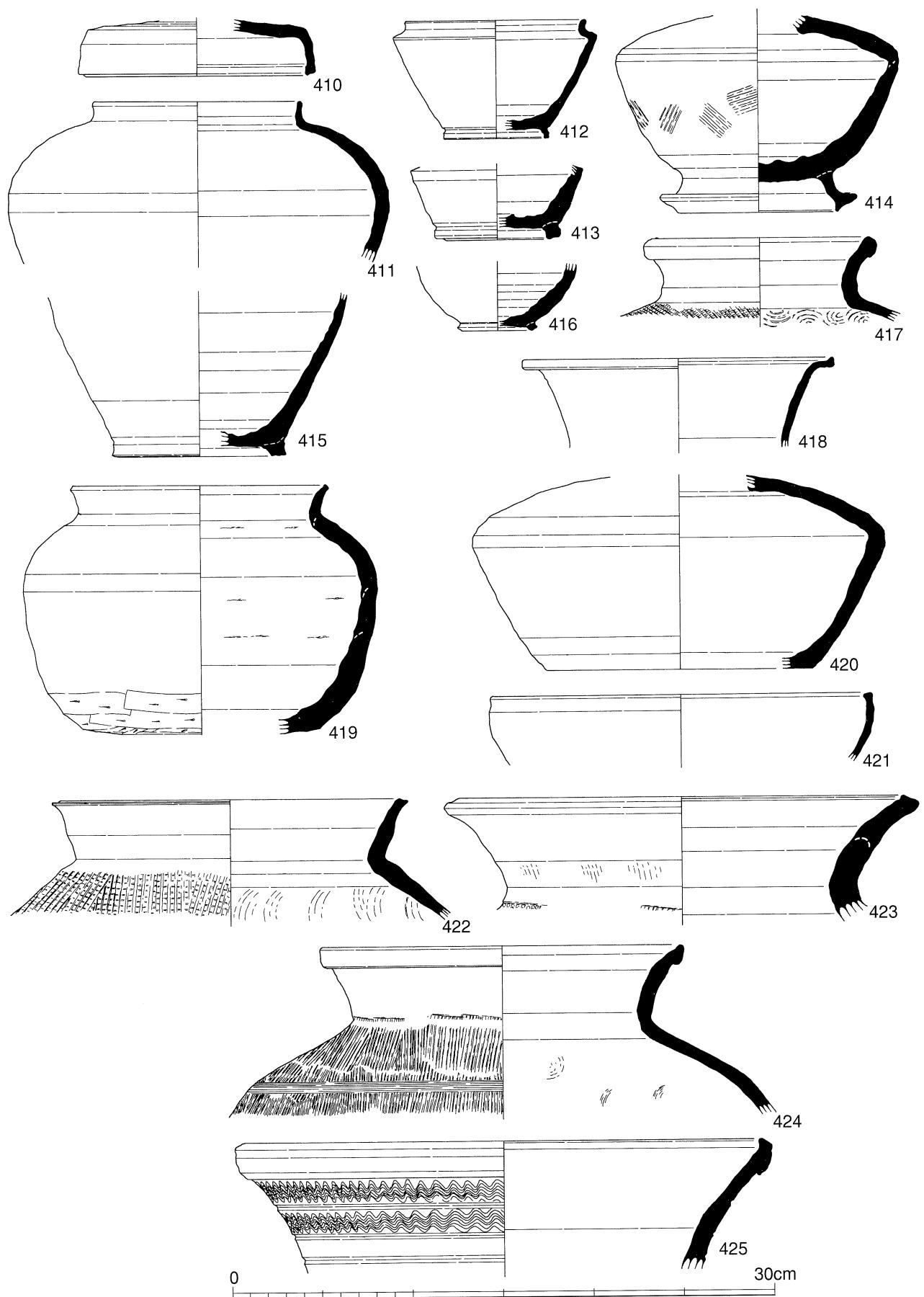


図78 SR01出土の土器 (5)

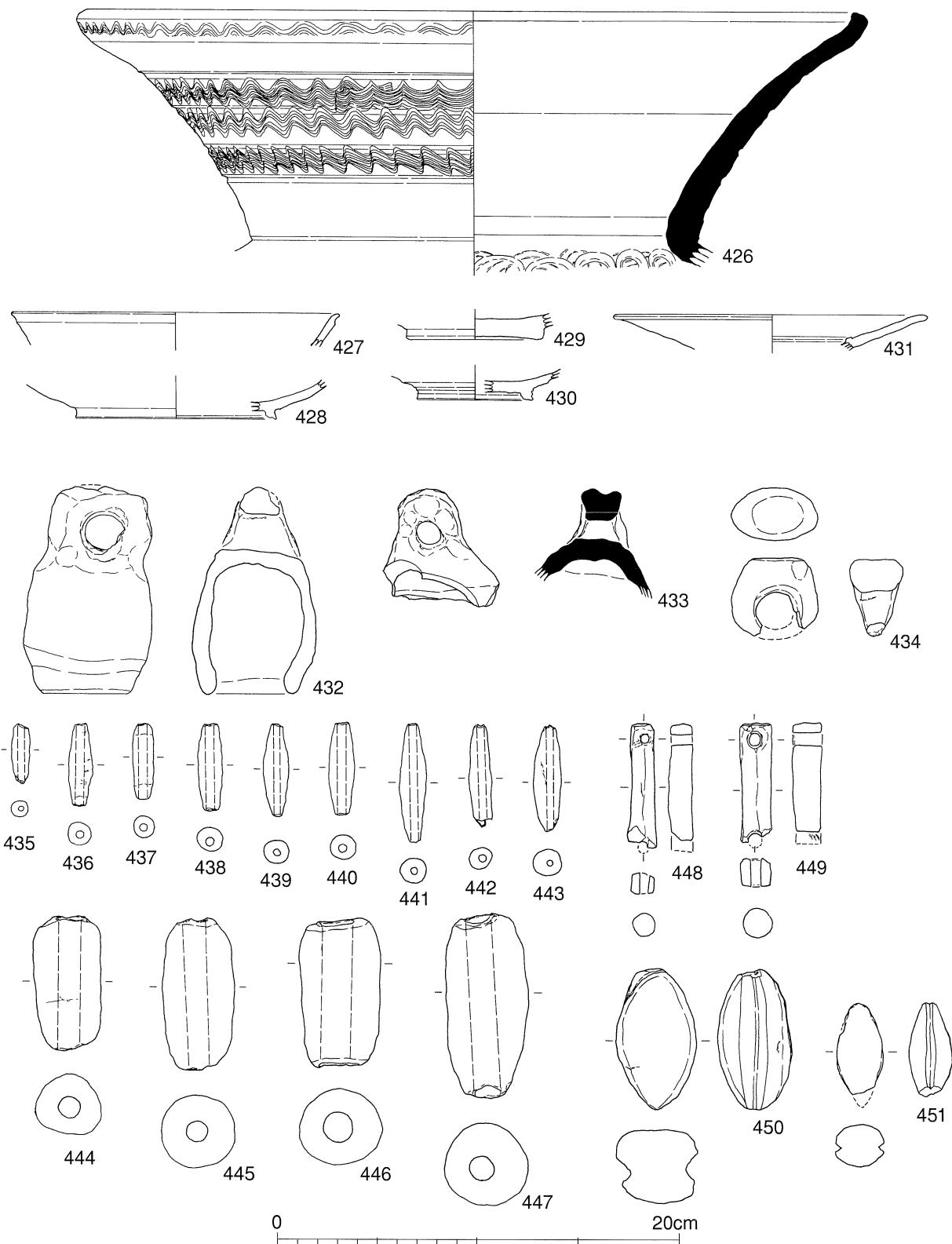


図79 SR01出土の土器 (6)

(434) は土師質の指輪あるいは指貫を想像させるものであるが、判然としない。

漁網錘は全容の窺えるものを図化した。管状土錘（435～447）・棒状有孔土錘（448・449）・有溝土錘（450・451）がある。

瓦

(452～458) は中房に1+8の蓮子を配し、19葉の肉薄の細弁を内区に配し、界線で画した外区にはまばらな連珠文帯が巡る单弁19葉蓮華文の軒丸瓦。周縁は直立気味にたちあがり、上面は丸く収める。瓦当面径は17.0cm。胎土には1～3mm大のチャート・石英・長石を多く含み、色調は淡乳褐色～暗乳色で、いずれも2次焼成を受けている。芦屋市芦屋廃寺遺跡⁽³⁾のものと同範と考えられ、芦屋市津知遺跡でも出土が知られる⁽⁴⁾。

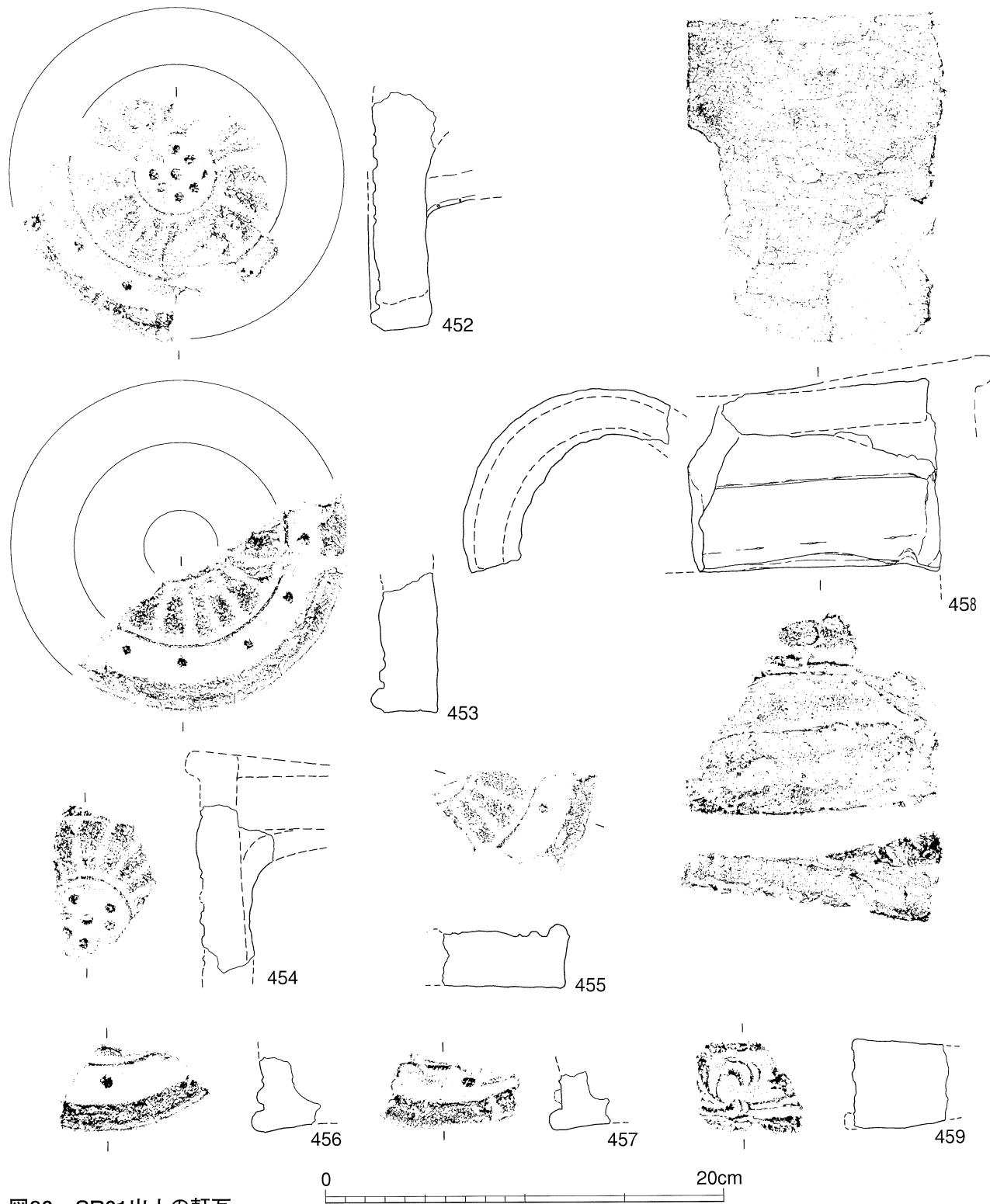


図80 SR01出土の軒瓦

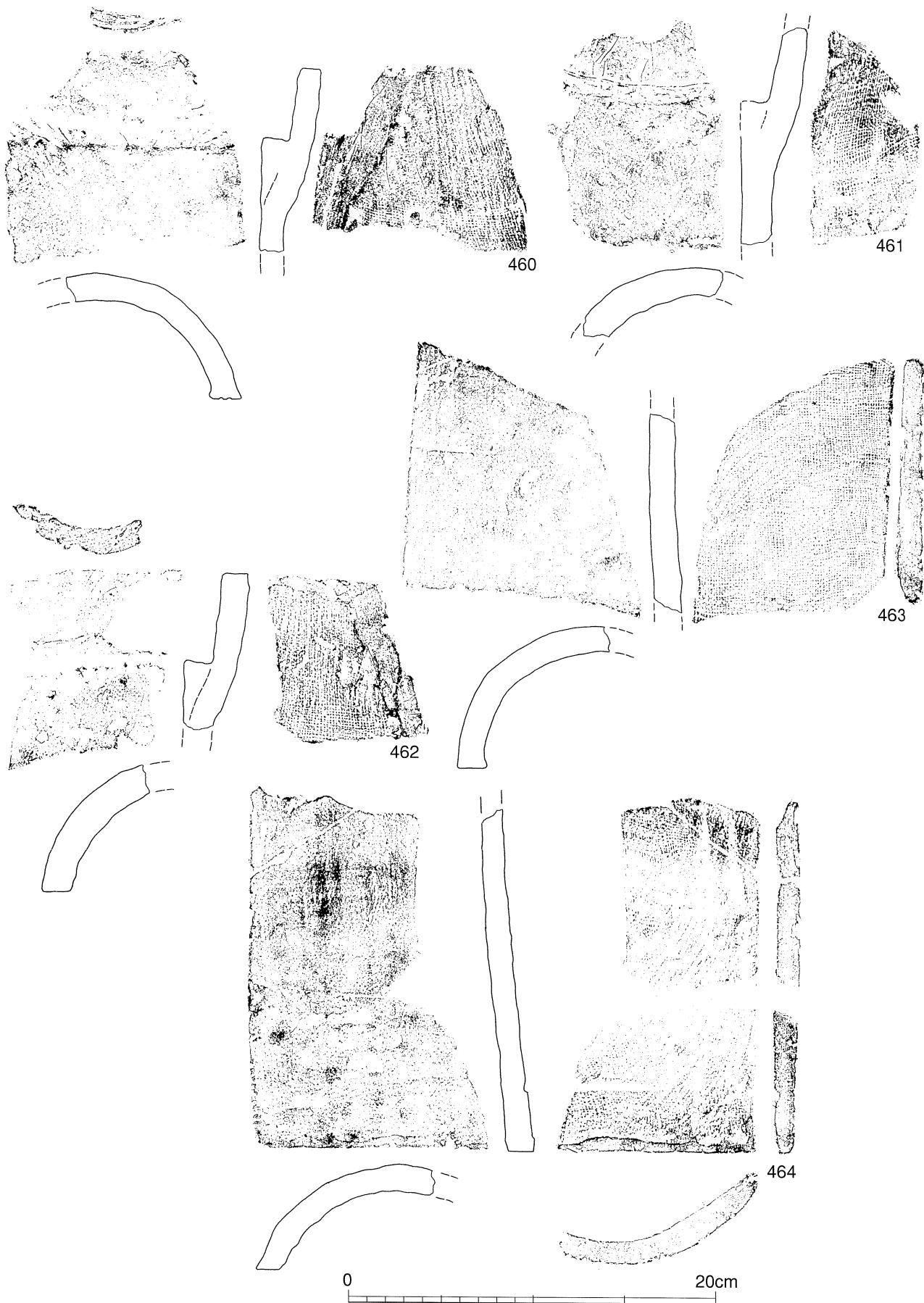


図81 SR01出土の丸瓦

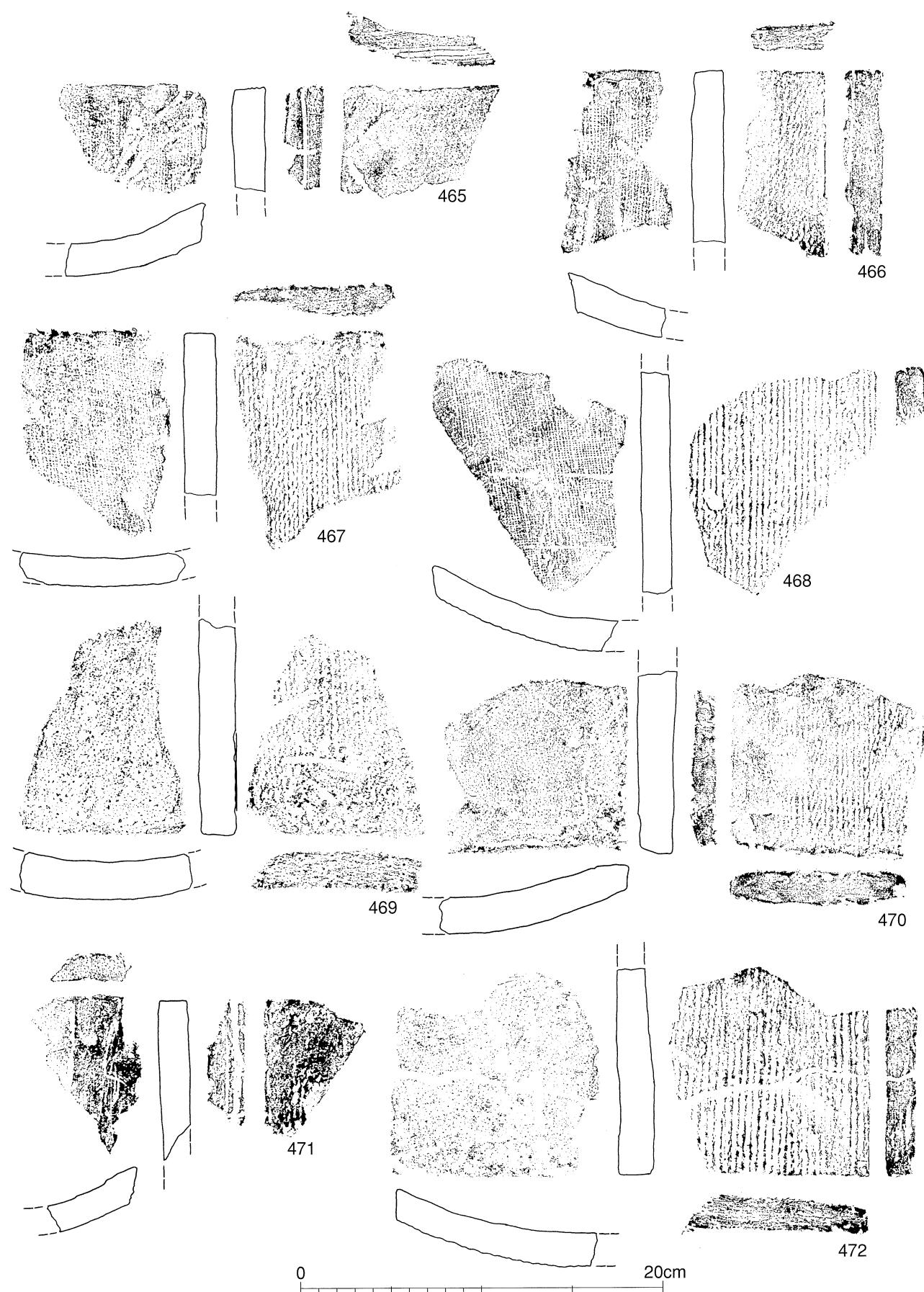


図82 SR01出土の平瓦

(454・458) は瓦当面と丸瓦の接合の観察できる資料で、広端面を横方向のヘラ削りで仕上げた瓦当面径より一回り小さい丸瓦の丸瓦を瓦当裏面に押し当て、内外面に粘土を補充する単純な接合方法である。

(459) は法隆寺式の均整忍冬唐草文軒平瓦で、宝珠形の中心飾の一部と向かって左側の第一結節部が残存する。瓦当面は摩滅が顕著で、顎は直線的である。胎土には1～3mm大のチャート・石英・長石を多く含み、色調は暗乳色である。芦屋廃寺遺跡（第62地点）の資料⁽⁵⁾と同範と考えられる。芦屋廃寺の創建期に近い時期のものであろう。2次焼成を受けている。

丸瓦・平瓦とともに、全容を窺える資料はない。丸瓦は概して凸面が縄目叩き、凹面が布目で仕上げられる。平瓦は概して凹面が布目で、凸面はやはり縄目叩き仕上げである。広端面・狭端面・側面はいずれもヘラ削りが施される。

木製品 木製品は多量かつ多岐にわたる。中でも木簡の出土は特筆できる。

木簡の釈文 木簡1 「勘 戸主掠人安道米壹斗国儲

と内容 承和十月十日掠人稻繼 合・」 221×29×3 011型式

・「勘 合」

木簡2 「九々八十一 八九七十二」 132×18×5 011型式

木簡4 [水カ]

「□

(73)×(6)×6

081型式

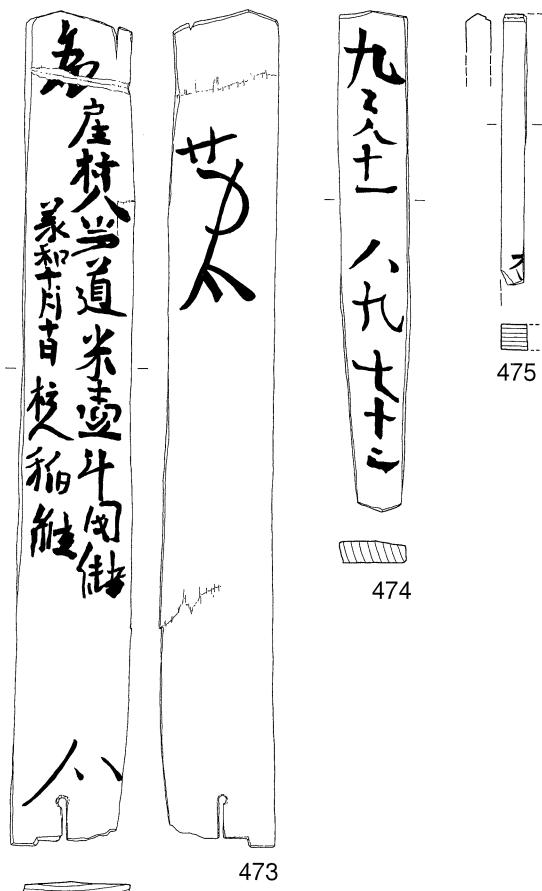


図83 SR01出土の木簡

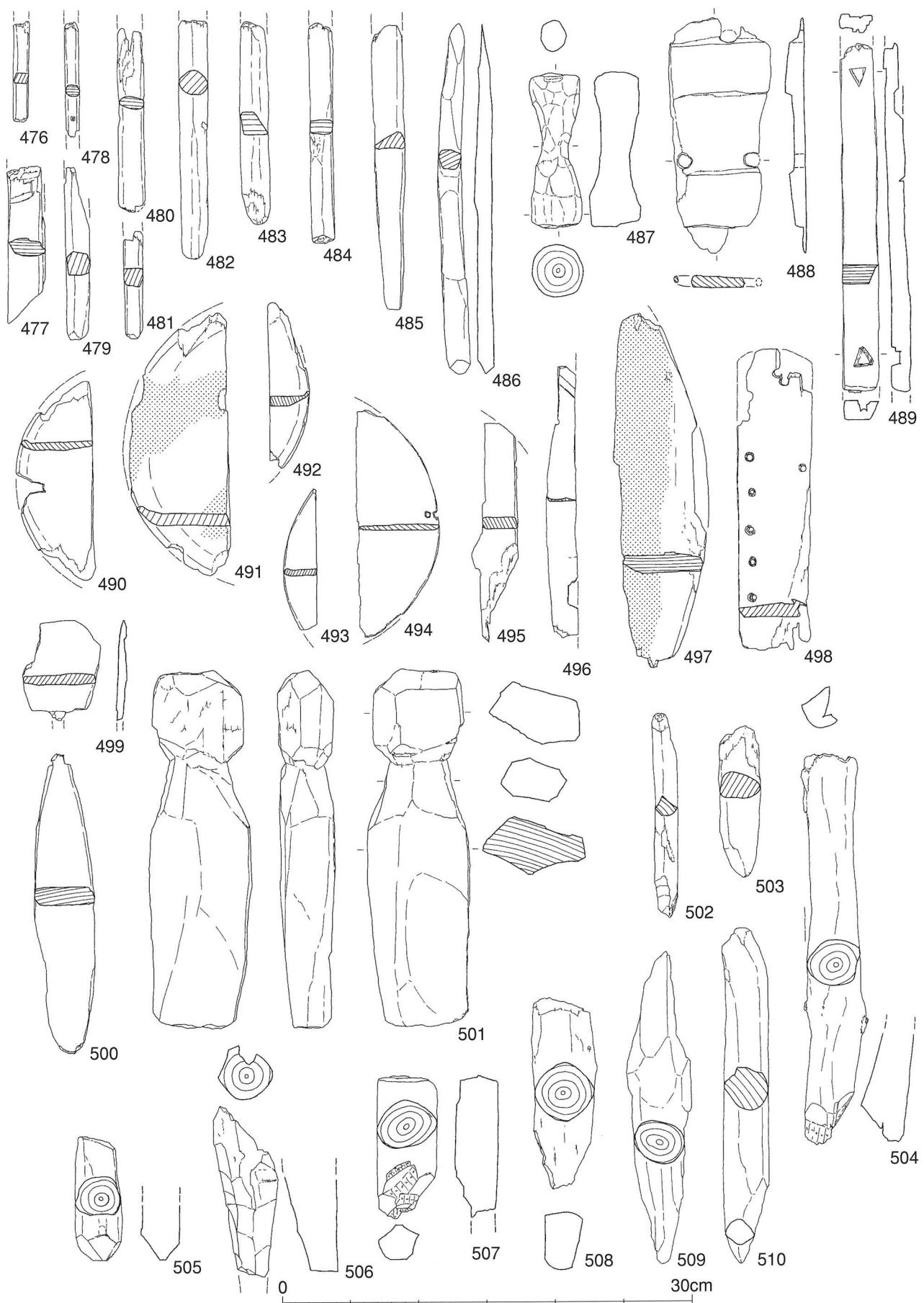


図84 SR01出土の木製品（1）

表20-1 SR01出土の木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
473	木簡	暗灰色シルト	22.1	2.9	0.3	ツガ属		6947
474	木簡	暗灰色シルト質細砂	13.2	1.8	0.5	ヒノキ		7297
475	木簡片	暗灰色シルト	7.3	0.6	0.6	ヒノキ		6883
476	角材	暗灰色シルト	7.1	1.1	0.7	ヒノキ属		6925
477	柄	暗灰色シルト	11.2	2.7	1.3	ツガ属		6959
478	有孔柄	暗灰色シルト	8.5	1.0	0.8	スギ		6957
479	柄	暗灰色シルト質細砂	12.7	1.7	1.8	ヒノキ		7294
480	柄	暗灰色シルト	13.2	1.9	0.8	ヒノキ		6922
481	柄	暗灰色シルト	7.9	1.4	1.4	ヒノキ属		6900
482	柄	暗灰色シルト	16.6	2.1	1.8	ヒノキ		6956
483	柄?	暗灰色シルト	14.7	2.0	1.6	ヒノキ		6905
484	柄	暗灰色シルト質細砂	16.1	1.8	1.0	スギ		6859
485	丸柄	灰色中～粗砂	20.9	1.3	1.3	ヒノキ		6943
486	籠	暗灰色シルト質細砂	25.7	1.8	1.4	ヒノキ	板目	6861
487	木錐	淡灰色砂	11.4	3.7	3.7	モミ属		6951
488	下駄	暗灰色シルト質細砂	18.3	7.5	1.4	ヒノキ		6858
489	角柄?	暗灰色シルト	25.6	2.6	1.4	ヒノキ属	くり込み(三角)	6917
490	木皿	暗灰色シルト	14.5	5.6	0.6	ヒノキ属	横木	6949
491	皿	暗灰色シルト質細砂	19.0	7.3	0.9	ヒノキ		6846
492	皿	暗灰色シルト質細砂	11.6	2.9	0.9	ヒノキ	四片・横木	6855
493	曲物底	淡灰色中～粗砂	10.0	2.4	0.5	ヒノキ		6953
494	曲物底	暗灰色シルト	16.6	6.0	0.5	ヒノキ属		6955
495	桶底板	暗灰色シルト質細砂	16.0	3.4	0.8	ヒノキ属	柾目	6864
496	加工片	暗灰色シルト質細砂	19.8	2.2	0.2	ヒノキ	板目	6853
497	板材	暗灰色シルト	25.2	6.3	1.4	スギ		6950
498	板材	暗灰色シルト	22.0	5.4	1.0	ヒノキ		6884
499	人形(頭)	暗灰色シルト質細砂	7.4	5.4	0.8	アカガシ亞属		6862
500	人形(胴)	暗灰色シルト質細砂	23.9	4.5	1.3	スギ	板目	6860
501	人形	暗灰色シルト	26.2	7.5	4.0	ヒノキ属		6871
502	割材	暗灰色シルト	14.8	1.8	1.4	ヒノキ		6932
503	丸材	暗灰色シルト	11.1	3.1	1.9	コウヤマキ		6944
504	丸材	淡灰色砂礫	28.5	4.5	3.3	マツ属複維管束亞属		6945
505	角材	暗灰色シルト質細砂	8.8	3.5	2.7	モミ属		6849
506	杭	乳褐色砂	10.9	4.1	3.8	アカガシ亞属		6941
507	丸材	暗灰色シルト	10.6	4.5	3.3	ヒノキ科		6890
508	丸杭	暗灰色シルト	13.9	4.7	4.2	アカマツ		6903
509	丸杭	淡灰色砂礫	22.8	4.7	3.1	モミ属		6952
510	丸杭	暗灰色シルト質細砂	24.7	3.4	3.1	アカマツ		6911
511	板材	暗灰色シルト	11.5	2.1	0.5	ヒノキ		6962
512	板材	暗灰色シルト	6.9	1.9	0.5	ヒノキ属	板目	6926
513	角材	暗灰色シルト	9.4	2.3	1.3	ツガ属		6961
514	加工片	暗灰色シルト	5.0	2.1	0.2	ヒノキ属		6964
515	板材	暗灰色シルト	6.1	1.8	0.7	ヒノキ	柾目	6901
516	板材	暗灰色シルト	8.6	3.5	0.7	針葉樹		6936
517	板材片	暗灰色シルト	6.6	0.8	0.4	ヒノキ		6902
518	板材	暗灰色シルト	12.0	2.0	0.5	ヒノキ	板目	6923
519	板材	暗灰色シルト	10.3	2.1	0.4	ツガ属		6934
520	板材	暗灰色シルト	14.7	2.4	0.5	ツガ属	板目	6878
521	板材	暗灰色シルト質細砂	8.2	2.4	0.2	ヒノキ		6845

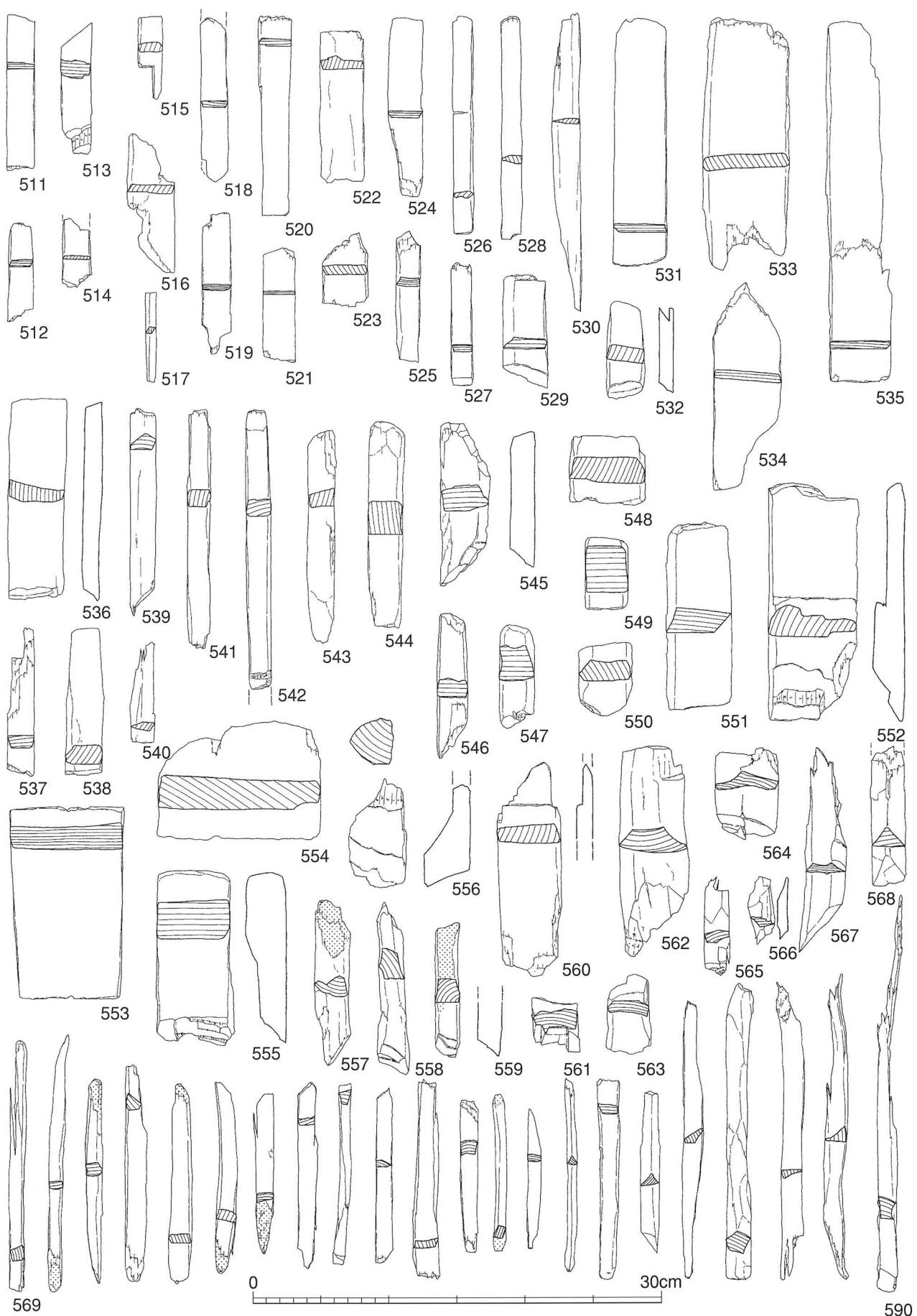


図85 SR01出土の木製品（2）

表19-2 SR01出土の木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
522	板材	暗灰色シルト	11.0	3.3	1.0	ヒノキ属		6908
523	板材	暗灰色シルト	5.4	3.3	0.7	ヒノキ属	柾目	6940
524	板材	暗灰色シルト質細砂	13.2	2.6	0.5	ヒノキ		6867
525	板材	暗灰色シルト	9.6	1.8	0.6	ツガ属		6948
526	板材	暗灰色シルト	16.1	1.5	0.5	ヒノキ		7295
527	板材	淡灰色砂礫	9.0	1.6	0.5	ヒノキ		6946
528	板材	暗灰色シルト	16.3	1.5	0.6	ヒノキ属	柾目	6916
529	板材	暗灰色シルト	7.8	3.3	0.8	ヒノキ		6935
530	加工片	暗灰色シルト	22.0	2.0	0.4	ヒノキ	柾目	6875
531	板材	暗灰色シルト	18.3	4.0	0.6	ヒノキ属		6958
532	角材片	暗灰色シルト	7.2	2.8	1.1	スギ		6915
533	板材	暗灰色シルト	18.5	6.4	1.0	ヒノキ	柾目	6886
534	板材	暗灰色シルト	14.4	4.9	0.6	ツガ属		6930
535	板材	暗灰色シルト	26.7	4.6	0.6	ツガ属	板目	6872
536	板材	暗灰色シルト	14.7	4.2	1.4	ヒノキ	柾目	6885
537	角材	暗灰色シルト	10.8	2.0	0.9	ヒノキ		6924
538	角材	暗灰色シルト	10.7	2.8	1.4	ツガ属		6879
539	板材	暗灰色シルト	15.0	1.9	1.2	ヒノキ		6931
540	加工片	暗灰色シルト	7.3	1.8	0.6	ヒノキ		6899
541	角材片	暗灰色シルト	17.4	1.8	1.3	スギ		6921
542	角材	暗灰色シルト質細砂	20.5	1.9	1.3	ヒノキ		6843
543	角材	暗灰色シルト質細砂	15.7	2.0	1.3	ヒノキ科		6863
544	角材	暗灰色シルト質細砂	15.1	1.7	2.4	スギ		6866
545	部材	暗灰色シルト	24.0	7.4	3.8	ヒノキ属		6912
546	板材	暗灰色シルト質細砂	10.5	2.3	1.4	ヒノキ		6854
547	角材片	暗灰色シルト	7.6	2.6	2.6	ヒノキ		6920
548	角材片	暗灰色シルト	5.0	5.6	1.9	ヒノキ属		6914
549	角物	暗灰色シルト	5.3	3.2	3.4	スギ		6918
550	角材片	暗灰色シルト	5.1	3.9	1.5	ヒノキ属		6919
551	割材	暗灰色シルト	13.7	4.8	1.8	ヒノキ		6954
552	板材	暗灰色シルト	17.5	6.7	2.3	ヒノキ属	柾目	6929
553	部材	暗灰色シルト	14.1	8.5	2.0	ヒノキ		6913
554	板材	暗灰色シルト質細砂	8.6	12.0	2.9	ヒノキ属	柾目	6865
555	角材	暗灰色シルト質細砂	12.7	5.7	2.9	ヒノキ		6847
556	加工片	暗灰色シルト	8.0	4.3	3.4	アカマツ		6881
557	角材	暗灰色シルト	12.1	2.6	1.5	ヒノキ	片方炭化	6963
558	杭	暗灰色シルト	11.8	2.4	2.3	ヒノキ	片方炭化	6960
559	割材	暗灰色シルト	7.9	1.8	1.8	ヒノキ	炭化	6909
560	板材	暗灰色シルト質細砂	15.5	4.7	1.4	ヒノキ属	柾目	6848
561	加工片	暗灰色シルト	3.6	3.4	1.4	ヒノキ		6910
562	割材	暗灰色シルト	15.2	5.2	1.9	×		6942
563	加工片	暗灰色シルト	5.7	3.3	0.9	ケンポナシ属		6937
564	加工片	暗灰色シルト質細砂	6.3	4.7	1.0	ヒノキ属	板目	6844
565	加工片	暗灰色シルト	7.0	1.9	0.8	ヒノキ		6907
566	板材	暗灰色シルト	5.0	1.8	0.7	ヒノキ属	板目	6939
567	加工片	暗灰色シルト	13.6	3.1	0.6	ヒノキ		6880
568	加工片	暗灰色シルト質細砂	10.0	2.6	1.3	ヒノキ属		6851
569	割材	暗灰色シルト	18.4	1.2	1.1	ヒノキ	片側炭化	6874
570	割材	暗灰色シルト	11.8	1.4	0.9	ヒノキ	片端炭化	6889

表19-3 SR01出土の木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹種	備考	W-No.
571	割材	暗灰色シルト	15.0	1.3	1.0	ヒノキ	炭化	6933
572	割材	暗灰色シルト	15.8	1.6	1.2	ヒノキ		6876
573	割材	暗灰色シルト	14.6	1.7	0.7	ヒノキ	炭化	6906
574	割材	暗灰色シルト	14.0	1.4	0.8	ヒノキ	片端炭化	6893
575	割材	暗灰色シルト	11.8	1.3	0.7	ヒノキ	片端炭化	6897
576	割材	暗灰色シルト	13.4	1.4	0.6	ヒノキ	片端炭化	6894
577	割材	暗灰色シルト質細砂	13.3	0.9	1.1	ヒノキ		6868
578	割材	暗灰色シルト	12.4	1.2	0.5	ヒノキ	片端炭化	6896
579	割材	暗灰色シルト	14.4	1.9	0.6	ヒノキ		6877
580	板材	暗灰色シルト質細砂	11.0	1.3	1.0	モミ属		6856
581	割材	暗灰色シルト	11.5	0.9	1.0	ヒノキ	両端炭化	6898
582	加工片	暗灰色シルト質細砂	10.3	0.9	0.5	ヒノキ属		6869
583	割材	暗灰色シルト	14.0	0.8	0.6	ヒノキ属	片端炭化	6895
584	割材	暗灰色シルト	14.6	1.5	0.7	ヒノキ		6892
585	割材	暗灰色シルト	19.0	1.1	0.5	ヒノキ		6891
586	割材	暗灰色シルト	20.5	1.4	0.8	針葉樹		6888
587	割材	暗灰色シルト	21.8	1.9	1.5	ヒノキ	炭化	6904
588	割材	暗灰色シルト	22.0	1.6	0.5	ヒノキ		6887
589	割材	暗灰色シルト	22.4	1.6	1.2	ヒノキ属	片側炭化	6873
590	割材	暗灰色シルト質細砂	29.2	1.5	1.6	ヒノキ属		6850

木簡1（473）は戸主の椋人安道に対して国儲より米壹斗が支給されたことを承和（年次の記載なし）十月十日に椋人稻継が証明した支給伝票木簡と考えられる。表面で勘合した上に、さらに裏面でも繰り返し勘合し、嚴重な照合が行われたことが判り、これまでにはこうした勘合の木簡は知られていない。また、下端に穿孔があるのは同種の木簡が伝票として束ねられていたことも窺える。但し、表裏の筆の異同については明らかでない。なお、「椋人」は『史料』にみえる「葦屋倉人」、あるいは『新撰姓氏録』の「摂津国諸番」で、石古忌寸を同祖とし、阿知王之後とされる「藏人」あるいは「葦屋漢人」との関連が想起され、菟原郡葦屋郷内での米の受け渡しを物語る木簡として評価できよう。

木簡2（474）は表面にかなり多くの墨痕が確認できるもので、明確に判読できる文字は上述のとおりである。習書木簡あるいは呪符木簡と考えられる。木簡4（475）は欠損が著しく、墨痕がわずかに確認できる程度で、用途不明である。

この他の木製品には、工具あるいは農具の柄、ヘラ状製品、農具（木錘）、服飾具（下駄）、容器（皿・曲物）、祭祀具（顔形・人形）などの製品とともに、加工部材・加工残片や炭化痕の明瞭な加工木（松明、付け木あるいは籌木？）などがある。

(487) は木錘で、丸木材の両端を残し、中央に向かって円錐形状に削り込んだものである。ほぼ全面に加工痕が認められる。(488) はB II d型式とされる下駄の右足で、使用による摩滅が著しく、歯はほとんど残っていない。(489) は三角形の抉りが相対するように両端近くに施された断面方形の部材である。(490～492) は挽物皿で、復元径はそれぞれ16.2cm、20.5cm、18.6cmである。特に、(491) では内面の炭化が顕著である。(498) は長辺に沿って貫通孔が穿たれた板材である。(499) は目・鼻の表現は

確認できないが、人形の頭部と考えている。(500) は一端に突起がつく紡錘形の板材で、人形の体部を表現したものか。(501) は角棒材の両面から加工を施し、頭部と体部の境を造り出す立体人形で、目・鼻の表現はない。

金属器

金属器には4区東部SR01の上層で出土した刀子2点がある。両者ともに欠損が著しいが、(591) は全長7.7cm、刃幅1.2cm、厚さ0.45cm、(592) は全長4.6cm、刃幅1.0cm、厚さ0.3cmである。

石器

また、長さ2.1cm、幅1.75cm以上、厚さ0.5cm、重さ1.3gのサヌカイト製打製石鏸(593) や長さ8.4cm以上、幅7.5cm、厚さ3.8cm、重さ291.4gの大型蛤刃石斧片(594) も出土している。弥生時代中期のものと考えられる。(山本)

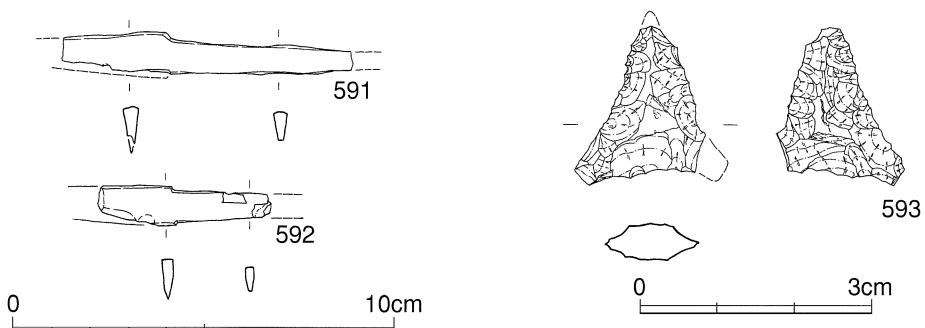
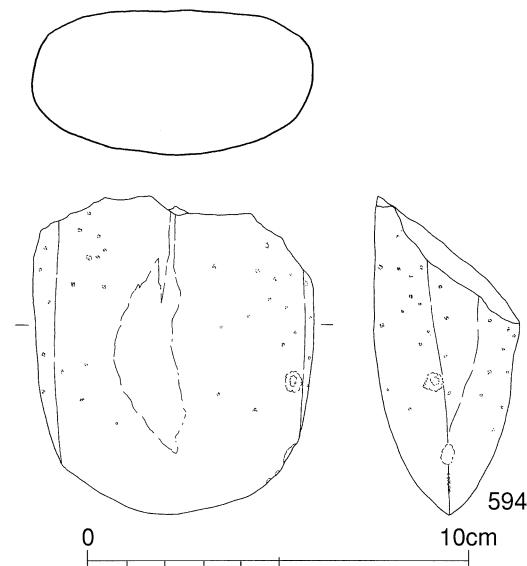


図86 SR01出土の鉄製品

図87 SR01出土の石器



- 註 (1) a) 村川行弘「芦屋市文化財調査報告第7集『芦屋廃寺址』」兵庫県芦屋市教育委員会 1970
b) 渡辺昇「芦屋廃寺軒瓦の整理ノート」「地域史研究 芦の芽」35 1982
c) 芦屋市教育委員会「芦屋廃寺遺跡(第62地点)発掘調査－平成11年度震災復興埋蔵文化財調査－現地説明会ノート」1999.12.5,
- (2) 森岡秀人・竹村忠洋・古川久雄「芦屋市文化財調査報告第35集『芦屋廃寺遺跡(第53地点)・寺田遺跡(第104地点)震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書－津知川排水区雨水管敷設工事』」芦屋市教育委員会 1999
- (3) 註(1)に同じ。
- (4) 森岡秀人・竹村忠洋氏のご教示による。
- (5) a) 森岡秀人・竹村忠洋「芦屋廃寺－芦屋廃寺中枢部の発掘調査－」『平成12年度兵庫県下埋蔵文化財発掘調査連絡会資料』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000
b) 寒川旭・森岡秀人・竹村忠洋「芦屋廃寺跡建物基壇と関わる地震痕跡」『日本考古学』第12号 2001

(5) 平安時代後期 (第1遺構面)

調査区東半で確認されたS R01が埋没した後、S B01～S B07の掘立柱建物をはじめとする遺構が密集していた遺構面とほぼ平坦になった段階で営まれた生活面である。掘立柱建物、溝、集石土坑、水溜め遺構などが確認されている。

S B08 1区東端で確認した東西3間(5.76m)×南北1間(4.20m、P 3～7間は3.90m)の東西棟の側柱の掘立柱建物と考えられる。P 8が攪乱のため存在しないが、さらに西側・北側・東側へさらに延びる可能性がある。

柱穴の掘形の直径は0.35～0.40m前後で、深さはP 4で最大0.62mである。埋土が灰色系のシルト～細砂で、直径0.12～0.20mの柱痕がいずれの柱穴でも確認でき、P 1ではヒノキと同定された柱材片(599)も出土している。桁行柱間に対して梁行の柱間が広い点が特徴的である。

(595・596)はP 3の掘形・P 7の掘形から出土した土師器壺の口縁部片である。(597)はP 2の柱痕、(598)はP 7の柱痕から出土した口径13.1cmの土師器壺あるいは椀である。口縁部がわずかに外反する特徴をもつ。11世紀代のものであろうか。

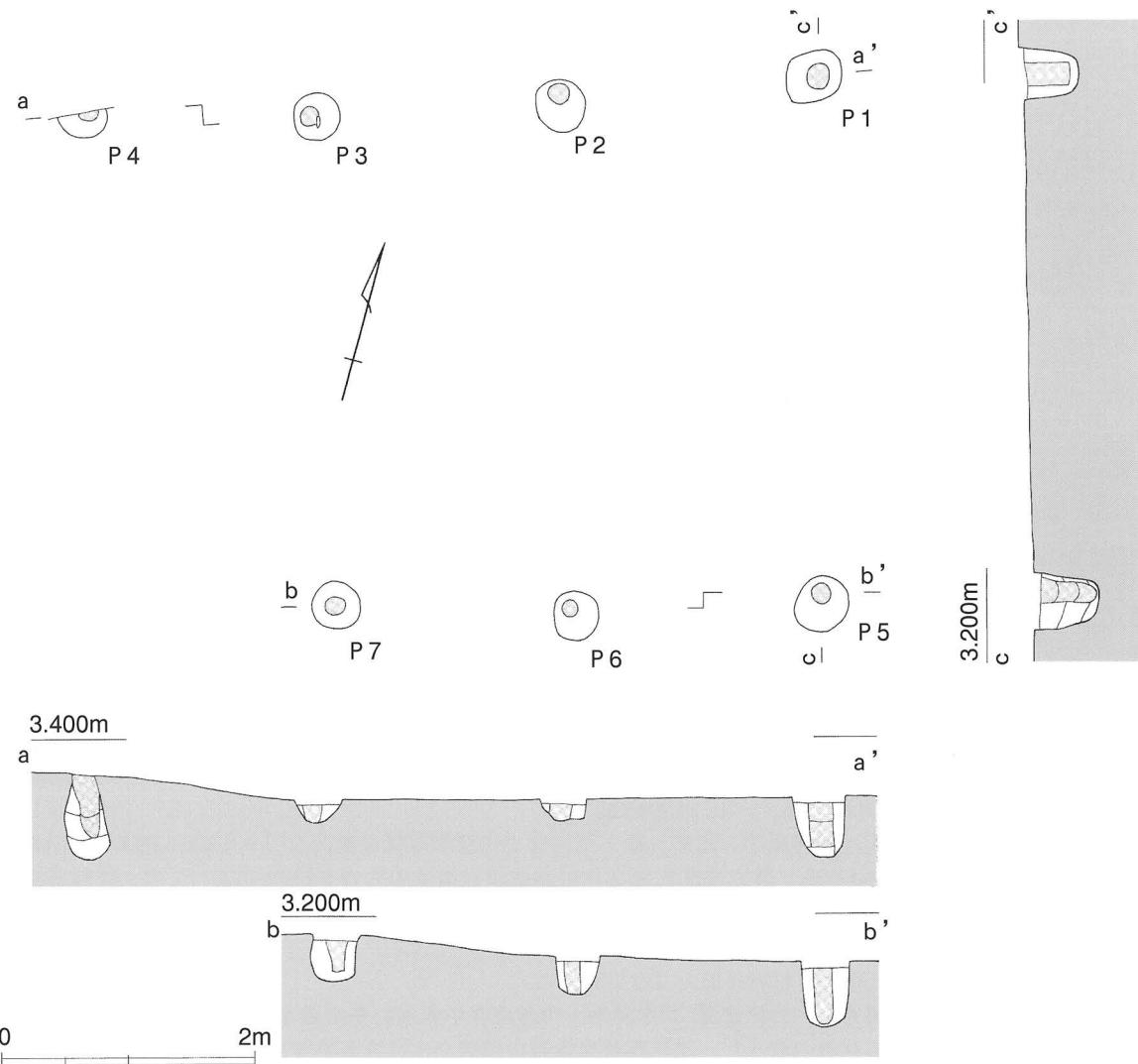


図88 SB08実測図

II. 遺構と遺物

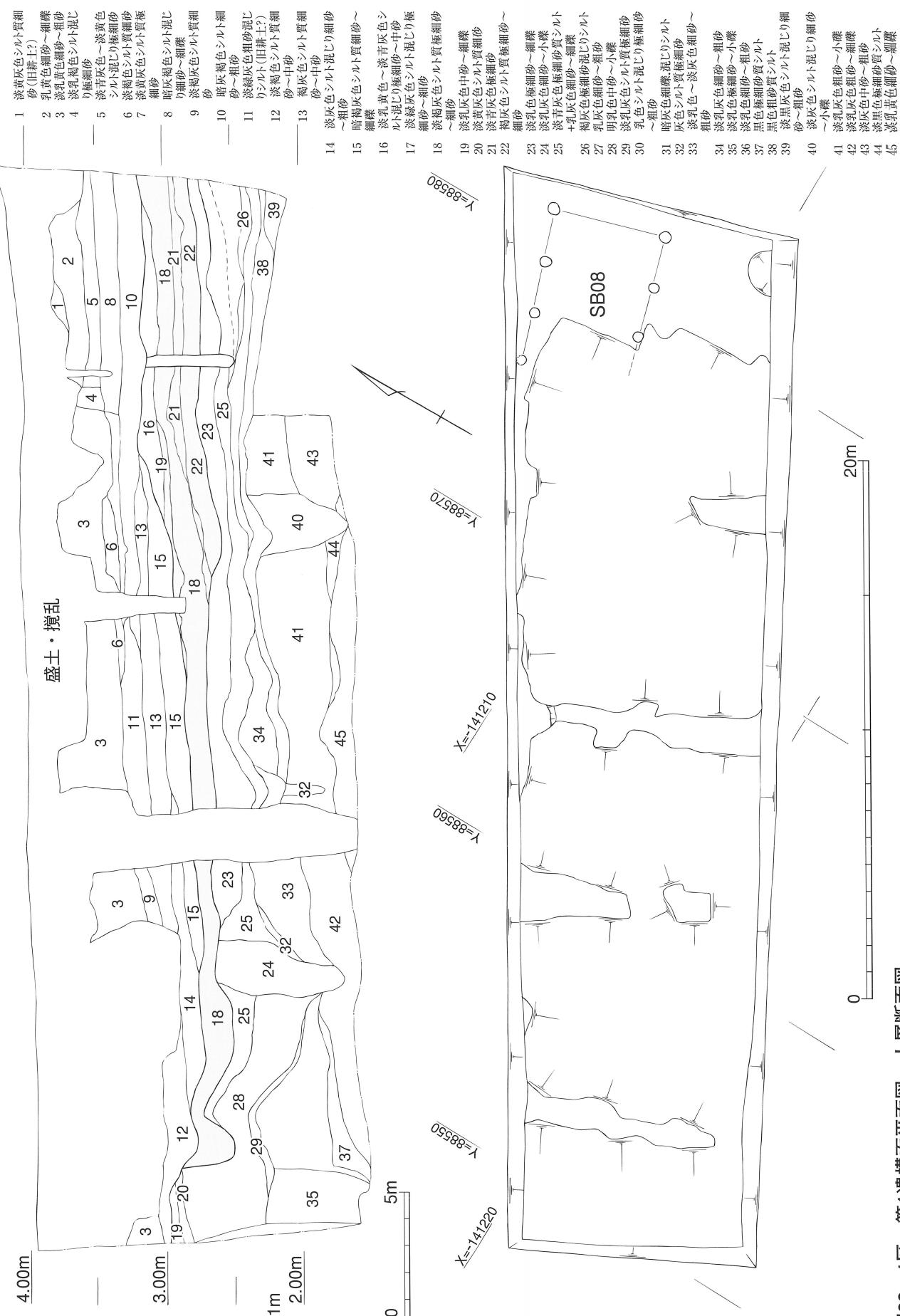


図89 1区 第1遺構面平面図・土層断面図

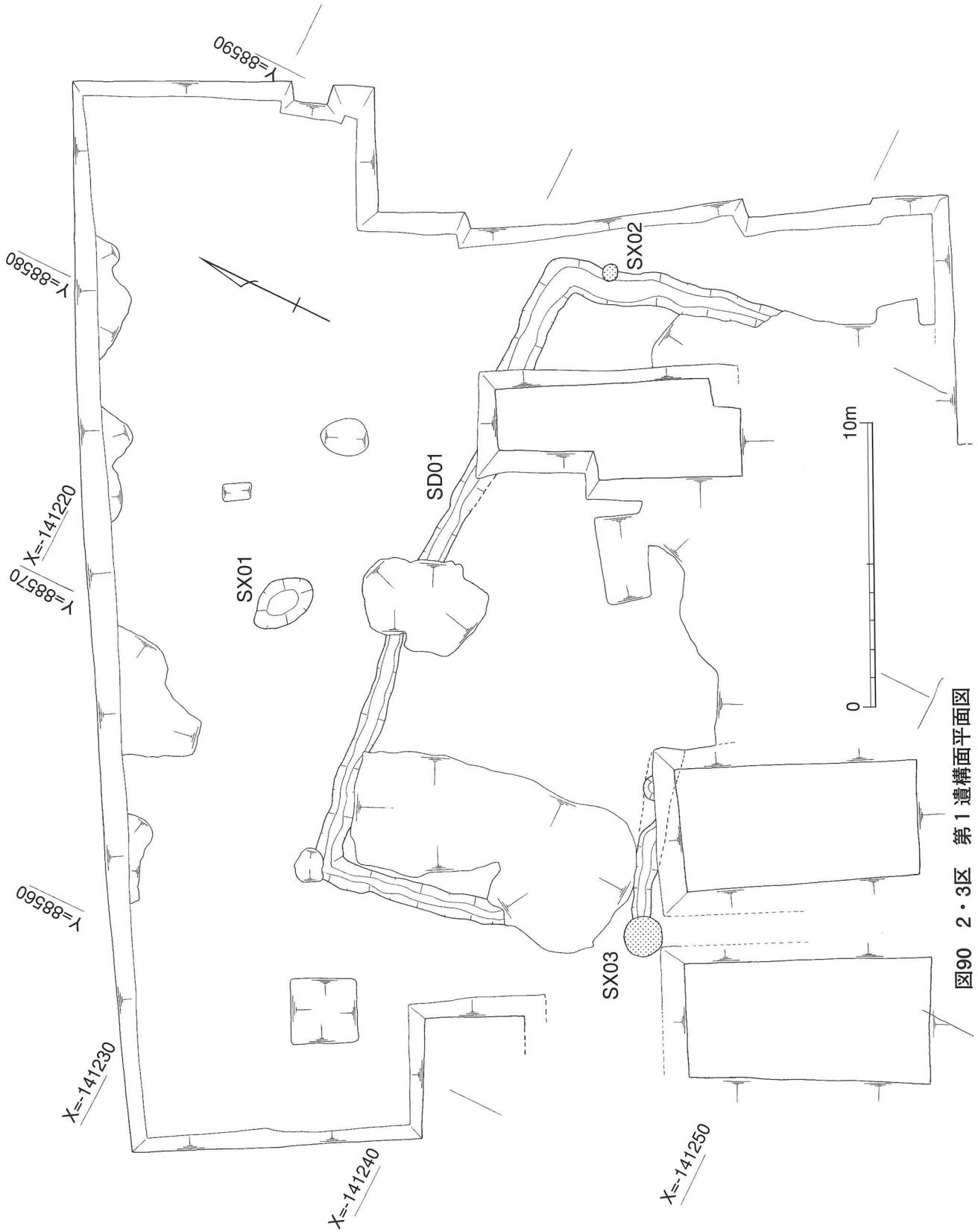


図90 2・3区 第1構造平面図

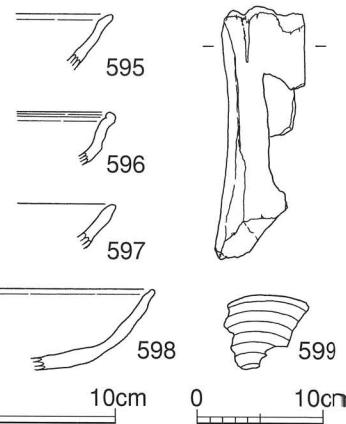


図91 SB08出土の遺物

0

10cm

0

10cm

SD01

2～3区にかけて確認した東西長24.0m、南北幅11.0mの平面形が歪な長方形に近い溝状遺構である。西南隅はS X03に切られ、東北辺はS X02に切られる。また、南辺の大部分は攪乱のため、欠損している。深さは一定しておらず、最大深さは0.19mで、断面形は鈍いV字形である。埋土は暗灰色系のシルト質細砂あるいは極細砂質シルトである。何らかの区画の施設と考えられるが、溝で囲まれた範囲には全く遺構が確認できなかったため、その性格については不明である。

出土遺物には土師器皿・高台付椀、瓦器椀、白磁碗がある。11世紀後半～末のものと考えられる。(中谷)

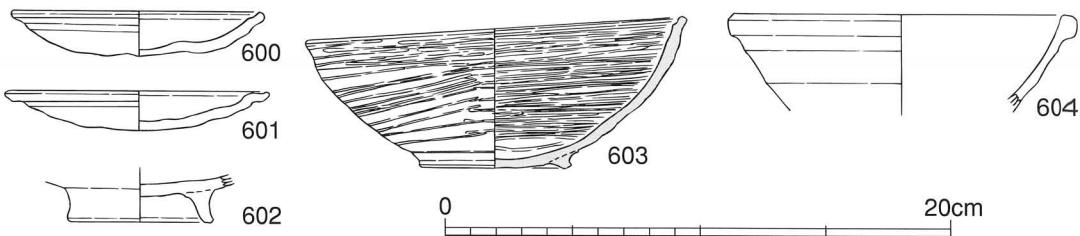
図92
SD01出土
の遺物

表21 SD01出土の土器 観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色調
600	土師器	皿	9.6	1.8		100	2mmのチャートわずかに含む	良好	淡乳色
601	土師器	皿	10.0	1.6		25	0.5～1mmのクサリレキを含む	やや良	淡乳橙色
602	土師器	椀	—	2.0	5.5	80	0.5mmのチャートを含む	良好	乳色
603	瓦器	椀	14.6	5.6	5.6	90	ほとんど砂粒を含まない	良好	黒色
604	白磁	碗	13.2	3.8		13	やや粗	良好	淡緑灰色

SD04

4区西部で確認した幅1.3～1.7m、最大深さ0.15mの溝状遺構で、総延長は約5.8mである。時期不明の浅い落ち込みに切られている。断面はU字形で、埋土は灰色小礫混じりシルト質細砂である。出土遺物には内外面ともにヘラ磨きで仕上げられた口径13.8cmの黒色土器A類の椀(605・606)と口径15.0cmの須恵器椀(607)がある。

11世紀末のものと考えられる。(阿部)

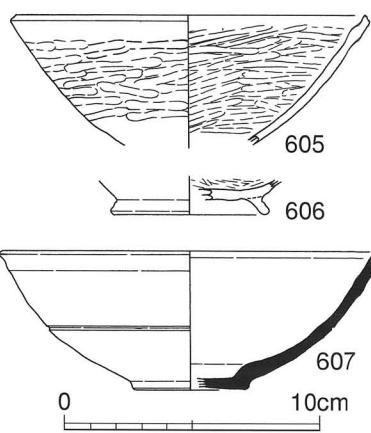


図93 SD04出土の土器

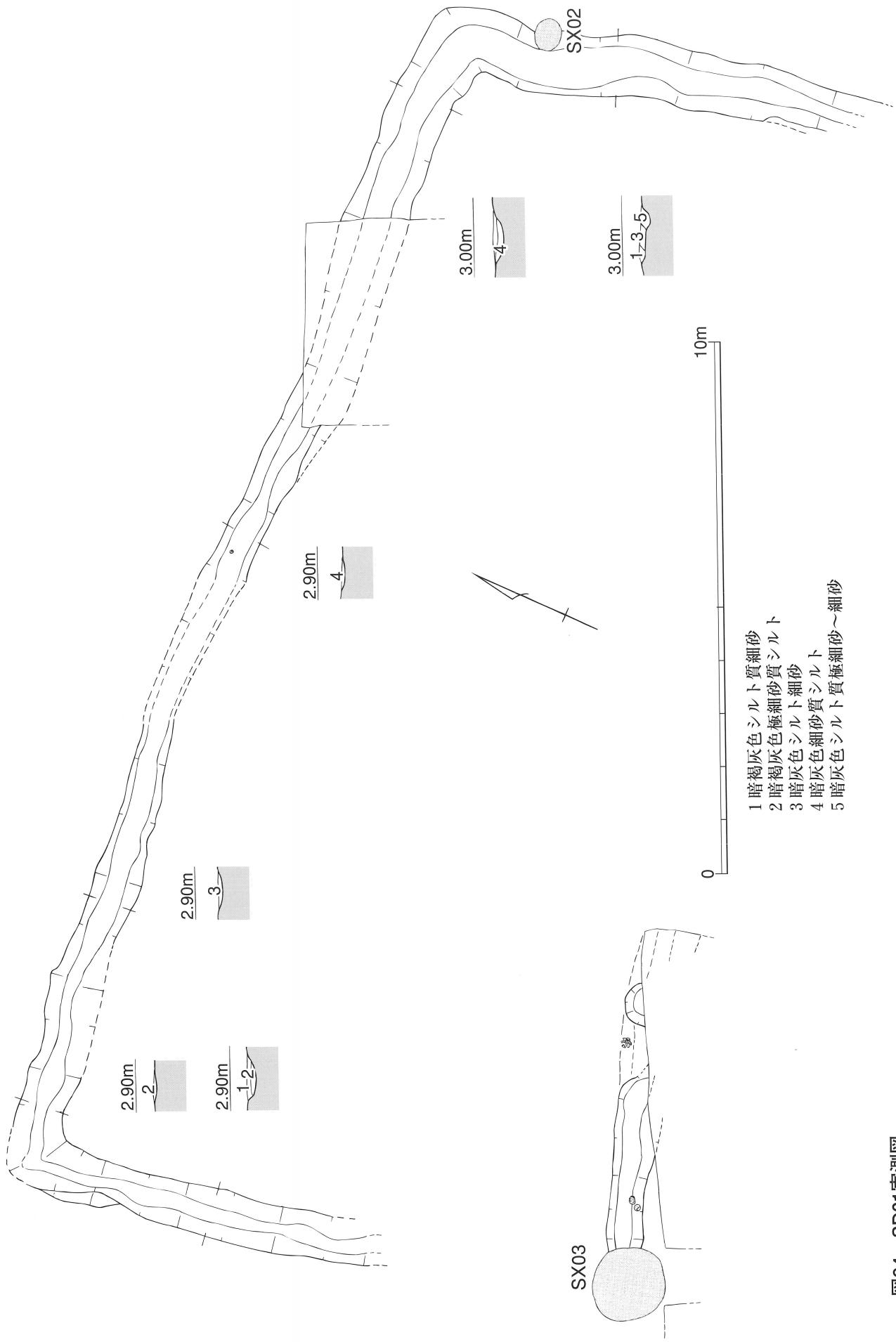


図94 SD01実測図

SX03

3区西南隅部で確認した直径1.60m、深さ0.45mのやや大型の円形の土坑で、SD01を切っている。埋土は乳灰色細砂混じりシルトで、拳大から半身大の花崗岩礫が盛り上がるよう投げ入れられた集石土坑で、中には人頭大の竜山石や砥石様の川原石も含まれている。花崗岩礫には明らかに被熱を受けたものも含まれる。

出土遺物には口径9.0～10.7cmで、口縁部が「て」の字状の土師器小皿（608・609）と、外縁が面取り状の削り調整で、底部外縁が敲打によって仕上げられた底径17.2cmの滑石製石鍋底部（610）がある。石鍋の内面は極めて平滑で、外縁には煤が厚く付着している。

土師器皿の特徴から、11世紀末のものと考えられる。

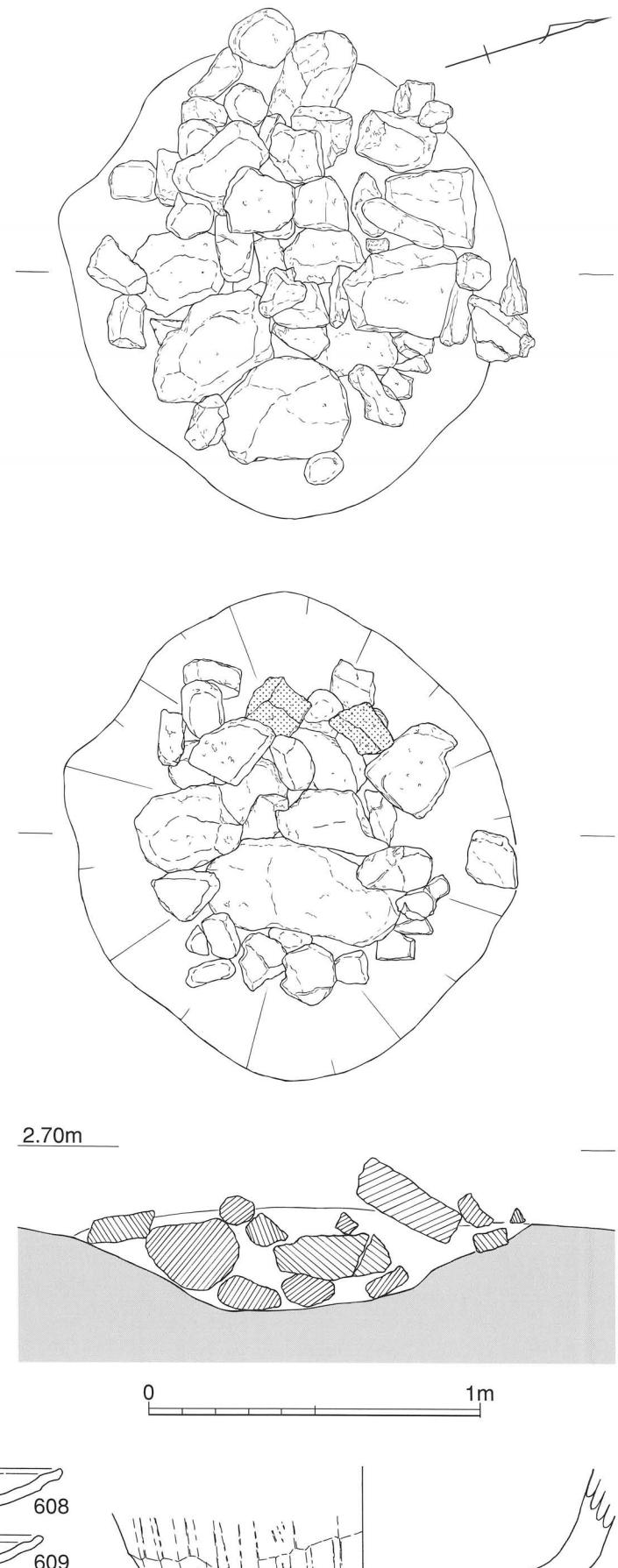
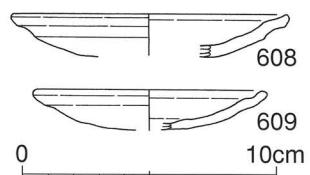


図95 SX03実測図

図96 SX03出土の遺物



S X01

2区中央部で確認した不整形の落ち込みで、長径2.4m、短径1.6m、深さ0.15mである。埋土は暗灰褐色シルト質極細砂～細砂あるいは暗褐灰色シルト質細砂である。出土遺物には土師器・須恵器の小片がある程度で、図化できるものはない。(山本)

S X02

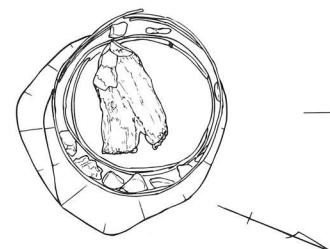
3区東部で確認した水溜め遺構で、S D01を切っている。直径0.56m、深さ0.32mの不整円形の掘形内に接するように、ヒノキあるいはヒノキ属と同定された円形曲物が据えられている。

下段の曲物側板(614)は直径44.0cm、残存高20.0cm、厚さ0.5cmで、内面には上下縁に直交するケビキが入れられている。綴じ部分の樺皮は1列内4段綴じである。外面にはもともと上下縁にそれぞれ帶板が取り付いていたようで、下段帶板は2列前内2段後内2段の樺皮で綴じられた上、欠損する底板とともに木釘で結合されていたものと考えられる。上段帶板(613)は2列前内3段後内2段の樺皮で綴じられた部位が遺存する程度である。

掘形上段に据えられていた曲物側板(612)は直径48.6cm、残存高13.4cm、厚さ0.5cmで、綴じ目は1列内4段で、内面にはケビキが顕著である。もともと(612)と同一個体と推定される帶板(611)は直径49.0cm、高さ6.2cm、厚さ0.2cmで、綴じ目は2ヶ所あり、2列前内3段外内2段と1列内2段で構成される。

(615)は曲物内に放り込まれた木材で、長さ28.8cm、最大直径19.8cmで、ヤナギ属と同定されている。幹の又部を切断したもので、3方の小口ともに切断の際の加工痕が明瞭に遺存する。さらに、加工を行うために水漬けにしていたものと考えられる。

なお、出土土器はなく、詳細な時期は不明であるが、S D01とほぼ同時期と考えている。(阿部)



2.70m

2.70m

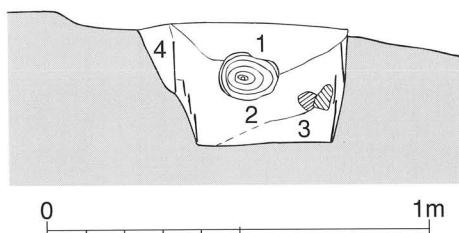


図97 SX02実測図

- 1 淡黒灰色シルト質細砂
- 2 黒灰色礫混シルト～細砂
- 3 淡灰色小礫混細砂
- 4 暗灰色小礫混シルト質細砂